

2021年度
大学院国際文化研究科
講義概要 (シラバス)



法政大学

科目一覽

【発行日：2021/5/1】最新版のシラバスは、法政大学 Web シラバス (<https://syllabus.hosei.ac.jp/>) で確認してください。

【X2001】	国際文化研究A [石森 大知、田島 樹里奈] 春学期授業/Spring	1
【X2002】	国際文化研究B [重定 如彦、市岡 卓] 秋学期授業/Fall	2
【X2003】	国際文化共同研究A [輿石 哲哉、市岡 卓] 春学期授業/Spring	3
【X2004】	国際文化共同研究B [今泉 裕美子、市岡 卓] 秋学期授業/Fall	4
【X2005】	多言語相関論ⅡA [大野 ロベルト] 春学期授業/Spring	5
【X2006】	多言語相関論ⅡB [大野 ロベルト] 秋学期授業/Fall	6
【X2007】	多言語相関論ⅢA [輿石 哲哉] 春学期授業/Spring	7
【X2008】	多言語相関論ⅢB [輿石 哲哉] 秋学期授業/Fall	8
【X2009】	多文化相関論ⅡA [熊田 泰章] 春学期授業/Spring	9
【X2010】	多文化相関論Ⅲ [佐々木 一恵] 春学期授業/Spring	10
【X2011】	多文化芸術論Ⅰ [佐藤 千登勢] 春学期授業/Spring	11
【X2012】	異文化社会論ⅠA [今泉 裕美子] 春学期授業/Spring	13
【X2013】	異文化社会論ⅠB [今泉 裕美子] 秋学期授業/Fall	14
【X2014】	ナショナリズム／エスニシティ論A [石森 大知] 春学期授業/Spring	15
【X2015】	ナショナリズム／エスニシティ論B [石森 大知] 秋学期授業/Fall	16
【X2016】	マイノリティ社会論A [曾 士才] 春学期授業/Spring	17
【X2017】	マイノリティ社会論B [曾 士才] 秋学期授業/Fall	18
【X2018】	ジェンダー論 [佐々木 一恵] 秋学期授業/Fall	19
【X2019】	多言語社会論A [大中 一彌] 春学期授業/Spring	20
【X2020】	多言語社会論B [大中 一彌] 秋学期授業/Fall	22
【X2021】	多民族共生論ⅠA [松本 悟] 春学期授業/Spring	23
【X2022】	多民族共生論ⅠB [松本 悟] 秋学期授業/Fall	24
【X2023】	多民族共生論ⅡA [高柳 俊男] 春学期授業/Spring	25
【X2024】	多民族共生論ⅡB [高柳 俊男] 秋学期授業/Fall	27
【X2025】	国際ジャーナリズム論 [神林 毅彦] 秋学期授業/Fall	28
【X2026】	国際文化交流論ⅡA [木村 真] 秋学期授業/Fall	29
【X2040】	比較宗教文明論 [白杵 陽] 秋学期授業/Fall	30
【X2027】	多文化情報空間論ⅠA [森村 修] 春学期授業/Spring	31
【X2028】	多文化情報空間論ⅠB [森村 修] 秋学期授業/Fall	32
【X2029】	多文化情報メディア論Ⅱ [重定 如彦] 秋学期授業/Fall	34
【X2030】	Thesis Writing A [ジェイソン ポール スミス] 春学期授業/Spring	35
【X2031】	Thesis Writing B [ジェイソン ポール スミス] 秋学期授業/Fall	36
【X2032】	Oral Presentation [MARK E FIELD] 秋学期授業/Fall	37
【X2033】	国際協力論 [松本 悟] 春学期授業/Spring	38
【X2034】	国際人権論 [藤岡 美恵子] 春学期授業/Spring	39
【X2035】	多文化情報ネットワーク論A [和泉 順子] 春学期授業/Spring	40
【X2036】	多文化情報ネットワーク論B [和泉 順子] 秋学期授業/Fall	41
【X2037】	国際文化研究日本語論文演習A [浅利 文子] 春学期授業/Spring	42
【X2038】	国際文化研究日本語論文演習B [浅利 文子] 秋学期授業/Fall	43
【X2039】	国際文化研究日本語論文演習C [浅利 文子] 春学期授業/Spring	44
【X2051】	修士論文演習A (代表シラバス) [輿石 哲哉、岩川 ありさ] 春学期授業/Spring	45
【X2052】	修士論文演習B (代表シラバス) [輿石 哲哉、岩川 ありさ] 秋学期授業/Fall	46
【X2053】	修士論文演習A [栗飯原 文子] 春学期授業/Spring	47
【X2054】	修士論文演習B [栗飯原 文子] 秋学期授業/Fall	48
【X2055】	修士論文演習A [岩川 ありさ] 春学期授業/Spring	49
【X2056】	修士論文演習B [岩川 ありさ] 秋学期授業/Fall	50
【X2057】	修士論文演習A [佐藤 千登勢] 春学期授業/Spring	51
【X2058】	修士論文演習B [佐藤 千登勢] 秋学期授業/Fall	52
【X2059】	修士論文演習A [曾 士才] 春学期授業/Spring	53
【X2060】	修士論文演習B [曾 士才] 秋学期授業/Fall	54
【X2061】	修士論文演習A [高柳 俊男] 春学期授業/Spring	55
【X2062】	修士論文演習B [高柳 俊男] 秋学期授業/Fall	56
【X2063】	修士論文演習A [松本 悟] 春学期授業/Spring	57

【X2064】	修士論文演習 B [松本 悟] 秋学期授業/Fall	58
【X2065】	修士論文演習 A [森村 修] 春学期授業/Spring	59
【X2066】	修士論文演習 B [森村 修] 秋学期授業/Fall	60
【X2067】	修士論文演習 A [熊田 泰章] 春学期授業/Spring	61
【X2068】	修士論文演習 B [熊田 泰章] 秋学期授業/Fall	62
【X2069】	修士論文演習 A [輿石 哲哉] 春学期授業/Spring	63
【X2070】	修士論文演習 B [輿石 哲哉] 秋学期授業/Fall	64
【X2101】	博士論文演習 I A (代表シラバス) [輿石 哲哉、岩川 ありさ] 春学期授業/Spring	65
【X2102】	博士論文演習 I B (代表シラバス) [輿石 哲哉、岩川 ありさ] 秋学期授業/Fall	66
【X2103】	博士論文演習 II A (代表シラバス) [輿石 哲哉、岩川 ありさ] 春学期授業/Spring	67
【X2104】	博士論文演習 II B (代表シラバス) [輿石 哲哉、岩川 ありさ] 秋学期授業/Fall	68
【X2105】	博士論文演習 III A (代表シラバス) [輿石 哲哉、岩川 ありさ] 春学期授業/Spring	69
【X2106】	博士論文演習 III B (代表シラバス) [輿石 哲哉、岩川 ありさ] 秋学期授業/Fall	70
【X2110】	博士論文演習 I A [高柳 俊男] 春学期授業/Spring	71
【X2111】	博士論文演習 I B [高柳 俊男] 秋学期授業/Fall	72
【X2107】	博士論文演習 II A [佐々木 一恵] 春学期授業/Spring	73
【X2108】	博士論文演習 II B [佐々木 一恵] 秋学期授業/Fall	74
【X2121】	博士ワークショップ I A [輿石 哲哉、石森 大知] 春学期授業/Spring	75
【X2122】	博士ワークショップ I B [輿石 哲哉、石森 大知] 秋学期授業/Fall	76
【X2123】	博士ワークショップ II A [輿石 哲哉、石森 大知] 春学期授業/Spring	77
【X2124】	博士ワークショップ II B [輿石 哲哉、石森 大知] 秋学期授業/Fall	78
【X2125】	博士ワークショップ III A [輿石 哲哉、石森 大知] 春学期授業/Spring	79
【X2126】	博士ワークショップ III B [輿石 哲哉、石森 大知] 秋学期授業/Fall	80

OTR500G1 - 001

国際文化研究 A

石森 大知、田島 樹里奈

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本研究科の特徴のひとつである「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」3領域の学際性について、その醸成を促進し、狭いタコソポ的専門性からの脱却を図ると同時に各領域の特徴を明確にするために、必修科目である「国際文化研究 A」「国際文化研究 B」においては、必読文献を読み連ねる。加えて、本研究科において学位論文執筆に必要となる研究方法・手続きなどについても学ぶ。

(*なお、扱われる「4つのテーマ」についてその順序が前後する場合には、初回授業などにおいてその旨を学生に通知する。)

【到達目標】

- (1) 国際文化研究の広がり及可能性を入門のレベルで理解できること。
- (2) 国際文化研究を行うための方法論を理解できること。
- (3) 大学院で研究を遂行する上での手続き・心得を理解できること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

必読文献を以下によって選定し、読み重ねる。

- (1) 本研究科修士課程生全員が習得すべき基礎的文献を、全専任教員が1本ずつ選定し、選者による簡単な解説・選定理由等を加えて、「国際文化研究科リーディングリスト基礎編」を用意する。
- (2) この基礎文献は各教員の専門分野の専門書である必要はなく、本研究科で各院生が学際性・専門性を育てる際に必須となる骨格形成に主眼を置く。また、さまざまな入試経路の本研究科修士1年生のレベルを基準まで引き上げることも重要な点である。
- (3) 基礎文献は1本20～30ページ程度で、雑誌論文または書籍1～2章分を目途とし、日本語文献（適書がない場合、英語も可）とする。
- (4) 授業3回を1セットとして、基礎文献を1本ずつ取り上げ討議する。当該文献を選定した教員はディスカッサントとして参加し、教員、学生の双方向による討議の活性化を図る。そのさい、学生からのコメントや質問等に対するフィードバックも行う。
- (5) 大学院における研究遂行のために、注意すべき手続き・心得などについても教示する。
- (6) 本授業は、Zoomを用いたリアルタイム・オンライン授業とする(変更がある場合は、学習支援システム等を通して事前に通知する)。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	・自己紹介・関心紹介 ・文献リストを配布し、このセメスターで読む文献を確定する。
2	テーマ1：リサーチデザイン（第一回）	・大学院における学習・研究について解説する。 ・受講学生たちのこれまでの研究状況を確認する。
3	テーマ1：リサーチデザイン（第二回）	・引き続き、大学院における学習・研究について解説する。 ・研究計画作成の重要性について意識を高める。

4	図書館ガイダンス（第三回）	・図書館員による図書館ガイダンスを利用しつつ、法政大学図書館を介した文献調査のイロハを学ぶ。
5	テーマ2：質的調査（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
6	テーマ2：質的調査（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
7	テーマ2：質的調査（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
8	テーマ3：歴史分析（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
9	テーマ3：歴史分析（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
10	テーマ3：歴史分析（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
11	テーマ4：映像分析（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
12	テーマ4：映像分析（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
13	テーマ4：映像分析（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
14	補足授業 まとめ	・これまでの議論を踏まえて補足授業を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を読みこむことは当然ながら、それ以上に自分なりに議論を整理し、問題点・疑問点を準備して授業に臨むこと。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

上記の方法によって選定された輪読文献を用いる。

【参考書】

各授業において必要に応じて提示する。

【成績評価の方法と基準】

成績評価は、下記の①+②+③の提出物などを総合的に判断して行う。
①リサーチデザイン（テーマ1） ②3つのテーマ（テーマ2・3・4）ごとに「ミニ課題」と「レジュメ」にて採点：20%×4 ③「期末レポート」：20%

以上の合計100%となる。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

大学院における初年次教育に当たる授業でもあるため、できるだけ学生同士の議論ができるような雰囲気・授業の流れを実現できるように心がけた。

【学生が準備すべき機器他】

課題提出等は、主に学習支援システムを通して行う。

【その他の重要事項】

修士課程1年は必ず履修すること。

【Outline and objectives】

This course introduces the foundations of the intercultural communication studies according to three domains of interdisciplinary research: multicultural interrelations, multiethnic coexistence and multicultural informatics.

国際文化研究 B

重定 如彦、市岡 卓

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本研究科の特徴のひとつである「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」3領域の学際性について、その醸成を促進し、狭いタコソボ的専門性からの脱却を図ると同時に各領域の特徴を明確にするために、必修科目である「国際文化研究 A」「国際文化研究 B」においては、必読文献を読み連ねる。春学期の「国際文化研究 A」で修得した文献購読の力をさらに伸ばし、研究の方法論についての理解を深める。なお、今年度は本研究科で学位論文執筆に必要となる研究方法についても学ぶ。

【到達目標】

- (1) 国際文化研究の広がり可能性を入門のレベルで理解できること
- (2) 国際文化研究を行うための方法論を理解できること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

必読文献を以下によって選定し、読み重ねる。

- (1) 本研究科修士課程生全員が習得すべき基礎的文献を、全専任教員が1本ずつ選定し、選者による簡単な解説・選定理由等を加えて、「国際文化研究科リーディングリスト基礎編」を用意する。
- (2) この基礎文献は各教員の専門分野の専門書である必要はなく、本研究科で各院生が学際性・専門性を育てる際に必須となる骨格形成に主眼を置く。また、さまざまな入試経路の本研究科修士1年生のレベルを基準まで引き上げることも重要な点である。
- (3) 基礎文献は1本20～30ページ程度で、雑誌論文または書籍1～2章分を目途とし、日本語文献（適書がない場合、英語も可）とする。
- (4) 授業3回を1セットとして、基礎文献を1本ずつ取り上げ討議する。当該文献を選定した教員はディスカッサントとして参加し、教員、学生の双方向による討議の活性化を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	文献リストを配布し、このセメスターで読む文献を確定する。
2	テーマ1（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
3	テーマ1（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
4	テーマ1（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
5	テーマ2（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
6	テーマ2（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
7	テーマ2（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
8	テーマ3（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
9	テーマ3（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
10	テーマ3（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
11	テーマ4（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
12	テーマ4（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
13	テーマ4（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。

これまでの議論を踏まえて補足授業を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を読み、自分なりに議論を整理し、問題点・疑問点を準備して授業に臨むこと。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

上記の方法によって選定する必読文献を用いる。

【参考書】

必要に応じて、指示する。

【成績評価の方法と基準】

4つのテーマごとの課題提出（60%）と授業中の討論への貢献（40%）によって評価する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

大学院の本授業では授業改善アンケートを実施していないので、特になし

【学生が準備すべき機器他】

課題提出等は学習支援システムを通して行う。

【その他の重要事項】

修士課程1年は必ず履修すること。

【Outline and objectives】

This course is the continuation of the spring semester, and is required for all the 1st year graduate students. It provides students with a general scope in three prominent research areas of this graduate school, and attempts to cultivate desirable views to encompass in such a broad cross-disciplinary environment.

OTR600G1 - 003

国際文化共同研究 A

興石 哲哉、市岡 卓

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本研究科では、「多文化相関」「多文化共生」「多文化情報空間」の三領域が今日的な研究課題のスコープの中で深く連関することを学んでいきますが、本科目は、テーマ設定・リサーチ等を共有しながら、それが自らの研究で達成できているか確認していくことを目的とします。

受講者は、自らの研究発表を蓄積し、それを共有・公開することにより、問題意識や研究成果を外に発信して共有していく研究スタイルを身につけていきます。

その上で、上記の研究スタイルを身につけることを通じて、各自の研究の中に、本研究科の特色である「学際的志向の強みを編み込んでいく」ことを目指します。

【到達目標】

上記のテーマを念頭におきながら、受講者各自が修士論文を完成させることが第一の到達目標です。

その中で、特に、既存の学問の枠組みから飛び出して学際的なアプローチをしていくこと、「今、ここ、自分」といった切実な問題として、研究対象を捉えていくことを目指します。

また、「部屋にこもって、一人でしっかりと学級を極める」タイプの研究から踏み出し、自ら外に発信しつつ、他者の研究テーマについても一緒に考えていく中で、発信すること、研究と一緒にやっていくことの意義を実感していくことも、到達目標として掲げます。「共同研究」と取って代わっているのは、そういう意味があるのです。

さらに、プレゼンテーション（プレゼン、発表）には delivery（表出の仕方）のテクニックがありますし、論文には引用、注の付け方などの規則がありますが、そういうことについても再度確認しながら身につけていくことも、目標の一つです。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

基本的にオンラインでの開講となります。本授業の基本的な授業計画はシラバスに沿って進めますが、変更がある場合には、「学習支援システム」で提示いたします。本授業の開始日はまでに具体的なオンラインの授業方法などを同システムで提示します。

発表者（プレゼンター）は自分のプレゼンに関するレジュメ等を作成し、プレゼンを行い、出席者皆で討論していきます。プレゼンター以外の受講生は、疑問点・意見等を準備した上で、討論に参加します。

修士論文構想発表会を大きな節目と捉え、それに向けて進捗状況や、研究上の悩み・問題点などを受講者・教員間で共有していきます。

上記の節目を意識しながら、受講者の「書く行為による成果物」（例えば、報告書・論文など）についても、その内容、論の提示の仕方、形式などについて、随時指導していきます。

受講者の質問等には、授業時、あるいは授業後に「学習支援システム」あるいは個人メール等を用いてフィードバックを行います。そのようななかたちで、毎回の授業の成果の共有・蓄積を図ります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	<ul style="list-style-type: none"> 授業の進め方について周知する。 発表のスケジュールを立てる。 受講者の研究の進捗状況について報告してもらう。
第2回	論文の書き方について	<ul style="list-style-type: none"> 論文を書くことの意味と書き方について確認する。
第3回	発表とその指導	<ul style="list-style-type: none"> 学生2名による発表 質疑応答。 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。
第4回	発表とその指導	<ul style="list-style-type: none"> 学生2名による発表 質疑応答。 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。
第5回	発表とその指導	<ul style="list-style-type: none"> 学生2名による発表 質疑応答。 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。

第6回 発表とその指導

- 学生2名による発表
- 質疑応答。
- 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。

第7回 発表とその指導

- 学生2名による発表
- 質疑応答。
- 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。

第8回 前半総括・その他

- 前半の発表の総括、いい点は何か見つけつつ、悩み・問題点等の共有と、その解決を図る。

第9回 発表とその指導

- 学生2名による発表
- 質疑応答。
- 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。

第10回 発表とその指導

- 学生2名による発表
- 質疑応答。
- 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。

第11回 発表とその指導

- 学生2名による発表
- 質疑応答。
- 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。

第12回 発表とその指導

- 学生2名による発表
- 質疑応答。
- 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。

第13回 発表とその指導

- 学生2名による発表
- 質疑応答。
- 発表の delivery、論文の書き方などについての指導（随時行う）。

第14回 総括

- 授業の総括、いい点は何か見つけつつ、悩み・問題点等の共有と、それらの解決を図る。これ以降どう進めたらいいか考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 発表者は、各自レジュメ、プレゼン・スライド等を作成し、自らの発表を用意する。
- 発表回のみならず、常に修士論文の執筆を念頭に置き、意味をかみしめながら、「書くという行為」を積極的に行う。
- 発表者以外の受講者は、発表者の内容を可能な限り授業で検討できるよう、発表の内容に関する事柄を調べておく。さらに、発表者に対する質問・コメント等を用意しておく。
- 修士論文のよりよい完成を目指すために、本授業を積極的に活用する。
- 授業後に、指摘された点を見直したり、関連文献等を積極的に読んだりすることで、自分の視点を広げていく。

【テキスト（教科書）】

随時指定しますが、取りあえずは、以下のものを用意してください。

- 斉藤孝・西岡達裕(2005)、『学術論文の技法』[新訂版]、東京：日本エディタースクール出版部。（論文の基本的な形式等については、この本を中心に解説します。）
- 刈谷武彦(2002)、『知的複眼思考法 誰でも持っている想像力のスイッチ』、東京：講談社。（通読することで、読む・書くという行為の意味を再確認させてくれます。）

【参考書】

授業において適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

発表 70 %

討論への参加度・貢献度 30 %

上記はあくまで目安であり、担当者の協議により、必ずしも数値化に寄らない側面も考慮することがありますが、ご理解ください。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

新規担当につき、特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

辞書・パソコンなど。

【その他の重要事項】

- 1) 受講者数により、発表の回数が増減することがあります。
- 2) 修士課程2年目の春学期の科目であることを、特に意識して運営していきます。従って、修士論文の基本方針等を固めていくことを念頭に置き進めていきます。
- 3) 発信していくことは、それだけでも意味があることです。それを意識し、同時に自分と異なった意見を受け入れていく姿勢を身につけます。
- 4) 問題と同次元で「ベタに」（あるいは「ガチに」といってもいいかも）問題に取り組むだけでなく、より高い次元で、自分の研究の意味に括弧を付けてその意味を問いかけていく、「メタな」取り組みを取り入れる必要があります。是非、ある時点で立ち止まって考えてみてください。
- 5) 「論文を書く」というのは、自分の研究してきたことに自分自身で「区切りをつける」仕事でもあります。そのことを意識し、必要な文献等をしっかりと読み込み、執筆に向けての準備をしてください。

【担当教員の専門分野等】

興石

<専門領域>英語学・言語学

<研究テーマ>英語の通時・共時形態論
 <主要研究業績> *Collateral Adjectives and Related Issues* (2011, Bern: Peter Lang)
 市岡
 <専門領域>政治社会学
 <研究テーマ>民族・宗教と政治社会との関わり
 <主要研究業績> 『シンガポールのムスリム：宗教の管理と社会的包摂・排除』 明石書店、2018年。

【カリキュラム上の位置づけ】

修士論文を完成される年度の前半に配当され、「国際文化研究 A, B」の延長線上で、かつ秋学期の「国際文化共同研究 B」の直前の科目です。この科目は修士1年目での研究の上に、いよいよ修士論文執筆を視野に入れる点で、極めて重要な意味を持ちます。

【Outline and objectives】

With respect to our Graduate School, it is of fundamental importance to study how the three fields —‘Intercultural Correlation Studies’, ‘Multiculturalism Studies’, and ‘Multicultural Information Space Studies’ — are intertwined with each other in the scope of today’s research enquiries. The objective of this course is to make sure that your own graduate research attain that by sharing your own theme settings and research results.

By the end of course, you should be able to acquire a research style, wherein you disseminate your own problem awareness and research results by accumulating, sharing and publicising your own research results.

Besides that, through this acquisition process, you are expected to go up to the stage where you can make this ‘strong point of our graduate school interwoven’ with your own research.

OTR600G1 - 004

国際文化共同研究 B

今泉 裕美子、市岡 卓

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目は、修士論文の完成に向けて、受講する2年次の院生と教員で切磋琢磨する授業で、1年次の「国際文化研究 A」「国際文化研究 B」、2年次春学期の「国際文化共同研究 A」の延長線上にある。

「共同研究」というと、通常は共通テーマのもと、複数人が分担しながらともに研究することを意味するが、この場合の「共同」には、修士論文作成という共通の課題に向けて、それぞれ知恵を出し合い、協力し合う意味が込められている。

研究科の3領域、すなわち「異文化相関関係」「多文化共生」「多文化情報空間」に目配りしつつ、自分の研究の位置づけや方法論などを他者のそれと比較し、再検証することを通して、より完成度の高い論文を目指す。

とりわけ、本研究科の特色である学際的思考を組み込んでいく。

【到達目標】

上記の「授業の概要と目的」を念頭に置き、受講者各自がそれに見合った修士論文を完成させることを、本科目の最大の到達目標とする。

一定の構成・分量と主張をもつ論文の執筆は、誰にとってもたやすいことではない。一人で悩んだり、壁にぶつかって立ち往生することなく、同様の課題に直面している他の受講生からアドバイスをもらい、この道の先輩である教員の体験を聴くことで、困難な作業を順調に進めることができるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文の進捗状況に関する受講者の発表を中心に進めていく。発表者はレジュメもしくはパワーポイントを作成して発表を行い、他の出席者からの疑問・意見・助言等をまじえ、全員で討論していく。

修士論文中間発表会、修士論文の提出を二つの大きな節目と捉え、それに向けての進捗状況や研究上の悩み・問題点を受講者・教員間で共有していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	自分の研究テーマを中心とした自己紹介、本授業の進め方とスケジュール決定。
2	修士論文中間発表(1)	発表者1、2、3による1回目の発表。7月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
3	修士論文中間発表(2)	発表者4、5、6による1回目の発表。7月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
4	修士論文中間発表(3)	発表者7、8、9による1回目の発表。7月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
5	修士論文中間発表(4)	発表者10、11、12による1回目の発表。7月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
6	修士論文中間発表(5)	発表者13による1回目の発表および発表者1による2回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にししながら、進捗状況を報告する。
7	修士論文中間発表(6)	発表者2、3による2回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にししながら、進捗状況を報告する。
8	修士論文中間発表(7)	発表者4、5による2回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にししながら、進捗状況を報告する。

9	修士論文中間発表 (8)	発表者 6、7 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
10	修士論文中間発表 (9)	発表者 8、9 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
11	修士論文中間発表 (10)	発表者 10、11 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
12	修士論文中間発表 (11)	発表者 12、13 による 2 回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
13	論文提出前ディスカッション	修士論文提出を間近に控え、各自が直面している問題や課題について議論し、その解決策等を検討する。
14	まとめ	提出した修士論文を振り返り、反省会を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- (1) 自分の発表時に出された質問・批判・助言などを参考にし、常に自分の論文の質を高めるよう努めること。
- (2) 他者の発表時に得られたヒントや着想を、常に自らの論文に活かし、質の向上をはかること。
- (3) 自分の研究テーマを常に頭の片隅におき、アイデアを遊ばせながら日常生活を送ること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

自分の発表時の内容 40%、他者の発表時の貢献度 30%、平常点 30% を目安に、総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

指導教員と連絡を密に取り、できるだけ早い時期から執筆に取りかかるよう指導する。

【学生が準備すべき機器他】

パワーポイントなどを使って報告する場合は、パソコンを持参し、プロジェクターの準備をしておくこと。

【その他の重要事項】

受講生の人数によって、授業計画が変更される場合もある。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to enhance participants' knowledge and methodologies in three key areas of study - intercultural correlation studies, multiculturalism studies, and multicultural information space studies.

At the end of the course, participants are expected to improve their interdisciplinary thinking and to write up the Master's thesis/the Research paper.

LIN500G1 - 103

多言語相関論Ⅱ A

大野 ロベルト

サブタイトル：パロディと文化

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

パロディという概念を軸に、主に 20 世紀の様々な文学理論を追究したうえで、言語・文化・時代・メディアを横断して、様々な作品の分析や比較を行う。日本文化の伝統を出発点とするが、到達点を決定するのは参加者ひとりひとりの興味関心である。

【到達目標】

文学理論の知識を深め、それを応用して様々な言語や文化に立脚するテキストを分析し、論理的に言語化することができるようになる。必要に応じて古い文献や外国語の文献にも手を伸ばすことで読解力が向上し、「知的行動力」が身につく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP4」の達成のために重要であり、「DP3」の達成のために望ましい

【授業の進め方と方法】

リアルタイム配信型のオンライン授業として実施する。大学院の授業においては、対話を伴わないものはあり得ない。担当教員は必要に応じて講義を行うが、基本的にはファシリテーターの立場にとどまる。受講者は積極的に議論に参加すること。とくに発表の担当者には進行の中心的な役割が期待される。フィードバックは授業内にも随時行うが、学習支援システムも利用する。最後に期末レポートを提出してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方について説明する。
2	パロディとは何か	パロディの基本について講義の後、ディスカッション。
3	パロディと日本文化	日本の伝統文化におけるパロディについて講義の後、ディスカッション。
4	理論編 1	ソシユールをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
5	理論編 2	レヴィ=ストロースをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
6	理論編 3	バルトをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
7	理論編 4	ジュネットをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
8	理論編 5	デリダをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
9	実践編 1	小説とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
10	実践編 2	映画とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
11	実践編 3	舞台とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
12	実践編 4	音楽とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
13	実践編 5	サブカルチャーとパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。

14 まとめ 今学期の内容をふりかえる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回のテーマとなるテキストについては事前に丁寧に読み込み、時代背景なども調べておくこと。発表担当でない場合でも、議論に参加するために予習を怠らないこと。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

使用しない。資料は必要に応じて教員が配布する。

【参考書】

リンダ・ハッチオン『パロディの理論』未来社、1993

【成績評価の方法と基準】

発表と議論への貢献 50 %、レポート 50 %

【学生の意見等からの気づき】

本年度担当者変更によりフィードバック不可。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・課題提出等のために学習支援システム等を利用するので、必要に応じて情報端末を準備すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本文学

<研究テーマ>

古典文学およびその受容と翻訳の研究、日本文学に通底する詩学の研究、文学と権力の関係性をめぐる研究

<主要研究業績>

『土佐日記』英訳ことはじめ』『日本研究』62号、2021、69-91頁

『紀貫之 文学と文化の底流を求めて』東京堂出版、2019

『日記文化から近代日本を問う』（共著）笠間書院、2017

【Outline and objectives】

This course provides the participants with opportunities to familiarize themselves with the concept of parody: arguably one of the great tools to analyze and compare different cultures built on various languages. While the point of embarkation is set on traditional arts of Japan, the destination is up to each one of the passengers.

LIN500G1 - 104

多言語相関論Ⅱ B

大野 ロベルト

サブタイトル：パロディと文化

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

パロディという概念を軸に、主に 20 世紀の様々な文学理論を逍遙したうえで、言語・文化・時代・メディアを横断して、様々な作品の分析や比較を行う。日本文化の伝統を出発点とするが、到達点を決定するのは参加者ひとりひとりの興味関心である。

【到達目標】

文学理論の知識を深め、それを応用して様々な言語や文化に立脚するテキストを分析し、論理的に言語化することができるようになる。必要に応じて古い文献や外国語の文献にも手を伸ばすことで読解力が向上し、「知的行動力」が身につく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP4」の達成のために重要であり、「DP3」の達成のために望ましい

【授業の進め方と方法】

リアルタイム配信型のオンライン授業として実施する。大学院の授業においては、対話を伴わないものはあり得ない。担当教員は必要に応じて講義を行うが、基本的にはファシリテーターの立場にとどまる。受講者は積極的に議論に参加すること。とくに発表の担当者には進行の中心的な役割が期待される。フィードバックは授業内にも随時行うが、学習支援システムも利用する。最後に期末レポートを提出してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方について説明する。
2	パロディとは何か	パロディの基本について講義の後、ディスカッション。
3	パロディと日本文化	日本の伝統文化におけるパロディについて講義の後、ディスカッション。
4	理論編 1	チョムスキーをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
5	理論編 2	バフチンをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
6	理論編 3	エーコをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
7	理論編 4	サイドをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
8	理論編 5	フーコーをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
9	実践編 1	政治とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
10	実践編 2	教育とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
11	実践編 3	経済とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
12	実践編 4	司法とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
13	実践編 5	科学とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
14	まとめ	今学期の内容をふりかえる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回のテーマとなるテキストについては事前に丁寧に読み込み、時代背景なども調べておくこと。発表担当でない場合でも、議論に参加するために予習を怠らないこと。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

使用しない。資料は必要に応じて教員が配布する。

【参考書】

リンダ・ハッチオン『パロディの理論』未来社、1993

【成績評価の方法と基準】

発表と議論への貢献 50 %、レポート 50 %

【学生の意見等からの気づき】

本年度担当者変更によりフィードバック不可。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・課題提出等のために学習支援システム等を利用するので、必要に応じて情報端末を準備すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本文学

<研究テーマ>

古典文学およびその受容と翻訳の研究、日本文学に通底する詩学の研究、文学と権力の関係性をめぐる研究

<主要研究業績>

『土佐日記』英訳ことはじめ』『日本研究』62号、2021、69-91頁

『紀貫之 文学と文化の底流を求めて』東京堂出版、2019

『日記文化から近代日本を問う』（共著）笠間書院、2017

【Outline and objectives】

This course provides the participants with opportunities to familiarize themselves with the concept of parody: arguably one of the great tools to analyze and compare different cultures built on various languages. While the point of embarkation is set on traditional arts of Japan, the destination is up to each one of the passengers.

LIN500G1 - 105

多言語相関論Ⅲ A

興石 哲哉

サブタイトル：言語の研究方法を学ぶ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語・英語や他の言語を比較対照しながら言語研究の仕方を学んでいくことが、本授業のテーマです。国際文化研究科の研究には様々な点で言語との関係が切っても切れないものが多いですが、言語の研究法についてはテクニカルなところがあり、なかなか理解が難しいのが現実です。本授業では、それを克服すべく、基本的な文献を読みながら言語研究の基本である音声研究を学んでいきます。

【到達目標】

- 1) 言語研究の基本的な概念や方法論に習熟すること。
- 2) その概念、方法論を様々な言語に適用させ、より広い一般化の道筋を模索していくこと。
- 3) 外国語（特に英語）で文献を読むのに慣れていくこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

基本的にオンラインでの開講となります。各回の授業計画は変更はありませんが、もし変更がある場合には、「学習支援システム」で提示します。本授業の開始日までに具体的なオンライン授業の方法などを、同システムを用いて提示します。

授業は演習形式で行います。授業では学生にどんどん意味を問いかけていき、教材を日本語にしていってもらいます。この際、重要なのは、

- 1) 全員が担当箇所を前もってひと通り読んでおくこと、
- 2) 分からない場合、積極的に質問したり、意見を出し合うこと、

の2点です。課題や授業内容については、「学習支援システム」を用いて、基本的に事後に詳細なコメントを担当者が出しますので、それをさらなる研究等に活かしてください。

最終授業だけでなく、中途でも、折を見て、フィードバックの時間を設けますので、内容についての質問等には随時対処していきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
1	Introduction	本科目の概略、学習の仕方等についての説明。その上で、教材を読み始める。
2	Organs of Speech	発話に用いられるところの器官について学ぶ。
3	Speech Sounds, Classification of Vowels	言語音、母音の分類について学ぶ。
4	Classification of Vowels	母音の分類について学び、様々な言語の母音を概観する。
5	Further Classification of Vowels	母音の分類についてさらに見る。
6	Classification of Consonants	子音の分類について学ぶ。
7	Classification of Consonants	子音の発音について、様々な言語からの例を見ながら具体的に学ぶ。
8	Classification of Consonants	子音の発音について、様々な言語からの例を見ながら具体的に学ぶ。
9	Classification of Consonants, Further Analysis of Consonants	子音の発音について見た後、副次的調音について学ぶ。
10	Combination of Sounds	音の連続について学ぶ。
11	Syllables	言語の音声記述で重要な概念である音節という概念について学ぶ。
12	Quantity, Accent	音長、アクセントについてその概略を学ぶ。
13	Phonemes	言語の研究で非常に重要な概念である音素について、学ぶ。
14	Phonemes	言語の研究で非常に重要な概念である音素について、引き続き学ぶ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、必ず内容について質問しますので、必ず読んできてください。さらに関与する概念で新しいものについては、先にご自身で調べておくと、非常に理解が深まります。

まず、文献を読むべく、英語に習熟することが非常に重要です。常に英語力の向上に努めてください。発表に関しては、発表の担当者は、担当箇所をきちんと読んで、発表の準備を怠りなくすること。他の受講者も、ひと通りその箇所を読み、自分なりの意見を持つようにすること、の2点が大切です。

【テキスト（教科書）】

Takebayashi, Shigeru (1976). *A Primer of Phonetics*. Tokyo: Iwasaki Linguistic Circle.[入手困難なため、授業支援システム等により配布します。]

【参考書】

以下に、辞書と年鑑・地図を挙げておきます。
 ・高橋作太郎（編纂）『リーダーズ英和辞典』第三版、東京：研究社。
 学習者用辞書ではなく、一般用の辞書で、英語を読むには必須です。
 ・Janssen, S. (ed.) (2019). *The World Almanac and Book of Facts 2020*. New York: The World Almanac Books.
 ・Philip's Maps (2019). *Philip's Modern School Atlas*. (99th edition.) London: Philip's.

以上の2冊は、英語の文献を読むときとても役に立ちます。

【成績評価の方法と基準】

授業での発表（50%）、討論への参加（50%）。欠席は基本的に認めません。この評価法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施につき、特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・課題提出等のために学習支援システム等を利用しますので、パソコンなどの情報端末を用意することが望ましいです。

【その他の重要事項】

言語研究の基礎として、音声に関する研究のアプローチを知っておくことは非常に重要です。今回のテキストは、とても基礎的なテキストですので、初歩から言語学・音声学の考え方が分かるような構成になっています。授業では、教材の内容を理解するだけではなく、その後の理論的な流れやより詳細な情報を皆さんが得られるように、一緒に議論しながら解説を加えていきます。言語の研究の基礎固めをしたい人には、特にオススメの内容になっています。言語に興味のある他専攻の方の履修も歓迎します。なお、進め方など、履修者の状況を見ながら変更をしていくことがあります。

【担当教員の専門分野等】

言語学、英語学（形態論、統語論、音声学）、英語史など。

【カリキュラム上の位置づけ】

言語・文化に関して、比較・対照するということを軸に学んでいく2単位の科目です。（今年度は言語の研究法の基本を学んでいきます。）

【Outline and objectives】

The objective of this course is to provide you with the basic understanding of how you can conduct contrastive studies between Japanese, English, and other languages. Language is indeed a key for understanding various topics in our Graduate School. There are, however, many difficult technicalities in the research field of linguistics, to the extent that they become really high hurdles. So, this course hopefully works as an easy introduction to that research field. In this semester, we are going to do this by reading a textbook on phonetics, which constitutes the foundation of linguistic studies.

多言語相関論Ⅲ B

興石 哲哉

サブタイトル：言語の研究方法を学ぶ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語・英語や他の言語を比較対照しながら言語研究の仕方を学んでいくことが、本授業のテーマです。国際文化研究科の研究には様々な点で言語との関係が切っても切れないものが多いですが、言語の研究法についてはテクニカルなところがあり、なかなか理解が難しいのが現実です。本授業では、それを克服すべく、基本的な文献を読みながら、主に音声研究以外の言語研究の基本を固めていきます。

【到達目標】

- 1) 言語研究の基本的な概念や方法論に習熟すること。
- 2) その概念、方法論を様々な言語に適用させ、より広い一般化の道筋を模索していくこと。
- 3) 外国語（特に英語）で文献を読むのに慣れていくこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

授業は演習形式で行います。授業では学生にどんどん意味を問いかけていき、教材を日本語にしていってもらいます。この際、重要なのは、

- 1) 全員が担当箇所を前もってひと通り読んでおくこと、
- 2) 分からない場合、積極的に質問したり、意見を出し合うこと、

の2点です。

課題や授業内容については、「学習支援システム」を用いて、基本的に事後に詳細なコメントを担当者が出しますので、それをさらなる研究等に活かしてください。

最終授業だけでなく、中途でも、折を見て、フィードバックの時間を設けますので、内容についての質問等には随時対処していきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	導入、音声学と音韻論について	本科目の概略、学習の仕方等についての説明。その上で、教材を読み始める。
第2回	音韻論について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第3回	音韻論について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックをさらに議論、考察していく。
第4回	形態論について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第5回	形態論について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックをさらに議論、考察していく。
第6回	統語論について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第7回	統語論について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックをさらに議論、考察していく。
第8回	統語論について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックをより詳細に議論、考察していく。
第9回	意味論について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第10回	語用論について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックをさらに議論、考察していく。
第11回	言語と文化について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第12回	社会言語学について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第13回	言語接触について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第14回	言語変化について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、必ず内容について質問しますので、必ず読んできてください。さらに関与する概念で新しいものについては、先にご自身で調べておくと、非常に理解が深まります。

まず、文献を読むべく、英語に習熟することが非常に重要です。常に英語力の向上に努めてください。発表に関しては、発表の担当者は、担当箇所をきちんと読んで、発表の準備を怠りなくすること。他の受講者も、ひと通りその箇所を読み、自分なりの意見を持つようにすること、の2点が大切です。

【テキスト（教科書）】

基本的に、*Language Files*, 12th edition (2016 年版, Department of Linguistics, The Ohio State University, Columbus: The Ohio State University Press) を用いますが、内容は選択します。その他を用いる場合には、授業で指示します。いずれも、「学習支援システム」等を通じ配布します。

【参考書】

以下に、辞書と年鑑・地図を挙げておきます。
 ・高橋作太郎（編集）『リーダーズ英和辞典』第三版。東京：研究社。
 学習者用辞書ではなく、一般用の辞書で、英語を読むのには必須です。
 ・Janssen, S. (ed.) (2019). *The World Almanac and Book of Facts 2020*. New York: The World Almanac Books.
 ・Philip's Maps (2019). *Philip's Modern School Atlas*. (99th edition.) London: Philip's.
 以上の 2 冊は、英語の文献を読むときとても役に立ちます。

【成績評価の方法と基準】

報告、発表 (50%)、討論への参加 (50%)。場合によっては、小論文を課すこともあります (その場合、「討論への参加」に代えて、「小論文」が 50% となります)。欠席は基本的に認めません。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60% 以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施につき、特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・課題提出等のために学習支援システム等を利用しますので、パソコンなどの情報端末を用意することが望ましいです。

【その他の重要事項】

言語研究の基礎として、様々な領域の研究のアプローチを知っておくことは非常に重要です。今回のテキストは非常に基礎的なテキストで、初歩から言語の研究についての考え方が分かるように書かれています。授業では、教材の内容を理解するだけでなく、その後の理論的な流れやより詳細な情報を皆さんが得られるように、一緒に議論しながら解説を加えていきます。言語の研究の基礎固めをしたい人には、特にオススメの内容になっています。言語に興味のある他専攻の方の履修も歓迎します。なお、進め方など、履修者の状況を見ながら変更をしていくことがあります。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 英語学、音声学、言語学
 <研究テーマ> 英語の形態論を中心とする領域。
 <主要研究業績>

Koshiishi, Tetsuya (2011). *Collateral Adjectives and Related Issues*. Bern: Peter Lang.

【カリキュラム上の位置】

言語・文化に関して、比較・対照するということを軸に学んでいく 2 単位の科目です。(今年度は言語の研究法の基本を学んでいきます。)

【オフィスアワーについて】

基本的に、木曜日の昼休みに設定していますが、担当者宛にメールをいただければ、随時設定することが可能です。

【進行に関しての注記】

昨年度がそうでしたが、受講者の理解を見て、進路を遅らせます。昨年度の場合には、具体的には、11 月半ばまでを、音韻論に費やし、その後形態論に入っただけで、統語論には入りませんでした。これは、言語学の考え方そのものに、時間をかけて慣れていただくためです。

【Outline and objectives】

The objective of this course is to provide you with the basic understanding of how you can conduct contrastive studies between Japanese, English, and other languages. Language is indeed a key to understanding various topics in our Graduate School. There are, however, many difficult technicalities in the research field of linguistics, to the extent that they become really high hurdles. So, this course hopefully works as an easy introduction to that research field. In this semester, we are going to do this by reading some of the basic literature related to the fields other than phonetics.

CUA500G1 - 109

多文化相関論Ⅱ A

熊田 泰章

サブタイトル：人の表象の間文化性

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

* * 2021 年度新型コロナウイルス感染症対策による変更 * *
 大学と研究科の授業実施方針に則り、授業を実施する。原則として、Zoom 接続による同時双方オンライン授業とする。方針の変更が生じた場合、それに対応して変更することもありえる。授業概要・到達目標・成績評価などの基本事項に変更はない。

* * * *

この授業では間文化性研究の基本的考え方を理論と実例によって学ぶ。そのために、間文化的に生成された文化活動であるヨーロッパ絵画を例として取り上げる。諸文化が相互に共通点を有していることと、その共通点がゆえに相違点が際立つこと、そして、それらの共通点と相違点を相互に認識し合いながら、諸文化が間文化的関係性の中で相互に影響を与えあうことを把握する。

【到達目標】

人物表象の歴史の変遷と多文化間の共有性について把握する。表象行為の内在性と超越性について多文化横断的に把握する。古典古代のギリシャ、そしてそれ以前の古代エジプトにまで遡って、「個の肖像」の歴史をたどり、その継続を追って、ルネサンス期フランドルの肖像画とそれ以降の風俗画までを調べた後、その後の人物表象について、理解する。テキストとして使用する文献によって、個々の事例を具体的に知り、それらにおける「個の表象」の共通性を分析的に知る。「個の表象」の研究を通して、間文化性について理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

論文精読と教員の説明に基づき、学生が能動的に学ぶ大学院授業とする。絵画を通して間文化性を学ぶために、テキストとして 4 冊の研究書を順次精読し、かつ相互に参照する分析を行う。毎回、取り扱う箇所を定め、事前に履修者が内容を確認し、学術用語、固有名詞などを調べ、報告する。その報告に基づき、授業の中で内容に対するまとめと批評を行う。関連する適切な美術展を選び、作品に対する分析を行う。毎回の授業では、履修者の報告に対する講評を行って、フィードバックとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』	通時的・共時的な文化の共通性
第 2 回	ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』	ベンヤミンの今日的意義
第 3 回	ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』	ベンヤミンの限界
第 4 回	古代エジプトの「肖像画」	エジプト古王朝の人間表象
第 5 回	古代エジプトの「肖像画」	死者の表象
第 6 回	古代エジプトの「肖像画」	生者の表象
第 7 回	古代ローマの「肖像画」	古代ローマの人間表象
第 8 回	アレキサンダー大王の表象	持続し、変化する意味
第 9 回	ボンベイのパン屋夫婦の表象	個人の表象
第 10 回	ファイユームという転換期	個人の表象
第 11 回	対話する表象	私たちを見つめるまなざし
第 12 回	人間の表象の個人化	人間の表象の新たな変化
第 13 回	存在の不安	存在の不安と個人の表象
第 14 回	人間の表象に関するこのセメスターのまとめ	取り上げて、考察してきた人間の表象の変遷についての、このセメスターのまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を事前に読み、内容を確認し、学術用語等を調べる。分担発表のための準備をする。本授業の準備・復習時間は、各 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ツヴェタン・トドロフ『個の礼賛—ルネサンス期フランドル肖像画』岡田温司・大塚直子訳、白水社、2002 年

ツヴェタン・トドロフ『日常礼賛－フェルメールの時代のオランダ風俗画』塚本昌則訳、白水社、2002年
 ゴットフリート・ペーム『図像の哲学－いかにイメージは意味をつくるか』塩川千夏・村井則夫訳、法政大学出版局、2017年
 ミシェル・フーコー『マネの絵画』阿部崇訳、筑摩書房、2019年

【参考書】

ジェラルド・ジュネット『芸術の作品 I－内在性と超越性』和泉涼一訳、水声社、2013年
 ツヴェタン・トドロフ『ゴヤ－啓蒙の光の陰で』小野潮訳、法政大学出版局、2014年
 ジョン・A・ウォーカー／サラ・チャップリン『ヴィジュアル・カルチャー入門－美術史を超えるための方法論－』岸文和他訳、晃洋書房、2001年

【成績評価の方法と基準】

毎回の授業における報告に対する評価 50%と最後の期末レポート 50%によって評価する。
 具体的事例の分析と考察により、人物表象の歴史の変遷と多文化間の共有性について、及び、表象行為の内在性と超越性について、多文化横断的に把握したことを確認する。
 この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

これまでの学生の意見に基づき、学生の分担発表の計画を明確に定めます。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布と課題提出のために学習支援システムを活用します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化記号論、テキスト論

<研究テーマ>間文化性研究

<主要研究業績>

「グローバル化の原理としての記号的従属および動的編成と相互受容－個人と文化の相互的生成と変容についての一考察」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第16号、2015年
 「唯一であることの相対的価値についての試論」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第15号、2014年
 「絵画のナラトロジー－試論－知ることと見ることと語ることの本来的役割同一性についての一考察」熊田泰章編『国際文化研究への道－共生と連帯を求めて』彩流社、2013年

【Outline and objectives】

In this class, students will learn the basic concept of intercultural study on theory and examples. For that purpose, we will take European painting, an interculturally generated cultural activity, as an example. Students will understand the fact that the cultures have something in common with each other, and that the differences make them stand out, and that the cultures have an intercultural relationship while recognizing the commonalities and differences.

多文化相関論Ⅲ

佐々木 一恵

サブタイトル：歴史学の諸アプローチ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、歴史学における方法論的展開の概要を理解することを目指します。また、歴史学の方法論に基づき研究論文を執筆していただけるようになることを目的とします。

【到達目標】

1. 歴史学におけるこれまでの方法論的特徴とその展開について理解できるようになる。
2. 歴史学の方法論に基づき一次史料を用いて研究論文を書いていけるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

この授業は Zoom で行います。文献の概要を発表者がパワー・ポイントを用いて発表した後、各自が Google Classroom にアップロードしたコメントをベースにディスカッションを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1回	イントロダクション	授業概要の説明
2回	ヴィクトリア時代の公と私	【テキスト】 ◎エヴァンズ『アメリカの女性の歴史』4章
3回	南北戦争と女性	【テキスト】 ◎エヴァンズ『アメリカの女性の歴史』5章
4回	母性的国家	【テキスト】 ◎エヴァンズ『アメリカの女性の歴史』6章
5回	新しい女と近代	【テキスト】 ◎エヴァンズ『アメリカの女性の歴史』7章
6回	フラッパー、フロイト、ジャズの時代	【テキスト】 ◎エヴァンズ『アメリカの女性の歴史』8章
7回	黒人ゲトの成立と家族	【テキスト】 ◎竹中興慈『シカゴ黒人ゲト』6章
8回	新黒人エリート層とコミュニティ	【テキスト】 ◎竹中興慈『シカゴ黒人ゲト』7章
9回	黒人ゲトと黒人教会	【テキスト】 ◎竹中興慈『シカゴ黒人ゲト』8章、9章
10回	黒人政治の境界性	【テキスト】 ◎竹中興慈『シカゴ黒人ゲト』10章
11回	女性と財産、経済	【テキスト】 ダヴィドフ、ホール『家族の命運』6章
12回	男性、女性、公共圏	【テキスト】 ダヴィドフ、ホール『家族の命運』10章
13回	ジェンダーと史学史 (1)	【テキスト】 ダヴィドフ、ホール『家族の命運』エピソード前半
14回	ジェンダーと史学史 (2)	【テキスト】 ダヴィドフ、ホール『家族の命運』エピソード後半

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・文献を読み、自分が関心を持った概念や内容について、意見をまとめて Google Classroom に授業が始まる 1 時間前までにアップロードしてください。
- ・文献の発表者はレジュメをパワー・ポイントで作成してください。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

- ◎サラ・M・エヴァンズ（小椋山ルイ、竹俣初美、矢口佑人訳）『アメリカの女性の歴史』明石書店、1997年。
- ◎竹中興慈『シカゴ黒人ゲト成立の社会史』明石書店、1995年。

○ L・ダヴィドフ、C・ホール（山口みどり、梅垣千尋、長谷川貴彦訳）『家族の命運—イングランド中産階級の男と女、1780-1850』名古屋大学出版会、2019年。

【参考書】

授業内で紹介します。

【成績評価の方法と基準】

授業への貢献度・参加度・提出物（30点）、発表（70点）で、60点以上が合格となります。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【学生が準備すべき機器他】

この授業は Zoom で行いますので、インターネットの環境や通信機器が必要です。

HOPPII での登録をお願いします。HOPPII の「お知らせ」で、授業を行う Zoom の情報をお伝えします。また、この授業では Google Classroom を使用します。初回の授業の後に、Google Classroom への登録をお願いします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

アメリカ合衆国史

<研究テーマ>

・20世紀転換期のニューヨークにおけるプロテスタンティズムと公共領域の再編

・アメリカ人女性の海外宣教運動

<主要研究業績>

○「聖十字架修女会の会員とセツルメント運動——生と活動の様式としてのアングロ・カトリシズム」『ジェンダー史学』16号、2020年。

○『『第三者』性のポリティクス—19世紀末ニューヨークの聖公会員の社会改革運動と公共領域の再編』『アメリカ史研究』42号、2019年。

○「ジェンダーからみるグローバル・ヒストリー—女子教育とジャンヌ・ダルクの『普遍化』から」、上智大学アメリカ・カナダ研究所、イペロアメリカ研究所、ヨーロッパ研究所共編『グローバル・ヒストリー—ナショナルを超えて』上智大学出版、2018年。

○ Redemption and Revolution: American and Chinese New Women in the Early Twentieth Century (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2016).

○ “Excludable Aliens vs. One National People: The U.S. Chinese Exclusion Policy and the Racialization of Chinese in the United States and China,” The Japanese Journal of American Studies (no.23, 2012).

【Outline and objectives】

The course introduces basic historiographical issues in the discipline of history. Students are expected to develop the ability to apply historical methods of inquiry to the analysis of their Master's theses/Research papers.

ART500G1 - 112

多文化芸術論 I

佐藤 千登勢

サブタイトル：映画を読む

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、芸術テキストを審美的快楽の体験の場としてのみならず、社会批判の装置として捉え直し、その表現、表象の語る多義性と重層性について考え、議論します。ロシア（ソ連）、チェコ（チェコスロバキア）、ポーランドの文学作品や映画を用いながら、それぞれの国々の社会、経済、文化、歴史、国家間の勢力均衡を解読する作業を通して、多義的記号体系を分析・洞察する力を養います。

【到達目標】

映画作品を中心に、芸術言語が担う審美的機能と社会批判の機能という一見相反する多義的な表現の読解を重ねることで、これを自身の見解や思考の組み立て方に役立てて、論理的に議論やプレゼンテーションを展開する力を獲得することが目標となります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」と「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP1」の達成のために重要である。また、「DP3」の達成のために望ましい。

【授業の進め方と方法】

旧社会主義国家で創造された芸術テキストは、その国の文化や社会構造、イデオロギー、歴史的背景、国家間の関係を濃厚に映し出す、いわば、体制と人間社会の縮図モデルです。しかし、多義的で重層的な言語（映画言語、音楽言語を含む）により、それは、多様な解釈を許容するとともに、作者の真の意図やメッセージを解読すべき錯綜した迷宮のような作品となっていることも少なくありません。私たちは、手法や表象、形式といった審美的観点に着目すると同時に、《抑圧》《イデオロギーによる民族統合》《民族差別》《冷戦》《ソ連邦崩壊と離散》《ナショナリズム》といった社会的・歴史的キーワードを基に、二重構造の芸術テキストを分析・批評していきます。授業でなされた議論や自身の見解を A4 一枚程度にまとめたリアクションペーパーを毎回、提出してもらいます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	芸術の機能について—シクロフスキーの《異化》の発見から日常批判へ	ロシア・フォルマリズム宣言としても名高いシクロフスキーの『手法としての芸術』を基に、「異化—自動化」「日常—非日常」「手法—素材」等の二項対立の芸術上の、また日常における意義を考える。
第2回	芸術の機能について—シクロフスキーの《異化》の発見から日常批判へ（2）	ロシア・フォルマリズムの主導者シクロフスキーが提唱した「異化」の概念について具体例を確認しつつ、理解を深める。
第3回	煽動と挑発—モンタージュ派（エイゼンシテイン、ヴェルトフ）の映画（1）	エイゼンシテイン『ストライキ』、『戦艦ポチョムキン』、『十月』の煽動的なモンタージュについて概説。
第4回	煽動と挑発—モンタージュ派（エイゼンシテイン、ヴェルトフ）の映画（2）	ヴェルトフの都市化と複製技術の発達を背景とした手法としてのモンタージュの差異を検討する。

第 5 回	プロパガンダー― プドフキンの映画言語『アジアの嵐』	プロドフキン『アジアの嵐』における多様なモンタージュを分析して審美的側面を確認しながら、同時にこの作品が呈示する多民族併合や社会主義革命の正当化という多層的テーマを読み解く。	第 14 回	国家と個人― パーヴェル・チュフライ『パパって何?』	ソ連崩壊後のロシア国民のメンタリティを、『父親』に裏切られた義理の息子のある一家族のストーリーに重ね合わせた寓話的手法とその重みについて検討しつつ、『父殺し』の伝統についても考察。
第 6 回	プロパガンダー― トゥーリンの映画言語『トゥルクシブ』	プロパガンダ的煽動性の記号や表象を現前化させずに、宗教的煽動とも言える超越力的存在と崇高さの創出、サブリミナル的手法によるプロパガンダの力を分析していく。	【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】 レジュメの内容や視聴した映像資料に対する自身の見解等を A4 一枚程度にまとめたリアクションペーパーを次週回毎に毎回提出する（学習支援システムを利用）。リアクションペーパー作成に要する時間は 1 時間程度。		
第 7 回	面従腹背の二重構造― エイゼンシュテイン『イワン雷帝』	エイゼンシュテインの世界的影響力を配下におくためにスターリンが制作依頼した『イワン雷帝』。この作品にはスターリンを批判・揶揄する記号や表象、表現が構造化されている。作品をめぐってのスターリンとエイゼンシュテインとの闘争という背景も交えつつ、概説。	【テキスト（教科書）】 教科書は使用しません。教員の作成した資料を学習支援システムを通して配付します。		
第 8 回	面従腹背の二重構造― アンジェイ・ワイダの映画言語（1）	旧ソ連の衛星国であった時代、当局の批判やソ連軍の糾弾は映画界でも不可能であった。そこで、ワイダがポーランド国民に向けたメッセージの二重構造とはいかなるものだったか、本人のインタビュー映像も交えて確認すると同時に、映画テキストにおける表象や象徴の解釈の多様性、ならびに共通のコードについて考える。	【参考書】 折にふれて、学習支援システムに挙げます。		
第 9 回	面従腹背の二重構造― アンジェイ・ワイダの映画言語（2）	旧ソ連の衛星国であった時代、当局の批判やソ連軍の糾弾は映画界でも不可能であった。そこで、ワイダがポーランド国民に向けたメッセージの二重構造とはいかなるものだったか、本人のインタビュー映像も交えて確認すると同時に、映画テキストにおける表象や象徴の解釈の多様性、ならびに共通のコードについて考える。	【成績評価の方法と基準】 平常点（50%）、リアクションペーパー（50%）として総合的に判断します。本授業の到達目標の 60% 以上を達成した学生を合格とします。		
第 10 回	審美的《イソップ言語》― タルコフスキー『鏡』	幼年時代の回想的要素とドキュメンタリー映像が印象的な『鏡』。だが、幼年期の断片的回想にはスターリン時代の粛清のエピソードがさまざまな様式で重ねられている。象徴性や映画言語の二重性に着目しつつ、『父性の喪失』についても考えていく。	【学生の意見等からの気づき】 とくにありませんでした。		
第 11 回	抵抗と挑発― ヴェラ・ヒティロヴァの映画言語	旧チェコスロバキアの統制から自由になろうとする国民の意志を、二人の自由闊達な姉妹を通してユーモラスにお洒落に描出するセンスと、映画言語の二重性、台詞と映像の不一致や台詞の重みについて考察。	【学生が準備すべき機器他】 学習支援システムを通して資料配付、課題提示を行うことがありますが、ネットの通信環境を整えておいてください。		
第 12 回	寓話的諷刺と不条理― シャフナザーロフ『ゼロ・シティ』	旧ソ連という国家のしくみ自体をパロディ化した不条理作品の秀作『ゼロ・シティ』を基に、ソ連崩壊後の映画言語の変容に着目する。	【担当教員の専門分野等】 20 世紀ロシア文学。ロシア・フォルマリズムを中心とした芸術理論。ソ連およびロシアの映画。 http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/23/0002283/profile.html		
第 13 回	寓話的諷刺不条理― アブラーゼ『懺悔』	ソ連崩壊後、ロシアの映画言語は寓話性を獲得する。スターリンとヒトラーを融合させたような支配者、彼に両親を粛清された少女と、支配者の一族のその後の経緯は、史実とシュールな感覚やユーモアを交えて表現される。その寓話的表象に着目しつつ、史実、記憶、不条理について考察していく。	【Outline and objectives】 We consider artistic texts not only as a place for experiencing aesthetic pleasures but also as a device of social criticism, and discuss the polysemy and multiplicity of their expressions and representations.		

異文化社会論 I A

今泉 裕美子

サブタイトル：植民地社会と国際関係

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

植民地社会を、異なる文化をもつ人（及びその集団）同士の関係から捉え、それが国際関係をどう作り出し、支え、変化させ、現代世界を特徴づけているのか、を学びます。本年度は「沖縄」を対象としますが、沖縄に関する理解を深めることに加え、世界の諸地域社会に生じる事象、問題を分析するための視点と方法を学びます。

【到達目標】

- ①植民地社会を人の移動、諸運動、暮らし、経験などから考察し、これに必要な基本的な概念、理論、思想が理解できる。
- ②国際関係の展開を、植民地支配体制と地域社会の相互の連関から理解し、現代世界に生起する事象、問題との関係性を分析できる。
- ③広領域学としての国際関係学 (International Studies)、および地域研究の方法を学び、自分の研究にどのようにいかせるかを検討する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

- ①授業はオンラインで行う可能性がある（ただし【その他の注意事項】を確認すること）。レジュメや資料は、教員からの指示に応じて事前に、あるいは授業中にダウンロードして閲覧、視聴する。
- ②毎回担当を決め、割り当てられた文献や資料について報告し、議論する。
- ③自分の研究テーマや専門分野に引き付けて理解する。
- ④本授業に関連する国内外の情勢、受講生の理解度、関心に応じて授業計画を一部変更することがある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業内容と進め方、注意事項の確認。本授業の目的と内容について受講生の関心や意見を聞き、意見交換する。
2	沖縄を「植民地」の視点から捉えるとは①	比嘉春潮他『沖縄』（1963年）の「日本人の民族意識と沖縄」、「沖縄に対する異民族観」の内容が、現在いかに変化したのか否か、から考える。
3	沖縄を「植民地」の視点から捉えるとは②	近代国際関係が東アジアに拡大する過程のなかに沖縄近代史を位置づける。テキスト：恩河尚「沖縄の歴史を読む」
4	沖縄を「植民地」の視点から捉えるとは③	第二次世界大戦から戦後の国際関係の中で沖縄現代史を位置づける。テキスト：恩河尚「沖縄の歴史を読む」
5	同化と異化のはざままで	植民地社会における同化と異化の問題、「民族」について、沖縄の人びとの意識から考察する。テキスト：大城立裕「沖縄で日本人になること」
6	中間のまとめ	ここまでの授業の論点を整理し、後半の授業につなげる。
7	沖縄移民と移民社会①	移民社会での沖縄移民の暮らしや諸活動から、沖縄近代史の経験を理解する。テキスト：『沖縄県史 近代』の「沖縄移民社会」。
8	沖縄移民と移民社会②	沖縄移民の経験と現状を、現代のグローバル化との関係から理解する。テキスト：新垣誠「グローバル資本主義を問い直すー＜世界のウチナンチュ＞と向き合うために」、崎原千尋「コロナリズムと移民の歴史の交差点ー沖縄とハワイ」
9	沖縄戦経験から「平和」を問い直す	沖縄の人びとの戦争経験は沖縄の「植民地」としての経験といかにつながり、平和をどう問い直しているのか、沈黙する/させられた声にも耳を傾けながら学ぶ。テキスト：鳥山淳「基地と抵抗」、宮城晴美「『沈黙の証言』を聴く」

- 10 「復興」、「開発」から「平和」を問い直す
米軍占領下の「復興」、復帰後の地域振興としてのリゾート「開発」が求めた豊かさという平和を、沖縄社会の変容、住民の自立への模索から考察する。テキスト：安里英子「『復帰』後の開発問題」、「『沖縄振興開発計画』と住民によるオルタナティブな視点」
- 11 「沖縄学」から地域研究を考える
明治の半ば頃から始まる、若きウチナンチュによって沖縄の総合的・体系的な全体像の把握がめざされてきた「沖縄学」から、地域研究の視点と方法を学ぶ。
- 12 沖縄研究に向かうー沖縄出身者の立場から
沖縄出身者の沖縄研究への取り組みから「地域研究」へのアプローチを学ぶ。テキスト：屋嘉比取「沖縄のアイデンティティを語ること、そして語りなおすことー『沖縄研究』の現在についてー」
- 13 沖縄研究に向かうー本土出身者の立場から
本土出身者の沖縄研究への取り組みから「地域研究」へのアプローチを学ぶ。テキスト：鹿野政直「沖縄をめぐる／に発する『文化』の状況」
- 14 まとめ
本授業の内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・【成績評価の方法と基準】に記した内容にそくして予習、復習し、授業には質問や議論したいことをそれぞれ二つ以上用意する。
- ・本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

今泉裕美子「沖縄問題」から問うー日本の国際社会認識 羽場久み子他編『21世紀国際社会への招待』有斐閣、2003年。
恩河尚「沖縄の歴史を読む」状況出版編集部編『沖縄を読む』状況出版、1999年。
金富子他編『性暴力被害を聴くー「慰安婦」から現代の性搾取へ』岩波書店、2020年。
財団法人沖縄県文化振興会史料編集室編『沖縄県史 各論編第5巻 近代』沖縄県教育委員会、2011年。
鳥袋純他編『沖縄が問う 日本の安全保障』岩波書店、2015年。
比嘉春潮他『沖縄』岩波書店、1963年。
比嘉政夫他編『地域の自立 シマの力』コモンズ、2006年。

【参考書】

大島美徳他編『国際化』する地域研究』文化書房博文社、2009年。
百瀬宏『国際関係学』東京大学出版会、1993年。
百瀬宏『国際関係学原論』東京大学出版会、2003年。
Bruce Cumings, "Boundary displacement: Area Studies and International Studies during and after the cold war," Bulletin of Concerned Asian Scholars, 29:1(1997):E-publication <https://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/14672715.1997.10409695>
その他、随時提示する。

【成績評価の方法と基準】

基準：①報告者も非報告者も、前回までの授業内容を踏まえ、その回のテキストを正確に理解し、不明な点を調べて参加、②授業では情報提供、意見・質問・論点の提出、ディスカッションの進行などによる貢献、③レジュメの内容と様式、プレゼンの仕方、求められた提出物の内容、により評価する。
配分：授業への参加度・貢献度 50%、報告や提出物を総合して 50%。

【学生の意見等からの気づき】

前年度に担当していないため記入する内容がない。

【学生が準備すべき機器他】

- ・オンライン授業では、パソコンかタブレットを準備することが望ましい。
- ・オンライン授業では Zoom を使う予定であるが（他を使用する場合はあらかじめ指示する）、提出物は学習支援システムを通じて提出してもらう。
- ・動画や画像を配信する機会があるため、有線接続など安定的な接続環境で、通信容量に制限がない状態にしておくのが望ましい。

【その他の重要事項】

- ・社会情勢の変化、これに伴う大学の方針によって授業形態が変化する場合は通知する。
- ・およそ 30 年にわたって行ってきた日本国内、ミクロネシアでの聞き取りを踏まえ、沖縄県史、市史などの編さん、執筆に関わって来た。また米国会図書館の Nan'yo Collection や琉球大学付属図書館矢内原忠雄文庫 (<http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/yanaihara/about.html>) など複数の機関で、旧南洋群島関係の史料の発掘、整理、公開に関わった。「大文字の歴史」と「小文字の歴史」の関係、史料の発掘、分析と同時に、地域住民の経験をどう記録し、歴史として次世代に継承するか、そのための聞き取りの方法、地域外の研究者として地域にいかに関わるのか、から取り組み続けている。この経験に基づく「地域研究」の方法を紹介し、受講生とともに考えてゆきたい。

【担当教員の専門分野等】

法政大学学術研究データベース <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001794/profile.html> を参照。

【Outline and objectives】

This course will introduce students to understand colonial society consisting of diverse cultural backgrounds under colonial system of international relations. As we focus on Okinawa, students will seek to understand this region through themes include global process of colonization and decolonization, nationalism and identity, militarization as neocolonialism reflecting the complex nature of contemporary global issues. Students will be also familiar with International Studies and Regional Studies.

POL500G1 - 115

異文化社会論 I B

今泉 裕美子

サブタイトル：植民地社会と国際関係

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

植民地社会を、異なる文化をもつ人（及びその集団）同士の関係から捉え、それが国際関係をどう作り出し、支え、変化させ、現代世界を特徴づけているのか、を学びます。本年度は“Pacific Islands”を対象としますが、ここに関する理解を深めることに加え、世界の諸地域社会に生じる事象、問題を考察するための視点と方法を学びます。

【到達目標】

- ①植民地社会を人の移動、諸運動、くらし、経験などから考察し、これに必要な基本的な概念、理論、思想が理解できる。
- ②国際関係の展開を、植民地支配体制と地域社会の相互の連関から理解し、現代世界に生起する事象、問題との関係性を分析できる。
- ③広領域学としての国際関係学（International Studies）、および地域研究の方法を学び、自分の研究にどのようにいかせるかを検討する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

- ①授業はオンラインで行う可能性がある（ただし【その他の注意事項】を確認すること）。レジュメや資料は、教員からの指示に応じて事前に、あるいは授業中にダウンロードして閲覧、視聴する。
- ②毎回担当者を決め、割り当てられた文献や資料について報告し、議論する。
- ③自分の研究テーマや専門分野に引き付けて理解する。
- ④本授業に関連する国内外の情勢、受講生の理解度、関心に応じて授業計画を一部変更することがある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業内容と進め方、注意事項の確認。本授業について受講生の関心を聞き、意見交換する。
2	"Pacific Islands"とは？ ①	広義の"Pacific Islands"について、これら地域への人類の進出とくらし、外来者から与えられた名称・区分、それらに対する住民側からの捉え直しを Epeli Hau'ofa などを取り上げて理解し、植民地化の歴史を把握する。
3	"Pacific Islands"とは？ ②	狭義の"Pacific Islands"について、人々のくらし、植民地化の歴史を把握する。
4	委任統治と信託統治①	委任統治制度を第一次世界大戦の特徴から理解する。
5	委任統治と信託統治②	信託統治制度を第二次世界大戦の特徴から理解する。
6	委任統治と信託統治③	信託統治のなかで唯一「戦略的信託統治」となった"Pacific Islands"について学ぶ。
7	中間のまとめ	ここまでの授業の論点を整理し、後半の授業につなげる。
8	「ナマコの眼」からみた"Pacific Islands"①	「ナマコの眼」で見るとは？ テキスト：鶴見良行『ナマコの眼』
9	「ナマコの眼」からみた"Pacific Islands"②	「ナマコの眼」から何を見るか？ テキスト：鶴見良行『ナマコの眼』
10	「ナマコの眼」からみた"Pacific Islands"③	「ナマコの眼」からどう見えるか？：鶴見良行『ナマコの眼』
11	隔てる海を、ふたたび、つなぐ海へ①	"Pacific Islands"をめぐる人の移動を考える。
12	隔てる海を、ふたたび、つなぐ海へ②	"Pacific Islands"をめぐるさまざまなレベルの「地域」協力・交流を考える。
13	隔てる海を、ふたたび、つなぐ海へ③	環境、ジェンダー、軍事基地化などを事例に、脱植民地化について学ぶ。
14	まとめ	本授業の内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・【成績評価の方法と基準】に記した内容にそくして予習、復習し、授業には質問や議論したいことをそれぞれ二つ以上用意する。
- ・本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

今泉裕美子「太平洋の「地域」形成と日本—日本の南洋群島統治から考える」
 李成市他編『岩波講座日本 歴史第 20 巻（地域論）』岩波書店、2014 年。
 鶴見良行『ナマコの眼』筑摩書房、1990 年（文庫版は 1993 年）。
 ジェーン・ディブリン（沢田朋子他訳）『太陽がふたつ出た日—マーシャル諸
 島民の体験』紀伊國屋書店、1993 年（原著は 1988 年）。
 Epeli Hau'ofa, "Our Sea of Islands," The Contemporary Pacific, Vol. 6,
 No. 1 (1994) : E-publication <https://www.jstor.org/stable/pdf/23701593.pdf?refreqid=excelsior%3A0d51c570bc45b93d68fe6ac0eb872349>.

【参考書】

大島美穂他編『「国際化」する地域研究』文化書房博文社、2009 年。
 加藤一夫『ビキニ・やいづ・フクシマ』社会評論社、2017 年。
 吉岡政徳監修、遠藤史他編『オセアニア学』京都大学学術出版会、2009 年。
 百瀬宏『国際関係学』東京大学出版会、1993 年。
 百瀬宏『国際関係学原論』岩波書店、2003 年。
 Bruce Cumings, "Boundary displacement: Area Studies and
 International Studies during and after the cold war," Bulletin
 of Concerned Asian Scholars, 29:1(1997):E-publication <https://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/14672715.1997.10409695>
 Sasha Davis, The Empires' Edge: Militarization, Resistance, and
 Transcending Hegemony in the Pacific(2013) : E-publication <https://muse.jhu.edu/book/35746>.
 その他、授業時に提示する。

【成績評価の方法と基準】

基準：①報告者も非報告者も、前回までの授業内容を踏まえ、その回のテキ
 ストを適確に理解し、不明な点を調べて参加、②授業では情報提供、意見・質
 問・論点の提出、ディスカッションの進行などによる貢献、③レジュメの
 内容と様式、プレゼンの仕方、求められた提出物の内容、により評価する。
 配分：授業への参加度・貢献度 50 %、報告や提出物を総合して 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

前年度に担当していたため記入する内容がない。

【学生が準備すべき機器他】

・オンライン授業では、パソコンかタブレットを準備することが望ましい。
 ・オンライン授業では Zoom を使う予定であるが（他を使用する場合はあら
 ためて指示する）、提出物は学習支援システムを通じて提出してもらおう。
 ・動画や画像を配信する場合があるため、有線接続など安定的な接続環境で、
 通信容量に制限がない状態にしておくのが望ましい。

【その他の重要事項】

・社会情勢の変化、これに伴う大学の方針によって授業形態が変化する場合は
 通知する。
 ・およそ 30 年にわたって行ってきた日本国内、ミクロネシアでの聞き取り
 を踏まえ、沖縄県史、市史などの編さん、執筆に関わって来た。また米
 国議会図書館の Nan'yo Collection や琉球大学付属図書館矢内原忠雄文庫
 (<http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/yanaihara/about.html>) など複数の機関
 で、旧南洋群島関係の史料の発掘、整理、公開に関わった。「大文字の歴史」と
 「小文字の歴史」の関係を、史資料の発掘、分析と同時に、地域住民の経験を
 どう記録し、歴史として次世代に継承するか、そのための聞き取りの方法、地
 域外の研究者として地域にいかに関わるのか、から取り組み続けている。この
 経験に基づく「地域研究」の方法を紹介し、受講生とともに考えてゆきたい。

【担当教員の専門分野等】

法政大学学術研究データベース <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001794/profile.html> を参照。

【Outline and objectives】

This course will introduce students to understand colonial society
 consisting of diverse cultural backgrounds under colonial system of
 international relations. As we focus on "Pacific Islands," students will
 seek to understand them through themes include global process of
 colonization and decolonization, nationalism and identity, militarization
 as neocolonialism reflecting the complex nature of contemporary global
 issues. Students will be also familiar with International Studies and
 Regional Studies.

CUA500G1 - 201

ナショナリズム／エスニシティ論 A

石森 大知

サブタイトル：文化人類学の諸アプローチ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・本授業では、ナショナリズム・エスニシティ論を文化人類学的視
 点から学ぶとともに、自らの興味関心あるいは学習・研究テーマと
 関連付けて考える能力を身につけることを目的とする。
 ・春学期のナショナリズム／エスニシティ論 A では「文化人類学の
 諸アプローチ」について学び、秋学期のナショナリズム／エスニ
 ティ論 B においてナショナリズム・エスニシティ論の中心的な理論
 や概念を学ぶための準備とする。

【到達目標】

・現代文化人類学に関する専門的な知識を習得する。
 ・文献の内容をただ理解するだけでなく、批判的な読み方をでき
 るようにする。その作業を通して、自らの研究テーマの構想・発展
 につなげる。
 ・ものごとを相対的に捉えることによって得られる他者理解の力や
 洞察力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示され
 たどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
 に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP2」の達成のために特に
 重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

・本授業はリアルタイム・オンライン型で行う予定です（変更の場
 合は学習支援システムを通して事前に連絡します）。
 ・本授業は主に文献の輪読形式で行いますが、学生の理解促進のた
 めに講義形式も適宜取り入れる。
 ・文献の輪読では、毎回発表者を立てます。発表者はレジュメに基
 づいて発表し、それを受けて履修者全員で討論を行う。よって全て
 の履修者は文献を熟読の上で授業に参加すること。
 ・春学期は、現代文化人類学の中心的概念や理論を広く学ぶ（一
 方、秋学期は、民族・国家・エスニシティをはじめ、人種主義、反
 植民地運動、国民統合、先住民運動、国家からの逃避などに関する
 論文を取り上げる）。
 ・リアクションペーパー等における興味深いコメントや質問等を授
 業内で取り上げ、全体に対してフィードバックを行うとともに、さ
 らなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の進め方とスケジュール、履 修上の注意、自己紹介、各自の問 題関心を発表
第 2 回	文化相対主義	文化相対主義の諸相に関する文献 の発表およびグループ討論
第 3 回	文化と経済	贈与交換に関する文献の発表およ びグループ討論
第 4 回	家族と親族	家族・親族研究に関する文献の発 表およびグループ討論
第 5 回	紛争・暴力・国家	戦争と平和に関する文献の発表お よびグループ討論
第 6 回	宗教と世界観	宗教概念とアニミズムに関する文 献の発表およびグループ討論
第 7 回	儀礼と国家	人類学的儀礼研究に関する文献の 発表およびグループ討論

第 8 回	エスニシティ	エスニシティ論に関する文献の発表およびグループ討論
第 9 回	多文化主義	多文化主義論に関する文献の発表およびグループ討論
第 10 回	開発と文化	開発人類学に関する文献の発表およびグループ討論
第 11 回	人類学批判	ポストコロナル論に関する文献の発表およびグループ討論
第 12 回	自然と文化	存在論的転回に関する文献の発表およびグループ討論
第 13 回	科学と文化	科学に関する文献の発表およびグループ討論
第 14 回	総括	春学期のまとめと秋学期の準備

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・ 輪読に使用する文献の予習・復習を行う（発表担当者かどうかに関わらず文献を熟読）。
- ・ 授業内で紹介する文化人類学や地域研究の関連文献を読む。
- ・ 図書館などで関連文献を探し、授業の理解を深める。
- ・ 自らの研究テーマについて日ごろから関心を深め、必要な文献を読み調べる。
- ・ 本授業の準備学修・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論 文化人類学—基本と最新のトピックを学ぶ』ミネルヴァ書房、2018年。
 （以上の文献を使用しますが、必ずしも購入する必要はありません）

【参考書】

綾部恒雄（編）『文化人類学 20 の理論』弘文堂、2006年。
 内堀基光・山本真鳥（編）『人類文化の現在—人類学研究』放送大学教育振興会、2016年。
 松村圭一郎・中川理・石井美保（編）『文化人類学の思考法』世界思想社、2019年。

【成績評価の方法と基準】

授業（オンラインを含む）の取り組みや各種課題を「平常点（70%）」として重視するとともに、学期末に出す予定の「レポート（30%）」を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

学生同士の議論がより活発になるような授業運営（議論を引き出すための工夫、発言しやすい雰囲気や授業の流れ）を心がける。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・課題提出等のために学習支援システムを利用します。

【担当教員の専門分野】

<専門領域>文化人類学、オセアニア地域研究
 <研究テーマ>オセアニア地域を主な対象とし、宗教運動、キリスト教信仰、植民地主義、地域紛争などに関する研究
 <主要研究業績>

石森大知・丹羽典生（編）2019『宗教と開発の人類学—グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』春風社。
 石森大知 2019「民族性から土着性へ—ソロモン諸島紛争におけるイサタンブ解放運動の側面」『国際文化学研究』53:1-27。
 石森大知 2019「新しいロトゥ」としてのノハー—ソロモン諸島西アレアレにおける改宗過程と祈りの形式」『南方文化』45:1-18。

【Outline and objectives】

This course introduces the theories and concepts of nationalism and ethnicity from the perspective of cultural anthropology, and to acquire the ability to think in relation to students own research themes.

ナショナリズム／エスニシティ論B

石森 大知

サブタイトル：民族・国家・エスニシティ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、ナショナリズム・エスニシティ論に関連するテーマを扱った論文を講読し、それらと自らの学習・研究テーマを関連付けて考える能力の習得を目指す。具体的には、民族・国家・エスニシティをはじめ、人種主義、反植民地運動、ナショナリズム、国民統合、先住民運動、国家からの逃避などに関する論文を取り上げる。

【到達目標】

- ・ 太平洋諸島、東南アジア、日本など世界各地の民族誌の講読を通して、ナショナリズムおよびエスニシティの多様性・普遍性に関する洞察力を身につける。
- ・ 日本語だけではなく、英語の学術論文の内容を的確に理解できるようにする。
- ・ 文献の内容を理解することに加え、批判的な読み方をできるようにする。その作業を通して、自らの研究テーマの構想・発展につなげる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

- ・ 本授業はリアルタイム・オンライン型で行う予定です（変更の場合は学習支援システムを通して事前に連絡します）。
- ・ 本授業は主に文献の輪読形式で行いますが、学生の理解促進のために講義形式も適宜取り入れる。
- ・ 文献の輪読では、毎回発表者を立てます。発表者はレジメに基づいて発表し、それを受けて履修者全員で討論を行う。よって全ての履修者は文献を熟読の上で授業に参加すること。
- ・ 秋学期は民族・国家・エスニシティをはじめ、人種主義、反植民地運動、国民統合、先住民運動、国家からの逃避などに関する論文を取り上げる（一方、春学期は現代文化人類学の中心的な概念や理論を広く学習する）。
- ・ リアクションペーパー等における興味深いコメントや質問等を授業内で取り上げ、全体に対してフィードバックを行うとともに、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の進め方とスケジュール、授業の概要説明
第 2 回	民族と国家	民族・国家・エスニシティに関する文献の発表およびグループ討論
第 3 回	同時代のエスニシティ	エスニシティとその論争に関する文献の発表およびグループ討論
第 4 回	人種主義と植民地化	人種概念の社会的構築に関する文献の発表およびグループ討論
第 5 回	反植民地運動と国民統合—太平洋の事例①	太平洋の植民地主義と国家独立に関する講義
第 6 回	反植民地運動と国民統合—太平洋の事例②	太平洋の反植民地運動に関する文献の発表および討論
第 7 回	反植民地運動と国民統合—太平洋の事例③	太平洋の国民統合に関する文献の発表および討論
第 8 回	先住民・エスニシティ・国家①	先住民の権利に関する講義

第9回	先住民・エスニシ ティ・国家②	文献A（日本の事例）の発表および 討論
第10回	先住民・エスニシ ティ・国家③	文献A（アジアの事例）の発表お よび討論
第11回	国家からの逃避－東南 アジアの事例①	文献B（1章）の発表および討論
第12回	国家からの逃避－東南 アジアの事例②	文献B（5章）の発表および討論
第13回	国家からの逃避－東南 アジアの事例③	文献B（6章）の発表および討論
第14回	総括	秋学期に学んだことを振り返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・ 輪読に使用する文献の予習・復習を行う（発表担当者かどうかに関わらず文献を熟読）。
- ・ 授業内で紹介する文化人類学や地域研究の関連文献を読む。
- ・ 図書館などで関連文献を探し、授業の理解を深める。
- ・ 自らの研究テーマについて日ごろから関心を深め、必要な文献を読み調べる。
- ・ 本授業の準備学修・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

（文献A）深山直子ほか（編）『先住民からみる現代世界－わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』昭和堂、2018年。
（文献B）ジェームズ・C・スコット『ゾミア－脱国家の世界史』佐藤仁監訳、みすず書房、2013年。
（以上の文献を使用しますが、必ずしも購入する必要はありません）

【参考書】

田辺明生ほか（編）『環太平洋地域の移動と人種－統治から管理へ、遭遇から連帯へ』京都大学学術出版会、2020年。
丹羽典生・石森大知（編）『現代オセアニアの〈紛争〉－脱植民地期以降のフィールドから』昭和堂、2013年。
（以上のほか、授業時に適宜紹介します）

【成績評価の方法と基準】

授業への参加態度、発表・討論の内容などの平常点（70%）を重視するとともに、レジュメおよびレポートなど（30%）を総合的に判断して評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

学生同士の議論がより活発になるような授業運営（議論を引き出すための工夫、発言しやすい雰囲気や授業の流れ）を心がける。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・課題提出等のために学習支援システムを利用します。

【担当教員の専門分野】

<専門領域>文化人類学、オセアニア地域研究
<研究テーマ>オセアニア地域を主な対象とし、宗教運動、キリスト教信仰、植民地主義、地域紛争などに関する研究
<主要研究業績>
石森大知・丹羽典生（編）2019『宗教と開発の人類学－グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』春風社。
石森大知 2019「民族性から土着性へ－ソロモン諸島紛争におけるイサタンブ解放運動の側面」『国際文化学研究』53:1-27。
石森大知 2019「新しいロトゥ」としてのノハーイー教－ソロモン諸島西アレアレにおける改宗過程と祈りの形式」『南方文化』45:1-18。

【Outline and objectives】

This course introduces the theories and concepts of nationalism and ethnicity from the perspective of cultural anthropology, and to acquire the ability to think in relation to students own research themes.

CUA500G1 - 203

マイノリティ社会論A

曾 士才

サブタイトル：英国の中国系移民

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

①英国における中国系移民集団、②トランスカルチュラルイズム概念に基づく移民研究、③ホスト社会での共生の可能性と課題、以上3点について分析し、理解を深める。

【到達目標】

中国系移民を主たる事例にマイノリティとしての移民集団の移民のプロセス、母村との関係についての知見の獲得を目標にしている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」と「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

グローバルゼーションのもと、国際的規模の移民現象が近代以降見られるようになった。その特徴は個人が主体となって国境を越えて移動する点にある。本授業では、四大移民の一つである中国系移民について、移住の経緯、移住先である欧米におけるコミュニティの形成、第二世代以降のアイデンティティの変化、ホスト社会での民族共生などについて考察したい。

今学期は、香港の農村部を母村とする人々がロンドンに移住する要因、移民のプロセスで果たす宗族組織の役割、ロンドンで形成される華僑コミュニティ、移住がもたらす母村への影響などを考察したい。具体的にはモノグラフの講読と討論を織り交ぜて授業を進めていく。

課題等へのフィードバックは授業時間またはメールを通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	講義 1 イントロダクション	授業の進め方の説明、テキストの概要説明、分担決め
第2回	講読と討論 1	第二章背景
第3回	講読と討論 2	第三章移住への前奏曲
第4回	講読と討論 3	第四章移住への転換
第5回	講読と討論 4	第五章移住の組織化
第6回	講読と討論 5	第六章英国の文氏一族
第7回	講読と討論 6	第七章移民と母村との絆
第8回	講読と討論 7	第八章「英貨邸宅」と移住の経済的影響
第9回	講読と討論 8	第九章移住の影響、社会変化
第10回	講読と討論 9	第十章移住と伝統の保持
第11回	小括と講義	移住現象と宗族、僑郷（移民母村）の過去と現在
第12回	受講者による発表 1	受講者の調査地（広東）に関する発表
第13回	受講者による発表 2	受講者の調査地（安徽）に関する発表
第14回	まとめと考察	中国における海外移住現象や移民母村について、今後の動向を考察する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業ではテキストの講読と討論を行うが、受講者は分担部分を事前に読み込み、レジュメを作成する。本授業の準備時間は、各2～3時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ジェームズ・L・ワトソン『移民と宗族』阿吡社 1995年（各自で要購入）

【参考書】

江淵一公編『トランスカルチュラルイズムの研究』明石書店 1998年
S.カースルズ/M. J. ミラー『国際移民の時代（第4版）』名古屋大学出版会 2011年

【成績評価の方法と基準】

発表と討論への参加 70%、期末レポート 30%。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化人類学、中国民族学

<研究テーマ>華南少数民族のエスニシティ、日本華僑の文化の再構築とアイデンティティ

<主要研究業績>

『日本華僑社会の歴史と文化—地域の視点から』明石書店、2020年（共編著書）

「戦中・戦後における神戸華僑の体験—華僑学校の教職員の事例」『異文化（論文編）』第19号（法政大学国際文化学部）、2018年

「日本残留中国人—札幌華僑社会を築いた人々」今泉裕美子・柳沢遊・木村健二編著『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究—国際関係と地域の視点から』日本経済評論社、2016年

『落地生根—神戸華僑と神保中華会館の百年—増補版』研文出版、2013年（中華会館編、共著）

「在日華人社会の民俗文化」山下清海編『華人社会がわかる本—中国から世界へ広がるネットワークの歴史、社会、文化』明石書店、2005年

【Outline and objectives】

This course deals with the history of Chinese migrant in the United Kingdom and their acculturation. It also deals with relationship between immigrants and hometown.

At the end of the course, participants are expected to (1) obtain basic knowledge about migratory movement, (2) enhance the basic concept of transculturalism.

CUA500G1 - 204

マイノリティ社会論B

曾 士才

サブタイトル：欧米社会における難民

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

①国民国家と少数民族、②マイノリティの文化とアイデンティティ、以上2点について分析し、理解を深めていく。

【到達目標】

現代世界とエスニシティを読み解く知見と力を身に着ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」と「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

フランス革命後に誕生した国民国家がその後世界中に広まるなか、国家権力を握った強大な民族へ従属する地位に追いやられた少数民族集団は、不平等な状況下で、差別や偏見にさらされながらも、自らの文化の維持継承を図り、アイデンティティを追求してきた。今学期は、アメリカ、フランス、オーストラリアに難民として移住したラオスのモン族に関するモノグラフを読み、彼らが移住先の欧米社会で、古来から伝わる文化や社会を維持し、「時空を超える絆」を保ち続けている様子を考察したい。

課題などに対する応答は Hoppii の掲示板を通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	自己紹介（志望動機）、授業説明、分担決め
第2回	講義	ディアスポラ概念、モン族の概況
第3回	講読と議論 1	第1章インドシナ戦争・ベトナム戦争
第4回	講読と議論 2	第2章モン族
第5回	講読と議論 3	第3章 Hmongness
第6回	講読と議論 4	第4章時空を超える絆
第7回	講読と議論 5	第5章第1節アメリカ合衆国のモン族
第8回	講読と議論 6	第5章第2節フランスのモン族
第9回	講読と議論 7	第5章第3節オーストラリアのモン族
第10回	講読と議論 8	第5章第4節モン族社会の比較考察
第11回	講読と議論 9	第6章モン族社会の現状と変化
第12回	講読と議論 10	第7章還流するモン族のアイデンティティ、終章
第13回	特別授業	テキストの著者本人との対話
第14回	まとめの議論	マイノリティの文化とアイデンティティについて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業ではテキストの講読と討論を行うが、受講者は分担部分を事前に読み込み、レジュメを作成する。本授業の準備時間は、各2~3時間を標準とします。授業日程と分担講読する箇所は初回の授業で決める。

【テキスト（教科書）】

吉川太恵子『ディアスポラの民モン—時空を超える絆』めこん 2013年

【参考書】

綾部恒雄『現代世界とエスニシティ』弘文堂 1993年

綾部恒雄編『アメリカの民族：ルツボからサラダボウルへ』弘文堂
1992年

その他、授業内で随時紹介する

【成績評価の方法と基準】

発表と討論への参加 70 %、期末レポート 30 %。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化人類学、中国民族学

<研究テーマ>華南少数民族のエスニシティ、日本華僑の文化の再構築とアイデンティティ

<主要研究業績>

「聖なる時空の現出とその観光資源化」長谷川清・河合洋尚編『資源化される「歴史」－

中国南部諸民族の分析から』風響社 2019年

「中国貴州省における生態博物館の二〇年」塚田誠之編『民族文化資源とポリテクス－中国南部地域の分析から』風響社 2016年

「西南中国のエスニック・ツーリズム」鈴木正崇編『東アジアの民衆文化と祝祭空間』慶応義塾大学出版会、2009年

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリテクス－中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008年

『世界の先住民族－ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005年（共編著）

【Outline and objectives】

This course deals with the actual situation of Hmong people as a refugee from Laos in the United States, France and Australia. It also deals with their networking beyond time and space. At the end of the course, participants are expected to (1) obtain basic knowledge about asian minority groups in Western countries, (2) enhance the concept of diaspora and ethnicity.

GDR500G1 - 205

ジェンダー論

佐々木 一恵

サブタイトル：ジェンダー史の展開

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ジェンダーの視点から歴史を捉えていきます。これまでのジェンダー史の取り組みや成果をたどるとともに、方法論としてのジェンダー史学について考察していきます。そこから、国際文化学におけるジェンダー史の研究論文を書いていけるようになることを目指します。

【到達目標】

1. ジェンダー史の視点や方法論について基礎的な理解ができるようになること。
2. ジェンダー史の視点や方法論を、自分自身の研究に応用できるようにすること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

この授業は Zoom で行います。文献の概要を発表者がパワー・ポイントを用いて発表した後、各自が Google Classroom にアップロードしたコメントをベースにディスカッションを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要に関する説明
第2回	1850年代のニューヨーク市における階級およびジェンダーの対立	【テキスト】 『差異に生きる姉妹たち』1章。
第3回	伝道ホームで教育を受けた中国系アメリカ人女性の結婚	【テキスト】 『差異に生きる姉妹たち』2章。
第4回	化粧品産業とジェンダーの文化的構築、1890年－1930年	【テキスト】 『差異に生きる姉妹たち』3章。
第5回	黒人と白人の福祉感、1890年－1945年	【テキスト】 『差異に生きる姉妹たち』4章。
第6回	メキシコ系アメリカ人女性史に「ミショナリー記録」をしようすること	【テキスト】 『差異に生きる姉妹たち』5章。
第7回	「ボカホンタス」像をくつあげすアメリカ・インディアン女性の奔流	【テキスト】 『差異に生きる姉妹たち』6章。
第8回	アメリカ黒人女性史	【テキスト】 『差異に生きる姉妹たち』7章。
第9回	黒人女性とフェミニズム	【テキスト】 『ベル・フックスの「フェミニズム理論」』1、2章。
第10回	黒人フェミニズム運動、シスターフッド	【テキスト】 『ベル・フックスの「フェミニズム理論」』3、4章。
第11回	男性と権力	【テキスト】 『ベル・フックスの「フェミニズム理論」』5、6章。
第12回	黒人女性と仕事、教育	【テキスト】 『ベル・フックスの「フェミニズム理論」』7、8章。
第13回	黒人女性と暴力を隔絶する運動、子育て	【テキスト】 『ベル・フックスの「フェミニズム理論」』9、10章。
第14回	黒人女性、セクシュアリティ、フェミニズム革命	【テキスト】 『ベル・フックスの「フェミニズム理論」』11、12章。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・文献を読み、自分が関心を持った概念や内容について、意見をまとめて Google Classroom に授業が始まる 1 時間前までにアップロードしてください。
- ・文献の発表者はレジュメをパワー・ポイントで作成してください。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

○ヴィッキー・L・ルイス、エレン・キャロル・デュボイス編『差異に生きる姉妹たち—アメリカ女性誌における人種・階級・ジェンダー』（和泉邦子・勝方恵子・佐々木孝弘・松本悠子訳）世織書房、1997年。
○ベル・フックス『ベル・フックスの「フェミニズム理論」：周辺から中心へ』（野崎佐和・毛塚翠訳）あけび書房、2017年。

【参考書】

授業の中で紹介していきます。

【成績評価の方法と基準】

・授業への貢献度・参加度（30％）
・授業内での文献発表（70％）

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

アメリカ合衆国史

<研究テーマ>

・20世紀転換期のニューヨークにおけるプロテスタンティズムと公共領域の再編

・アメリカ人女性の海外宣教運動

<主要研究業績>

○「聖十字架修女会の会員とセツルメント運動——生と活動の様式としてのアングロ・カトリシズム」『ジェンダー史学』16号、2020年。

○「『第三者』性のポリティクス—19世紀末ニューヨークの聖公会員の社会改革運動と公共領域の再編」『アメリカ史研究』42号、2019年。

○「ジェンダーからみるグローバル・ヒストリー—女子教育とジャンヌ=ダルクの『普遍化』から」、上智大学アメリカ・カナダ研究所、イペロアメリカ研究所、ヨーロッパ研究所共編『グローバル・ヒストリー—ナショナルを超えて』上智大学出版社、2018年。

○Redemption and Revolution: American and Chinese New Women in the Early Twentieth Century (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2016).

○“Excludable Aliens vs. One National People: The U.S. Chinese Exclusion Policy and the Racialization of Chinese in the United States and China,” The Japanese Journal of American Studies (no.23, 2012).

【Outline and objectives】

The course introduces an overview of the standpoints and methodologies of gender history so that students can develop the ability to examine issues of gender cross-culturally and inter-racially.

ARSa500G1 - 206

多言語社会論 A

大中 一彌

サブタイトル：現代ヨーロッパの基礎研究

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランス語圏やヨーロッパを中心とし、複数の言語や文化をめぐる関係性にフォーカスしながら、政治や社会について専門的に学びます。

【到達目標】

- ・使用言語は日本語とする。英語、フランス語など言語の運用能力の習得はこの授業の到達目標に入らない。
- ・必ずしも現代ヨーロッパについて専門的に学んだことのない方をふくめ、大学院生として研究をおこなうのに最低限必要な教養を身につける。
- ・【教科書】フランスの歴史についての基礎的な知識を得る。
- ・【映像】時事問題などより現代的な話題と教科書で得た知識を関連づけられるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

1. 教科書の輪読
2. 毎週の授業で簡単な話題提供（1人5分程度）
3. 映像の分析

この授業は、オンライン授業（リアルタイム配信型）で実施の予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	初顔合わせ	授業計画の説明
2	パリはなんとっても花の都	教科書 4-8 頁の講読、学生による話題提供
3	まとまりのよい国土	教科書 8-11 頁の講読、学生による話題提供
4	義務教育普及は日仏ともに	教科書 12-18 頁の講読、学生による話題提供
5	家庭ではフランス語を話さない地方がある	教科書 18-21 頁の講読、学生による話題提供
6	時代を逆に眺めるとだんだん減る国土	教科書 22-30 頁の講読、学生による話題提供
7	「国引き」の凄い話を一つ	教科書 30-34 頁の講読、学生による話題提供
8	フランス人の頭に入っている古代史の要点	教科書 34-38 頁の講読、学生による話題提供
9	他の地方ではわからない地方の心	教科書 38-41 頁の講読、学生による話題提供
10	ケルト暮らしの長さは縄文暮らしに匹敵	教科書 42-46 頁の講読、学生による話題提供
11	ローマ支配下の「ガロ=ロマン」文明	教科書 46-50 頁の講読、学生による話題提供
12	フランク族のガロ=ロマン化	教科書 50-55 頁の講読、学生による話題提供
13	ブルトン人がらみで仏英関係を見る	教科書 55-60 頁の講読、学生による話題提供
14	まとめ	予備日

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

(ア) 教科書の次回の範囲を予習してきてください。
 (イ) 指定する LMS（学習支援システム-Hoppii か Google Classroom）の場所に、話題提供用のリンクと文章を授業前に貼り付けてください。
 (ウ) この授業の準備や復習に必要な学習時間は、上記（ア）（イ）を行うのに必要な時間とします。日本語やその他の言語の習熟度が異なる学生が履修する授業であるため、一律の時間の長さは掲載しませんが、大学設置基準に鑑みた場合、2単位の講義及び演習の準備・復習時間は1回につき4時間以上とされています。

【テキスト（教科書）】

篠沢秀夫『フランス三昧』中公新書、2006年。

【参考書】

鹿島茂編『バースデイ・セイント』飛鳥新社、2000年。

【成績評価の方法と基準】

(ア) 学生による発表（話題提供1回3点）55%
 (イ) 授業参加の積極性（担当範囲外での発言など）30%
 (ウ) その他（授業運営への協力など）15%

【学生の意見等からの気づき】

法政大学が提供している LMS（学習支援システム-Hoppii や Google Classroom）を、Zoom と併用しますが、中華人民共和国など Google への接続が困難な国から接続せざるをえない履修者がいた場合は、配慮いたします。

2020年度は、G Suite を活用した文書共有に加え、Hoppii の「OATube」機能を使い、PressReader の使い方を説明するために作った動画を掲載することも行いました。

また就職活動などによる欠席者のために、Zoom の授業録画などを、履修者のみのあいだで、一般には非公開のかたちで共有する予定です。2020年度にリアルタイム・オンライン授業に初めて挑戦しましたが、教室における対面授業に劣らず、オンラインでも、学生間のコミュニケーションはとれていたのではないかと思います。教員も努力しますが、履修学生の皆さんも、できれば Web カメラを ON にするなどして、活発な雰囲気づくりにご協力ください。

【学生が準備すべき機器他】

- ①資料の配布や学生からの成果物の提出、その他さまざまな連絡は、基本的にすべてウェブ上（学習支援システム-Hoppii 等）で行ないます。
- ②パソコン、タブレット等を用いたプレゼンテーションを行って頂きます。Zoom 上での画面共有をもちいたプレゼンテーションをしたことがない方は、法政大学大学院から Zoom のアカウントが配布されますので、練習をしておいてください。
- ③学外から法政大学図書館のオンラインデータベース（JapanKnowledge や PressReader の利用を推奨しています）が利用できるよう、VPN 接続の使い方をマスターしてください。
- ④法政大学が提供している VPN 接続の使用方法については「全学ネットワークシステムユーザ支援 WEB サイト / VPN サービス」を検索、参照してください。

【その他の重要事項】

- ①いわゆる日本の教育課程を経てきた大学院生だけでなく、外国大学を経て法政大学大学院に留学しにきている大学院生や研修生、各種コンソーシアムの大学院生、法政大学国際文化学部の学部生の履修を歓迎します。
- ②学外の方でこの科目への参加を希望される方は、科目等履修生としてご参加下さい。詳しくは法政大学大学院の事務窓口までお問合せ下さい。
- ③教科書となっている篠沢教授の文章は、初学者にわかりやすく、また人柄がしのばれて面白いですが、講師とは意見が異なる場合があります。

【担当教員の専門分野等】

法政大学学術研究データベース <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/20/0001982/profile.html>

私の研究指導（論文主査）で修士論文を執筆することを希望される方に向けたお願いを、学術研究データベースに記してありますので、該当する方は必ず出願する前にご覧ください。

【Outline and objectives】

This seminar is an introduction to the multiple facets of French culture, history, and society. Open to students with little or no previous instruction in French, this seminar will enable students to attain a basic understanding of Mainland France and its terroirs.

多言語社会論 B

大中 一彌

サブタイトル：現代ヨーロッパの基礎研究

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランス語圏やヨーロッパを中心とし、複数の言語や文化をめぐる関係性にフォーカスしながら、政治や社会について専門的に学びます。

【到達目標】

- ・使用言語は日本語とする。英語、フランス語など言語の運用能力の習得はこの授業の到達目標に入らない。
- ・必ずしも現代ヨーロッパについて専門的に学んだことのない方をふくめ、大学院生として研究をおこなうのに必要な教養を身につける。
- ・【教科書】 フランスの歴史についての基礎的な知識を得る。
- ・【映像】 時事問題などより現代的な話題と教科書で得た知識を関連づけられるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

1. 教科書の輪読
 2. 毎週の授業で簡単な話題提供（1人5分程度）
 3. 映像の分析
- この授業は、オンライン授業（リアルタイム配信型）で実施の予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	新学期の顔合わせ	授業計画の説明
第2回	ノルマン人がらみで仏英関係を見る	教科書 60-63 頁の講読、学生による話題提供
第3回	国家観念の芽生えは百年戦争	教科書 64-71 頁の講読、学生による話題提供
第4回	ルネッサンスは神に人間の尊厳を主張	教科書 71-75 頁の講読、学生による話題提供
第5回	ナントの勅令は関が原の二年前	教科書 75-78 頁の講読、学生による話題提供
第6回	ブルボン王朝による国勢の得失	教科書 78-83 頁の講読、学生による話題提供
第7回	大革命によるキリスト教の否定	教科書 83-90 頁の講読、学生による話題提供
第8回	大革命の発明 「国民国家」と「徴兵制」	教科書 91-98 頁の講読、学生による話題提供
第9回	「文化」と「文明」の区別	教科書 174-178 頁の講読、学生による話題提供
第10回	中央集中性	教科書 178-181 頁の講読、学生による話題提供
第11回	自己完結性	教科書 181-189 頁の講読、学生による話題提供
第12回	自己完結性は自己満足に結びつく	教科書 190-193 頁の講読、学生による話題提供
第13回	革命はフランスの自己完結性の実現	教科書 193-197 頁の講読、学生による話題提供
第14回	まとめ	予備日

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

（ア）教科書の次回の範囲を予習してきてください。

（イ）指定する LMS（学習支援システム-Hoppii か Google Classroom）の場所に、話題提供用のリンクと文章を授業前に貼り付けてください。

（ウ）この授業の準備や復習に必要な学習時間は、上記（ア）（イ）を行うのに必要な時間とします。日本語やその他の言語の習熟度が異なる学生が履修する授業であるため、一律の時間の長さは掲載しませんが、大学設置基準に鑑みた場合、2単位の講義及び演習の準備・復習時間は1回につき4時間以上とされています。

【テキスト（教科書）】

篠沢秀夫『フランス三昧』中公新書、2006年。

【参考書】

鹿島茂編『バースデイ・セイント』飛鳥新社、2000年。

【成績評価の方法と基準】

- （ア）学生による発表（話題提供1回3点）55%
- （イ）授業参加の積極性（担当範囲外での発言など）30%
- （ウ）その他（授業運営への協力など）15%

【学生の意見等からの気づき】

法政大学が提供している LMS（学習支援システム-Hoppii や Google Classroom）を、Zoom と併用しますが、中華人民共和国など Google への接続が困難な国から接続せざるをえない履修者がいた場合は、配慮いたします。

2020年度は、G Suite を活用した文書共有に加え、Hoppii の「OATube」機能を用い、PressReader の使い方を説明するために作った動画を掲載することも行いました。

また就職活動などによる欠席者のために、Zoom の授業録画などを、履修者のみのあいだで、一般には非公開のかたちで共有する予定です。2020年度にリアルタイム・オンライン授業に初めて挑戦しましたが、教室における対面授業に劣らず、オンラインでも、院生間のコミュニケーションはとれていたのではないかと思います。教員も努力しますが、履修される院生の皆さんも、できれば Web カメラを ON にするなどして、活発な雰囲気づくりにご協力ください。

【学生が準備すべき機器他】

- ①資料の配布や学生からの成果物の提出、その他さまざまな連絡は、基本的にすべてウェブ上（学習支援システム-Hoppii 等）で行ないます。
- ②パソコン、タブレット等を用いたプレゼンテーションを行って頂きます。Zoom 上での画面共有をもちいたプレゼンテーションをしたことがない方は、法政大学大学院から Zoom のアカウントが配布されますので、練習をしておいてください。
- ③学外から法政大学図書館のオンラインデータベース（JapanKnowledge や PressReader の利用を推奨しています）が利用できるよう、VPN 接続の使い方をマスターしてください。
- ④法政大学が提供している VPN 接続の使用方法については「全学ネットワークシステムユーザ支援 WEB サイト / VPN サービス」を検索、参照してください。

【その他の重要事項】

- ①いわゆる日本の教育課程を経てきた大学院生だけでなく、外国大学を経て法政大学大学院に留学しにきている大学院生や研修生、各種コンソーシアムの大学院生、法政大学国際文化学部学部の履修を歓迎します。
- ②学外の方でこの科目のみの聴講を希望される方は、科目等履修生としてご参加下さい。詳しくは法政大学大学院の事務窓口までお問合せ下さい。
- ③教科書となっている篠沢教授の文章は、初学者にわかりやすく、また人柄がしのばれて面白いですが、講師とは意見が異なる場合があります。
- ④この授業は、秋学期（後期）のみでも受講できます。

【担当教員の専門分野等】

法政大学学術研究データベース <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/20/0001982/profile.html>
私の研究指導（論文主査）で修士論文を執筆することを希望される方に向けたお願いを、学術研究データベースに記してありますので、該当する方は必ず出願する前にご覧ください。

【Outline and objectives】

This seminar is an introduction to the multiple facets of French culture, history, and society. Open to students with little or no

previous instruction in French, this seminar will enable students to attain a basic understanding of Mainland France and its terroirs.

SOS500G1 - 208

多民族共生論 I A

松本 悟

サブタイトル：開発と民族

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業のテーマは「開発と民族」である。主に開発途上国の先住民族を取り上げる。「開発」が先住民族を初めとする少数民族の生活や考え方にどのような影響を与えてきたのかを文献から読み取り、学際的な視点から共生のあり方を考え議論する。

【到達目標】

- (1) 民族とは何か、先住民族とはどのような人々を指すのかを既存文献から多角的に説明できるようになる。
- (2) 近代以降の「開発」が少数民族や先住民族に与えた影響を分析する切り口（視点）を複数身につける。
- (3) 当該分野の専門的な文献（日本語と英語）を読んで理解できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

■基本方針：国際文化研究科では、2021年度の授業をオンライン授業で実施することを決定した。この授業に関しても Zoom 等によるリアルタイム・オンライン授業で実施する。ただし、法政大学の「新型コロナウイルス感染症に対する行動方針」のレベル 1 以下になった場合、履修者と相談して教室での対面授業に切り替える可能性はある。

■第 1 回は教員が担当し、第 2 回からは事前課題文献（日本語か英語）をもとに学生が発表・議論する。進め方は以下の通り。

- (1) 履修者全員が事前課題文献（20 頁程度を想定）を熟読し、①「この文献から重要だと考えた点」を最低 3 つ、②そう考えた理由、③そこから導いた論点（履修者同士で議論したい点）を発表する。
- (2) (1) を共有した上で、履修者の間でその日議論したい点を絞り（全ての論点でもよい）議論する。
- (3) 必要に応じて教員が補足授業を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の狙いを説明し、履修者の関心を聞き取る。それにしたがって授業内容を変更・確定する。また、文献の読み方や論点の意味について解説する。
2	人種・民族・エスニシティ	用語の定義と虚構性、それらを使用する意味について議論する。
3	先住民の「作られ方」	カンボジアを例に、先住民が作られるプロセスを考える。
4	「開発と先住民」研究	人類学におけるこのテーマの研究動向についてレビューし議論する。
5	エスニシティ、アイデンティティ、共生	多民族共生を考える上での難しさを議論する。
6	「エスニシティ」と開発	エスニシティと開発の関係を考える枠組みについて考える。
7	「人種」と開発	人種 (race) と開発がどのように関連付けられてきたかを考える。
8	言語とエスニックアイデンティティ	開発や近代化に繋がる識字とエスニックアイデンティティについて考える。
9	開発疾病	開発途上国での感染症の発生源を探ることで医療と先住民族について考える。
10	先住民族と定住化・開発避難民	定住化などよりよい生活を目的とした開発が「避難民」を生み出す例から先住民族にとっての開発の意味を考える
11	格差と少数民族	中国の広西チワン族自治区を例に、開発が民族にもたらす格差について考える。
12	天然資源開発と少数民族	天然資源開発特有の少数民族への影響について考える。
13	学生による発表	履修している学生による文献研究発表。
14	先住民族から見た現代世界	現代の視点で先住民族を見るのではなく、先住民族からの視点で現代社会を見ることで開発の意味について考え直す。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・事前課題文献は時間をかけて読み、課題に取り組むこと。

- ・毎回の授業で学んだことを短く学習支援システムに投稿すること。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

課題文献（英語、日本語）は学習支援システムを通じて配布。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- (1) 事前課題・発表 40%（文献の正しい理解、説得力のある論点の抽出）
- (2) 平常点 30%（授業での積極的な発言・議論のファシリテート）
- (3) 授業後課題 30%（授業内容の理解度）

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、および Zoom 等のオンライン授業に必要な通信環境。

【その他の重要事項】

- ・少数民族が多く暮らす東南アジアの開発現場に長く関わっている教員が、自らの経験をもとに課題文献や発表者へのコメントを行う。
- ・履修者の人数や語学力によって課題文献は柔軟に対応する。また履修者の研究に関する発表や議論を柔軟に組み入れる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際開発研究

<研究テーマ>影響評価、国際組織、開発援助、NGO

<主要研究業績>

『調査と権力』（単著、東大出版会、2014 年）

『NGO と世界銀行』（共編著、ミネルヴァ書房、2012 年）

『人々の資源論』（共著、明石書店、2008 年 9 月）

『シリーズ国際開発 生活と開発』（共著、日本評論社、2005 年 9 月）

【Outline and objectives】

The Theme of this course is "development and ethnic minorities" particularly, indigenous people in the lower and middle income countries (so-called developing countries). It focuses on impacts of "development" on their livelihoods and their ways of thinking.

多民族共生論 I B

松本 悟

サブタイトル：先住民（族）と国際規範—開発協力を中心に—

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は「先住民と国際規範」をテーマとし、国際連合や国際開発機関、民間銀行の国際協会などの宣言や政策が形成された過程やその実効性を批判的に読み解きながら、先住民など多民族が共生できる国際社会に向けた規範のあり方を考える。

【到達目標】

- (1) 先住民の権利を守る国際規範の形成史を説明できる。
- (2) 実際の規範がどのように実務に適用されているかを批判的に分析できる。
- (3) 当該分野の専門的な文献を読んで要点を理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

■基本方針：国際文化研究科では、2021 年度の授業をオンライン授業で実施することを決定した。この授業に関しても Zoom 等によるリアルタイム・オンライン授業で実施する。ただし、法政大学の「新型コロナウイルス感染症に対する行動方針」のレベル 1 以下になった場合、履修者と相談して教室での対面授業に切り替える可能性はある。

■第 1 回は教員が担当し、第 2 回からは事前課題文献（日本語か英語）をもとに学生が発表・議論する。進め方は以下の通り。

- (1) 履修者全員が事前課題文献（20 頁程度を想定）を熟読し、①「この文から重要だと考えた点」を最低 3 つ、②そう考えた理由、③そこから導いた論点（履修者同士で議論したい点）を発表する。
- (2) (1) を共有した上で、履修者の間でその日議論したい点を絞り（全ての論点でもよい）議論する。
- (3) 必要に応じて教員が補足授業を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の狙い、課題文献を説明し履修者の関心を聞き取る。それにしたがって授業内容を変更・確定する。発表の担当者を決める。また、文献の読み方や論点の意味について解説する。
2	先住民（族）について	多民族共生論 IA の復習を兼ねて先住民（族）という概念について考える。
3	世界銀行の政策変化	世界銀行の過去と現在の先住民（族）配慮政策を比較して何が変わり、何が変わらなかったかを考える。
4	先住民（族）と開発政策	世界銀行のプロジェクトで影響を受ける先住民（族）にどのように配慮政策（国際機関）を伝えるべきかを考える。
5	世界銀行と先住民族	世界銀行の先住民（族）配慮政策についてその歴史と妥当性を議論する。
6	学生による発表①	履修者による研究発表と議論。
7	先住民の権利に関する国連宣言	2007 年の画期的な宣言の意義とそこに至るプロセスから国際規範形成の難しさを考える。
8	自由で事前に十分な情報が提供された合意 (FPIC)	先住民（族）と開発を考える上で重要な FPIC の概念の成り立ちと葛藤から主体的な関与について考える。
9	企業の海外進出を支援する輸出信用機関の政策	日本の国際協力銀行 (JBIC) の環境社会配慮政策を世界銀行や ODA と比較して考える。
10	学生による発表②	履修者による研究発表と議論。
11	プロジェクトを通して考える①カンボジア	実際の開発協力プロジェクトにここまでの学びを適用して考える。1 回目はカンボジア北東部の事業。
12	プロジェクトを通して考える②フィリピン	2 回目は先住民族に関わる 2 つのタイプの NGO（プロジェクト、アドボカシー）の事業から市民社会の影響について考える。
13	プロジェクトを通して考える③ダム開発	中国などの新興ドナーの先住民（族）配慮について、世界銀行と比較して考える。

ここまでの授業を横断的に捉えなおし、先住民族の権利を守るための国際規範について考える際の重要な視点について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・事前課題文献は時間をかけて読み、課題に取り組むこと。
- ・毎回の授業で学んだことを短く学習支援システムに投稿すること。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

課題文献（英語、日本語）は学習支援システムを通じて配布。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- (1) 事前課題・発表 40%（文献の正しい理解、説得力のある論点の抽出）
- (2) 平常点 30%（授業での積極的な発言・議論のファシリテート）
- (3) 授業後課題 30%（授業内容の理解度）

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、および Zoom 等のオンライン授業に必要な通信環境。

【その他の重要事項】

・国際金融機関の先住民族政策を含むセーフガード政策の改善を働きかける活動に NGO 職員として関わっていた教員が、その経験を発表へのコメントや補足講義に活かす。
・履修者の人数や語学力によって課題文献は柔軟に対応する。また履修者の研究に関する発表や議論を柔軟に組み入れる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際開発研究

<研究テーマ>影響評価、国際機構論、国際協力学

<主要研究業績>

『国際協力と想像力』（編著、日本評論社、2021 年）

『調査と権力』（単著、東京大学出版会、2014 年）

『NGO から見た世界銀行』（編著、ミネルヴァ書房、2013 年）

『映画で学ぶ国際関係 II』（共著、法律文化社、2013 年）

『人々の資源論』（共著、明石書店、2008 年 9 月）

『シリーズ国際開発 生活と開発』（共著、日本評論社、2005 年 9 月）

【Outline and objectives】

The theme of this course is indigenous people and international norms. It will enable students to critically understand the historical development and the application for the projects of international norms to protect indigenous peoples' rights in relation to not only international development cooperation but also international finance or foreign investment.

HIS500G1 - 210

多民族共生論Ⅱ A

高柳 俊男

サブタイトル：人物でたどる日本近現代史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「多民族共生論Ⅱ」は、春学期と秋学期で学ぶ内容を変えている。

春学期のⅡ A では、朝鮮やアジアと関係の深い日本人個人に関する伝記的著作を読んで、アジアをめぐる近現代日本の思想や社会運動の潮流を振り返っている（秋学期のⅡ B は、在日朝鮮人をめぐる日本の多民族共生について考察）。

Ⅱ A ではこれまで、鶴見俊輔・和田春樹・石田雄・富山妙子・岡部伊都子・日高六郎・松本昌次・上田正昭・茨木のり子を扱ってきた。今年度は、黒川創による立派な伝記（大佛次郎賞受賞）が刊行されたことを踏まえ、哲学者で行動する知識人だった鶴見俊輔（1922～2015 年）をあらためて取り上げたい。

- ① 鶴見俊輔という個人の歩んだ道や、その中で身につけた思想・ものの見方を知る
- ② 鶴見俊輔や彼と関わりのあった他の人物を通して、近現代日本の社会・思想・文化などの潮流をたどる
- ③ とくに、アジアとの関わりの中で、どのような社会運動・思想潮流があったかに着目する
- ④ 特定の個人に関する伝記的著作の中から追究すべき課題を見出し、調査・探求する
- ⑤ これまでの各人の研究や関心に応じて、受講者相互間に有益な討論を成立させる

【到達目標】

上記「授業の概要と目的」にある各項目について、大学院修士課程の学生として求められるレベルに達することを目標とする。

具体的には、歴史の中を生きる個人の伝記的記述を読むことを通して、日本近代史をアジアとの関わりの中で再検証するための契機をつかめるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」と「DP3」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

今回のテキストは、鶴見俊輔に関する評伝である。500 頁に及ぶ大冊なので、1 回につきほぼ 50 頁ずつのペースで読み進めていく。

レポーターの報告と全員の討論により、ゼミのような形で進める。レポーターは、登場する人物や事件などの事象のうち、大切と思われる点や関心のある点を中心に事実調べをし、授業で議論すべき論点を提出すること。近年格段に検索が容易になった各種のデータベースを駆使し、関連する当時の新聞・雑誌記事などにも目配りをしながら、時代を実証的に再現するよう努めることが大事である。

受講者数が少ない場合は、負担が極端に多くなることを避け、レポーター無しで進める回も設ける。

また、関連する映像を観る回も、数回入れる。

※初回の授業は「対面」で実施します。指定の教室にお越しください。不可の方は、学習支援システムに仮登録の上、そこに書かれた指示に従ってください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入（その 1）	受講者各自の自己紹介、授業計画の解説、参考文献の紹介などのガイダンス

- 第2回 導入（その2） 年譜や各種新聞記事などを使いながら、鶴見俊輔の伝記的な事項をあらかじめ整理する
- 第3回 テキスト 第一章第一節～第二節 生い立ちと家族関係
- 第4回 テキスト 第一章第三節～第二章第二節 米国留学、佐野碩のこと
- 第5回 テキスト 第二章第三節～第二章第六節 日米開戦と「交換船」での帰国、応召
- 第6回 関連映像の上映① 鶴見俊輔の映像鑑賞①
- 第7回 テキスト 第三章第一節～第四節 戦後の出発、『思想の科学』の創刊
- 第8回 テキスト 第三章第五節～第七節 雑誌『思想の科学』での諸活動
- 第9回 テキスト 第四章第一節～第五節 六〇年安保闘争と「声なき声の会」、竹内好
- 第10回 関連映像の上映② 鶴見俊輔の映像鑑賞②
- 第11回 テキスト 第四章第六節～第一〇節 ベトナム戦争と「ベ平連」の活動、韓国・朝鮮との関わり
- 第12回 テキスト 第五章第一節～第五節 民芸運動への関心
- 第13回 テキスト 第五章第六節～第九節 日高六郎、アジア女性基金、若いへの向き合い方
- 第14回 関連映像の上映③ 鶴見俊輔以外の人物の映像を観て、まとめとする

【Outline and objectives】

This class aims to study about the trends of contemporary Japanese thought and social movements over Asia, by reading of a biographical work on Japanese individual closely related to Korea. In this year, we read the book on Shunsuke Tsurumi.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中に指示する関連文献の講読、関連映像視聴、関連箇所への訪問など。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

黒川創『鶴見俊輔伝』（新潮社、2018年）

【参考書】

以前この授業でテキストとした鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二『戦争が違ったもの：鶴見俊輔に戦後世代が聞く』（新曜社、2004年）をはじめ、膨大にある鶴見俊輔の著作。

そのほか、本書のなかで登場する他の著述家たちの著書に、適宜あたってみること。

【成績評価の方法と基準】

レポーター時の報告30%、普段の授業への貢献度40%、学期末に提出する授業総括報告書30%を目安とし、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

例年、少人数の授業のため、「授業改善アンケート」非実施科目だが、私の授業では教員を含む参加者全員が、最後に自分なりの授業総括報告書を作成し共有化しており、それを次年度の授業改善に活かすよう努めている。

近年、留学生の受講も増えてきたが、一般学生も留学生も、ともに意義を感じるような授業を目指したい。

【学生が準備すべき機器他】

リモート授業になる場合は、PCと接続環境

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

朝鮮近現代史、とくに在日朝鮮人（広義）の歴史や文化の研究

<研究テーマ>

在日朝鮮人の歴史や文化を、従来の「差別問題」という視角からでは抜け落ちてしまう諸側面も含めて、多面的に描き出し、新しい時代に合わせた等身大の在日像と、日本社会のあるべき姿を考察すること。そのために文献収集や聞き書きを行ない、これまで光が当てられなかったような個人の事例を数多く集めること。

<主要研究業績>

・「渡日初期の尹学準—密航・法政大学・帰国事業」（法政大学国際文化学部『異文化』第5号論文編、2004年）

・「短歌と在日朝鮮人—韓武夫を手がかりとして」（日本社会文学会『社会文学』第26号、2007年）

・「飯田・下伊那研修を意義あるものとするために—国際系学部の事前学習授業の実際から」（『学輪 IIDA』機関誌『学輪』第2号、2016年）

*詳細は、「学術データベース」をご参照のこと

HIS500G1 - 211

多民族共生論Ⅱ B

高柳 俊男

サブタイトル：朝鮮・在日朝鮮人と日本社会

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- 在日朝鮮人をめぐる日本の多民族共生について考察する。
- ①在日朝鮮人（総称）が経てきた歴史を明らかにする
 - ②政治史や運動史のみならず、生活史・文化史・精神史の解明に重点を置く
 - ③日本における朝鮮民族との民族間関係や相互認識の諸相を考察する
 - ④在日朝鮮人の事例をもとに、日本国内の他の民族間関係について考える際の視点を養う
 - ⑤一次資料を含めた文献の調査や読解に関してレベルアップを図る

【到達目標】

上記「授業の概要と目的」にある各項目について、大学院修士課程の学生として求められるレベルに達することを目標とする。

具体的には、在日朝鮮人の経てきた歴史・文化やその日本社会との関わりを、自らの知性と感性により時間的・空間的広がりの中で理解し、受け売りや図式的把握ではなく、自らの言葉で具体的に・実証的に語れるようになることを目指す。

また、「研究」という自らの行為を、より客観的・多面的に眺める契機を得るようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」と「DP3」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

秋学期のこの授業では、日本社会に大きな比重を占める「異民族集団」である在日朝鮮人を素材に、日本における異文化摩擦や多民族共生の姿を具体的に考察している。

2012年度から8年間、戦後、各種の民族団体・政党・社会運動団体ないし日本政府関係機関などが出した朝鮮関係のパンフレット・小冊子を読み解きながら、戦後の朝鮮・在日朝鮮人をめぐる論調や運動の系譜を辿る作業を行った。取り上げたテーマは、戦後初期の在日朝鮮人運動、都立時代も含めた民族学校、朝鮮戦争、北朝鮮帰国事業、祖国自由往来運動、朝鮮高校生への襲撃、日韓条約、外国人学校法案、出入国管理法、金嬉老事件、日立就職差別事件と民闘連運動、韓国民主化運動、在日韓国人政治犯、丸正事件、在日朝鮮人理解のための副読本作成、などである。

定年前最後のサバティカルを経た今年度からは、私自身が大学生以来、このテーマで執筆してきた各種の文章を取り上げる。研究者としての自己の歩みを俎上に載せるのは、必ずしも受講者に範を垂れる意味ではなく、その試行錯誤や紆余曲折の歩みを示すことで、同じく「研究」に携わる立場である受講生に、何らかの参考や示唆となることを期待するからである。

取り上げるそれぞれの著作は、その時代の社会潮流や研究動向の産物であり、また当然のこととしてその後のことは書いていないので、現在からみたら不十分な箇所もある。受講者は、テキスト内容を正確に読み解くとともに、それらを「当時」と「現在」という2つの文脈の中に置いて、客観的・学術的に分析していく。すなわち、なぜこのような主張がなされたか、「当時」の背景を明らかにすると同時に、「現在」の目から見た認識の問題点や、当該課題のその後の推移、さらには研究史の進展などもフォローしつつ報告するよう努めること。

授業の進め方としては、テキストをレポーターの報告と全員の討論で読んでいく。受講者が少なければレポーター無しの場合も設けたい。関連映像の視聴も、適宜織りませる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	受講者の自己紹介、授業計画の解説、当面のテキスト配付、など。
第2回	中西伊之助①	学部卒業時の論文の要約を読む
第3回	中西伊之助②	学部叢書掲載の文章を読む
第4回	啓発冊子①	『ふれあいのまち大阪：在日外国人とともに生きる』を読む
第5回	啓発冊子②	『すぎなみの中の KOREA』を読む
第6回	関連映像の上映①	前4回の授業に関連する映像を観る
第7回	在日朝鮮人史の通史	岩波新書『在日朝鮮人：歴史と現在』の書評
第8回	エスニック雑誌の刊行①	雑誌『民主朝鮮』から『新しい朝鮮』までを取り上げる
第9回	エスニック雑誌の刊行②	雑誌『朝鮮文藝』を取り上げる
第10回	関連映像の上映②	前3回の授業に関連する映像を観る

第11回	雑誌編集長としての李進熙	自伝書評と弔辞を取り上げる
第12回	日本の報道論調①	1950から60年代の在日朝鮮人と日本の世論
第13回	日本の報道論調②	日韓条約締結時の新聞論調
第14回	関連映像の上映③	前3回の授業に関連する映像を観る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストに登場する文献や授業中に指示する関連文献の講読、関連映像の視聴、関連箇所への訪問など。

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

その都度、紙媒体もしくは pdf で配付する。

【参考書】

『韓国朝鮮を知る事典』（平凡社）、『在日コリアン辞典』（明石書店）などの事典類

【成績評価の方法と基準】

レポーター時の報告30%、普段の授業への貢献度40%、および学期末の授業総括報告書30%を目安に、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

例年、少人数の授業のため、「授業改善アンケート」非実施科目だが、私の授業では教員を含む参加者全員が、最後に自分なりの授業総括報告書を作成し共有化しており、それを次年度の授業改善に活かすよう努めている。

近年、留学生の受講も増えてきたが、一般学生も留学生も、ともに意義を感じるような授業を目指したい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

朝鮮近現代史、とくに在日朝鮮人（広義）の歴史や文化の研究、日朝関係史<研究テーマ>

在日朝鮮人の歴史や文化を、従来の「差別問題」という視角からでは抜け落ちてしまう諸側面も含めて、多面的に描き出し、新しい時代に合わせた等身大の在日像と、日本社会のあるべき姿を考察すること。そのために文献収集や聞き書きを行ない、これまで光が当てられなかったような個人の事例を数多く集めること。

<主要研究業績>

・「渡日初期の尹学準一密航・法政大学・帰国事業」（法政大学国際文化学部『異文化』第5号論文編、2004年）

・「短歌と在日朝鮮人—韓武夫が手がかかりとして」（日本社会文学会『社会文学』第26号、2007年）

・「飯田・下伊那研修を意義あるものとするために—国際系学部の事前学習授業の実践から」（『学輪 IIDA』機関誌『学輪』第2号、2016年）

*詳細は、本学の「学術研究データベース」をご参照

【Outline and objectives】

This class aims to study about Japanese multicultural coexistence, by reading of my own papers on Japan-Korea relations or Korean minority in Japan.

国際ジャーナリズム論

神林 毅彦

サブタイトル：グローバル化社会におけるジャーナリズムの役割

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際報道の現状、必要性を分析し、その問題点や対策等を重点的に議論する。下記が主な内容となる。

1. 国内メディアとさまざまな海外メディアの報道比較、SNS の影響 2. 外交とジャーナリズム 3. 国際報道にみられる政治的、経済的、社会的影響

【到達目標】

変化し続ける現代の情報環境と国際報道の現状、そして、問題点に関して、論理的に説明する。単に受動的に情報を受け取るのではなく、積極的に情報を収集でき、かつ、効果的な情報発信も行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

海外メディアが報じる日本、また、日本、海外メディアの国際報道を検証しながら、ジャーナリズムの本来の役割について議論する。また、国際ニュースとなる要素、その影響についても発表、議論する。国際報道に関連する校外学習も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり/Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	ジャーナリズムの役割
第2回	メディアの特性（Ⅰ）	メディアと公共性、ニュースの構造、要素
第3回	メディアの特性（Ⅱ）	国際報道とその背景
第4回	メディアの特性（Ⅲ）	国際報道と多様化するメディア
第5回	メディアの特性（Ⅳ）	国際報道と外交
第6回	メディアの特性（Ⅴ）	報道の客観性と倫理的問題
第7回	国際ジャーナリズム（Ⅰ）	領土問題、歴史問題に関する報道
第8回	国際ジャーナリズム（Ⅱ）	経済、貿易に関する報道
第9回	フィールドワーク	インタビュー、取材
第10回	国際ジャーナリズム（Ⅲ）	環境問題に関する報道
第11回	フィールドワーク	インタビュー、取材
第12回	国際ジャーナリズム（Ⅳ）	日本における海外メディア
第13回	国際ジャーナリズム（Ⅴ）	日本のメディアの国際報道
第14回	今後の国際報道	メディアの多様化、双方向の発信、受信

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

さまざまな国際報道に目を向け、批評を行う。直近のニュースを常に気にする。また、報道の方法、背景などを周囲の人と話し合う。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

とくになし。担当者が資料等を配付する。

【参考書】

ビル・コヴァッチ、トム・ローゼンステール「ジャーナリズムの原則」日本経済評論社 2002年（原書 The Elements of Journalism）
The New York Times, The Financial Times, Xinhua News Agency, Yonhap News, PBS News Hour, NHK, 他

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%、レポート（内容評価） 50%

【学生の意見等からの気づき】

以前は、授業で配布する記事、資料、また、授業中に扱う海外の報道番組は英文がほとんどだったが、学生の英語力に個人差があるため、日本語の記事、資料を増やしている。映画監督や福島原発事故避難者とのインタビューなどは積極的に参加していた。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ジャーナリズム論

<研究テーマ>国際ジャーナリズム論、ジャーナリズム倫理

<主要研究業績> 1) Chapter “Japan’s Ethnic Koreans: ‘Good Koreans or Bad Koreans. Kill Them Both!’” The Stranger Among Us, 2016, Createspace Independent Pub

2) “Ten years on, Japan’s Fukushima victims worry they’ve been forgotten,” 2021, the German News agency.

3) 「反基地運動を弾圧する不当な拘束の日々」『部落解放』2018年2月号、解放出版社

【Outline and objectives】

The theme of this course is theories of international journalism in the information age. This course provides opportunities for students to critique news coverage in Japanese and foreign media outlets and discuss mainly the impact of social media; foreign policy and journalism; and political, economic and social factors influencing media content.

HIS500G1 - 215

国際文化交流論Ⅱ A

木村 真

サブタイトル：人の移動現象にアプローチするさまざまな方法

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、さまざまな形態の人の移動が地域社会やさまざまな人間集団に与えた影響を考察します。人の移動は近現代の世界に限られた現象ではありませんが、とくに、19世紀以降の国民国家形成過程、都市化や近代化の過程、世界各地の紛争のなかで見られた出稼ぎ、国外・国内移住、強制的な住民交換、政治的亡命などの移動現象と人々のネットワーク、人々の帰属意識、さらに国家による政策の関係を注目します。それによって、現代社会で生じている多様な、多面的な移動現象の理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

- ①国民国家形成過程の人の移動について、多面的な理解を修得すること
- ②住民交換政策の地域社会に与える影響についての知見を得ること
- ③人々の多様な形態の移動にともなう送り出し地域、受け入れ地域の人々の文化的影響に関する知見を得ること
- ④以上のテーマについて、とくに歴史研究や地域研究の方法を学ぶこと

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

近代バルカン、東欧の事例を中心に担当者が講義も行いますが、受講者全員で関連文献、論文を読み、発表をしてもらいます。また、受講者の専門地域もしくは関心を持つ地域の事例について報告発表もしてもらう予定です。各授業の内容について質問、意見をリアクションペーパーの形で提出してもらいます。なお、対面式を前提としますが、状況によってオンラインとなるかもしれません。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方について
第2回	近代の東欧、バルカン社会(1)	東欧、バルカン地域における国民国家形成以前の人の移動
第3回	近代の東欧、バルカン社会(2)	帝国内の各地、ならびに帝国内外を結ぶさまざまな人の移動
第4回	国民国家形成過程と人の移動(1)	バルカン地域における国民国家形成のプロセス
第5回	国民国家形成過程と人の移動(2)	国家形成にともなう人の移動(武装勢力、軍隊、住民移動など)
第6回	国民国家形成過程と人の移動(3)	国家形成にともなう人の移動(出稼ぎ、季節労働など)
第7回	国民国家形成過程と人の移動(4)	国家形成にともなう人の移動(労働移民など)
第8回	国民国家形成過程と人の移動(5)	国家形成にともなう人の移動(亡命など)
第9回	紛争と人の移動(1)	紛争にともなう人の移動と国家の対応(住民交換)
第10回	紛争と人の移動(2)	紛争にともなう人の移動と国家の対応(強制移住)
第11回	紛争と人の移動(3)	紛争にともなう人の移動と国家の対応(難民)
第12回	移動する人々の帰属意識(1)	帰属意識の構築
第13回	移動する人々の帰属意識(2)	重層的な帰属意識
第14回	人の移動をめぐる研究から得られる知見	人の移動をめぐる歴史的な研究アプローチの可能性と限界

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告発表に際しては、あらかじめ、関連する文献を読み、レジュメを作成準備することを求めます。また、発表者以外の参加者も、関連する概念、事象などについて調べることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

受講者の関心に即して決めるつもりです。さしあたり、下記の文献を素材とする予定です。テキストはこちらでコピーを準備します。

Ulf Brunnbauer(ed.) Transnational Societies, Transnational Politics. Migration in the (Post-)Yugoslav Region, 19th-20th Century. Munchen, 2009.

【参考書】

授業において指示します。さしあたり、以下のものを挙げます。
ノーマン・M・ナイマーク『民族浄化のヨーロッパ史』刀水書房、2014年
山本明代、バブ・ノルベルト編『移動がつくる東中欧・バルカン史』刀水書房、2017年

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業における発表、ならびに議論への参加）（50%）、レポート課題（50%）によって評価します。

【学生の意見等からの気づき】

今回はありません。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉バルカン近現代史、東欧地域研究
ブルガリア史、南スラヴ地域を中心に、バルカン近現代史、東欧地域研究を専門としております。現在は授業のテーマでもある南東ヨーロッパ地域の近現代の人の移動を研究しています。また、東欧地域の史学史研究にも関心を持っております。

〈主要研究業績〉

『バルカン史と歴史教育』（共著）2008年 明石書店

『東欧地域研究の現在』（共著）2012年 山川出版社

『移動がつくる東中欧・バルカン史』（共著）2017年 刀水書房

【Outline and objectives】

I will examine the influence that various forms of migrations have exerted on regions and human groups in modern times. Since the 19th century in the process of nation-state building, urbanization and industrialization, and conflicts different forms of migrations have been seen. I will take some cases of migrations to deepen understanding of diversity of migrations.

比較宗教文明論

白杵 陽

サブタイトル：イスラームなどの一神教と日本

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

イスラム国（IS）は壊滅したものの、宗教・宗派・民族紛争は世界中で続いている。ヨーロッパではシリア内戦からの難民に対する排斥運動が続いている。トランプ米政権は「アメリカ・ファースト」を前面に押し出して今後世界がどんな方向に向かうのか、見えてこない。授業では、日本社会で宗教がどんな意味をもっているのかを出発点として世界の宗教紛争の現状を具体的な問題を取り上げながら検討していく。

【到達目標】

イスラーム世界を含む現代の宗教紛争を考える際に重要な点は、欧米社会に特徴的に見られる宗教を個人の信仰として捉えるのではなく、共同体あるいは社会における機能に注目して考えることである。文明として宗教を捉えるということはわれわれが現代社会における宗教現象を理解するうえでも重要な視点である。宗教文明における衝突はその教義のちがいでいうよりも、それぞれの宗教文明がそれぞれの歴史的過程を経て、その現在が形成されてきたということでもある。したがって、宗教文明を比較の視点から捉えるということは、現在の状況を歴史的な観点からプロセスとして読み直す作業でもある。したがって、宗教の名の下でのテロなどをたんに野蛮で時代錯誤的としてみるのではなく、現代における歴史的過程の帰結という観点からも考え直してみるということである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

出席者数によるが、テキストを決めて演習の形式で進めていくことを原則とした。必要に応じて、DVDなどの映像資料などを用いながら、「宗教」に関していったい何が問題なのかを含めて考えていくことにしたい。まずは「多神教」といわれる日本社会にとって「宗教」とは何かを考えていき、参加者の関心によってイスラームやユダヤ教などの「一神教」の世界へと話を移していきたい。毎回、授業に関する小レポートを書いて提出してもらう。本科目はオンラインで行うが、コロナ感染状況が好転し、国際文化研究科の判断で可能となった場合は対面授業を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	この授業で何を学んでいくのか。
第2回	なぜ日本人は無宗教なのか？①日本人の宗教観	近現代に注目して日本人の宗教観がいかなるものなのかについて考える。
第3回	なぜ日本人は無宗教なのか？②明治期から太平洋戦争まで	明治期から太平洋戦争までの日本人にとっての「宗教」とは何かを考える。
第4回	なぜ日本人は無宗教なのか？③戦後日本	戦後日本の日本人にとっての「宗教」の変容について考える。
第5回	なぜ日本人は無宗教なのか？④9・11事件後	9・11事件後の日本人のイスラーム観を考える。
第6回	日本と中東イスラーム世界の関係①明治・大正期	明治・大正期の日本・イスラーム関係史を考える。
第7回	日本と中東イスラーム世界の関係②戦前昭和期	戦前昭和期の日本・イスラーム関係史を考える。
第8回	日本と中東イスラーム世界の関係③大川周明の初期イスラーム研究	国家主義者の大川周明の青年期のイスラーム神秘主義研究について考える。
第9回	日本と中東イスラーム世界の関係④大川周明晩年のコーラン研究	国家主義者の大川周明の晩年のコーランの翻訳、その研究について考える。
第10回	日本人のユダヤ人観①戦前期	戦前日本のユダヤ人観と反ユダヤ主義
第11回	日本人のユダヤ人観②戦後期	戦後期日本のユダヤ人観と反ユダヤ主義
第12回	日本人のユダヤ人観③欧米との相違	キリスト教徒の多い欧米と日本のユダヤ人観観はどのように違うのか？
第13回	日本人のユダヤ人観④イスラーム世界	同じ一神教のイスラーム世界のユダヤ人観はキリスト教世界とどのように違うのか？
第14回	まとめ	総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

中東イスラーム世界、とりわけイスラーム主義あるいはテロはいつ起こるかわからない。したがって、毎日、新聞、テレビ、インターネットでニュースをチェックする習慣をつけてほしい。また、日々起こる事件の表層だけでなく、その底流に流れる事態の本質をきちんと見極める眼力を養ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

阿満利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書、1996年。
島岡進『国家神道と日本人』岩波新書、2010年。
白杵陽『イスラームはなぜ敵とされたのか』青土社、2009年。
白杵陽『大川周明—イスラームと天皇のはざま』2010年。

【参考書】

井筒俊彦『イスラーム文化』岩波文庫、1991年。
井筒俊彦『コーランを読む』岩波現代文庫、2013年。
大川周明『回教概論』ちくま学芸文庫、2008年。
大川周明『復興亜細亜の諸問題』中公文庫、2016年。

【成績評価の方法と基準】

授業内における報告および質疑応答など積極的な姿勢をもって参加しているかによって評価する（40%）。期末にはレポートを提出してもらう（60%）。

【学生の意見等からの気づき】

院生諸君との授業内でのコミュニケーションによって授業のあり方を検討する機会をもつことにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中東地域研究、宗教・エスニック問題

<研究テーマ>パレスチナ／イスラエル紛争、日本の対中東関係、とりわけ聖地問題

<主要研究業績>『見えざるユダヤ人』（平凡社）『原理主義』（岩波書店）、『大川周明』（青土社）『イスラエル』（岩波新書）、『イスラームはなぜ敵とされたか』（青土社）『アラブ革命の衝撃』（青土社）『世界史の中のパレスチナ問題』（講談社現代新書）など。

【Outline and objectives】

Religious, sectarian and ethnic conflicts still continue in the world after Islamic State (IS) disappeared. In Europe, there are expulsion movements against refugees from the Syrian civil war etc. In such situations, the US President Donald Trump announced “American First” policies. We cannot expect what would happen in the world in the near future. In this lecture, we will discuss world’s religious and ethnic conflicts in the world especially focusing upon the Middle East after what happens concerning religion in Japanese society.

FR1500G1 - 301

多文化情報空間論 I A

森村 修

サブタイトル：「人生の意味」の哲学

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）

【授業の概要】

2000年代になってにわかに議論が喧しくなってきた哲学的問題に、「反出生主義（Antinatalism）」がある。端的に言えば、「生まれてこないほうが良かった」という思想である。それゆえ、「反出生主義」とは、「存在してしまうことの害悪」をなるべく減らすために、将来生まれてくる可能性のある人々の誕生を防ぐことは道徳的に正しいという議論である。

哲学的に見れば、「反出生主義」の思想は、19世紀の哲学者アルトゥール・ショーペンハウアー（1788-1860）のペシミズムに遡ることができる。彼の影響のもとに、ニーチェは、『悲劇の誕生』のなかで「人間にとってもっとも善いことは、生まれなかったこと、存在しないこと、何者でないことだ。次に善いことは、すぐに死ぬことだ」と書き記している。

ニーチェがいうように、生まれなければよかったのであり、生まれたらすぐに死ななければならぬのなら、私たちはなぜ生きるのだろうか？ 存在することが「害悪」ならば、私たちは生きる必要がないし、そもそも「生きる意味」がない。しかし、本当にそうだろうか？

【授業の目的】

そこで本授業は、反出生主義の思想を検討しながら、私たちが「生きること」には「意味」があるのかという問いを哲学的に検討することを目的とする。端的に言えば、「人生には意味があるのか」あるいは「人生には意味がないのか」という問いに答えていくことである。

そのための導きの糸として、2021年度は、「人生の意味」の哲学の最近の成果として、伊集院利明『生の有意味性の哲学』（2021）を取り上げる。

【到達目標】

- ①「人生の意味」の哲学を概括することができる
- ②哲学的なテキストを読むことができる。
- ③レジュメを書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

- (1) 基本的に「演習」形式で行う。
 - (2) 毎回、担当を決め、レジュメを作成してもらう。
- ◆レジュメには、①担当箇所の翻訳と解説、②用語説明、③考察、④問題点を記載する。
- (3) 授業の進め方
 - ①特定質問者を決めて、担当者の発表に対して、質問を行う。
 - ②それ以外の授業参加者と教員を含めて質疑を行い、問題点について議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり/Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	・授業の進め方についての説明 ・発表の順番等の決定
第2回	第1章 序論①	1-1 本書の企図
第3回	第1章 序論②	1-2 Wolf-Metz パラダイム 1-3 Wolf-Metz パラダイムをめぐる疑問に対する暫定的な回答
第4回	第1章 序論③	1-4「第3現象路線」、「意味路線」、「典型例路線」
第5回	第2章 二つの基礎考察①	1-5 Wolf の論の問題点と第三現象路線 1-6 本書の路線 1-7 全体の見直し
第6回	第2章 二つの基礎考察②	2-1 Meaning in Life の客観説とは何か 2-2 典型例の扱い 2-3 各種の心理的バイアス
第7回	第3章 反成果主義的な客観説①	3-1 純成果主義は成り立たない
第8回	第3章 反成果主義的な客観説②	3-2 主観説と hybrid 説
第9回	第3章 反成果主義的な客観説③	3-3 結果成果を重視することはできないことについての、三つの予備考察
第10回	第3章 反成果主義的な客観説④	3-4 Alienation 問題的問題を考える

第11回 第3章 反成果主義的な客観説⑤

第12回 第3章 反成果主義的な客観説⑥

第13回 第4章 生実現生成説① 4-1 Job Crafting から Life Crafting へ

第14回 第4章 生実現生成説② 4-2 Life Crafting から生実現生成説へ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・担当者は、テキストの該当箇所のレジュメを発表前日までに教員に提出すること。
- ・特定質問者は、テキストの該当箇所に関する質問を3つ以上考え、簡単な質問表を作ってくる（発表当日でよい）
- ・それ以外の参加者は、該当箇所について質問を1つは考え、当日の議論に参加する準備をすること。
- ・本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

伊集院利明『生の有意味性の哲学——第三の価値を追求する』、晃洋書房、2021年。

【参考書】

- (1)「特集 反出生主義を考える——「生まれてこないほうが良かった」という思想」、『現代思想』、青土社、2019年11月号
 - (2)吉沢文武「ベネターの反出生主義をどう受けとめるか」、『現代思想』「特集 倫理学の論点 23」所収、青土社、2019年9月号
- ◆その他については、授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

- ・個別報告発表（50%）（回数および内容による評価）
 - ・特定質問担当（30%）（質問内容による評価）
 - ・討論参加（20%）（内容による評価）
- ※ 以上に基づいて、総合的に評価する。
※ なお、無断欠席は認めない。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

最近の大学院生の中には、基本的なテキスト読解が不十分な者が見受けられる。テキストを「読む」というのは、テキストを「読み解く」のであって「読み込む」のではないことは肝に銘じるべきである。「読み込む」ということは、自分の考えをテキストに投影することであり、それは単なる勝手な解釈に過ぎない。それでは、真にテキストを「読解する」ことにならない。あくまで「虚心坦懐」にテキストに向かい、「眼光紙背を徹する」態度でテキストに向かわなければ、哲学的なテキストを「読む」ことはできない。

また、担当者はレジュメを作成する上で、引用されているテキストはもちろん、それ以外にも用語・概念などについて、徹底的に下調べを行うべきである。担当者以外に対して、教員から授業中に質問することが多々あるので、担当者と同様に準備を怠らないでほしい。

演習とは practice（＝実践）を意味しているものであり、テキストを「読む」という実践は五感を十分に活用することです。授業に参加する皆さんは、哲学を「実践する」態度で臨んでもらいたい。

【受講上の注意】

本授業は、哲学・倫理学、思想の分野に深くコミットしているために、自身の思考の鍛錬を要する。テキストを読むこと、それに基づいて自分の思考を実践すること、これらの作業は哲学研究にとって必須のものとして心得てもらいたい。単に、カルチュラル・スタディーズや、ポスト・コロニアリズム研究などは異なるので、注意を要する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 現代哲学（現象学・構造主義以後のフランス哲学）・現代倫理学（ケアの倫理学・応用倫理学）

<研究テーマ> 生命体・地球を含む「生の倫理学」（例えば、暴力や虐待、テロなどによるトラウマや PTSD に苦しむ人々を「生・生活・人生・生命（life）」という観点からケアしていくためにしなければならない義務・責任を考察する）

<主要研究業績>

- 1.【単著】森村修『ケアの形而上学』、大修館書店、2020年
- 2.【共著】森村修「[社会政治的トラウマ]の倫理」、牧野英二・小野原雅夫・山本英輔・斎藤元紀編『哲学の変換と知の越境』所収、法政大学出版局、2019年【臨床哲学・生の倫理学】
- 3.【共著】森村修「アマルティア・セン——自由と正義のアイデア」、榎木玲子/法政大学国際文化学部編『境界』を生きる思想家たち』所収、法政大学出版局、2016年【現代倫理学】
- 4.【共著】森村修「ヨーロッパ」という問題——テロと放射能時代における哲学」、熊田泰章編『国際文化研究への道：共生と連帯を求めて』所収、彩流社、2013年【現代哲学】
- 5.【論文】森村修「西田幾多郎の「グラマトロジー」——〈書〉の美学=感性学（エステティクス）の可能性」、東北大学哲学研究室編『思索』、2021年（近刊）【日本哲学】
- 6.【論文】森村修「西田幾多郎の〈グラマトロジー〉序説——〈日本語で哲学すること〉の〈意味〉について」、法政大学国際文化学部編『異文化 21』、2020年【日本哲学】
- 7.【論文】森村修「市川白弦の「空-無政府-共同体論（Ś ūnya-Anarchist-Communism）」——小笠原秀実の仏教アナキズムと西谷啓治の自衛論批判をめぐって」、法政大学国際文化学部編『異文化 20』、2019年【日本哲学】

8. 【論文】森村修「技術は「ヒューマニズムを超える」か? (1) —ハイパー・ニヒリズム時代におけるハイデガーの「技術哲学」(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化 19』論文編、2018 年【現代ドイツ哲学・応用倫理学】
9. 【論文】森村修「パウル・ツェランという問題 (1) —ガダマーとデリダの「途切れない対話」(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化』論文編、2017 年【現代ドイツ・フランス哲学】
10. 【論文】森村修「思想の翻訳と文字の問題——比較思想から問文化性の比較思考へ」、比較思想学会編『比較思想研究』第 42 号、2016 年【日本哲学・Intercultural Philosophy】
11. 【論文】森村修「センの「道徳哲学」(1)——パトナム「事実／価値二分法の崩壊」論を手がかりに(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化 17』論文編、2016 年【現代倫理学】
12. 【論文】森村修「性的差異」のケア倫理学——フェミニズム倫理学と和辻倫理学における「肉体」の問題」、『比較思想研究』第 41 号、2015 年【日本哲学・ケアの倫理学】
13. 【論文】森村修「喪と／あるいはメランコリー (1)——デリダの〈精神分析の哲学〉(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化 16』論文編、2015 年【現代哲学】

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to examine the contemporary significance of "anti-birth" with special reference to Benatar's "I was better off not being born." By the way, according to Benatar, it is important to reduce the harm of this world by preventing the birth of newborns, and therefore abortion is affirmed. Eventually, he comes to the conclusion that humanity should be extinct.

As one of the responses to the philosophy of anti-natalism, we will examine the philosophy of the "meaning of life." The purpose of this class is to examine philosophically the question of whether our "life" has "meaning". Simply put, it is to answer the question, "Does life have meaning?" or "Does life have no meaning?"

In 2021, we will take up Toshiaki Ijuin's "Philosophy of the Meaningfulness of Life" (2021) as a recent achievement in the philosophy of "the meaning of life."

FRI500G1 - 302

多文化情報空間論 I B

森村 修

サブタイトル：〈承認〉と〈差異〉の社会哲学

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

【授業の概要】

2000 年代になっていよいよ議論が喧しくなってきた哲学的問題に、「反出生主義 (Antinatalism)」がある。端的に言えば、「生まれてこないほうが良かった」という思想である。「反出生主義」によれば、「存在してしまうことの害悪」をなるべく減らすために、**将来生まれてくる可能性のある人々の誕生を防ぐことは道徳的に正しい**という議論である。

哲学的に見れば、「反出生主義」の思想は、19 世紀の哲学者アルトゥル・ショーペンハウアー (1788-1860) のベシニズムに遡ることができる。彼の影響のもとに、ニーチェは、「悲劇の誕生」のなかで、「人間にとってのもっとも善いことは、生まれなかったこと、存在しないこと、何者でないことだ。次に善いことは、すぐに死ぬことだ」と書き記している。

ニーチェがいうように、生まれなければよかったのならば、また、生まれたらすぐに死ななければならないのなら、私たちは「生きる意味」がない。そして、存在することが「害悪」ならば、私たちは生きる必要がない。しかし、本当にそうだろうか？

【授業の目的】

本授業は、こうした反出生主義の思想を踏まえて、**私たちが「生きること」には「意味」があるのかという問い**を哲学的に検討することを目的とする。端的にいえば、「**人生には意味があるのか**」という問いに対して、哲学的に答えていくことである。

それゆえ、現代の「生きる意味」の哲学を考えていくために、**2021 年度は、「人生の意味」の哲学の最近の成果として、伊集院利明の『生の有意味性の哲学』(2021) を取り上げる。**

【到達目標】

- ① 「人生の意味」の哲学を概括することができる
- ② 哲学的なテキストを読むことができる。
- ③ レジュメを書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

- (1) 基本的に「演習」形式で行う。
 - (2) 毎回、担当者を決め、レジュメを作成してもらう。
- ◆レジュメには、①担当箇所の翻訳と解説、②用語説明、③考察、④問題点を記載する。
- (3) 授業の進め方
- ① 特定質問者を決めて、担当者の発表に対して、質問を行う。
 - ② それ以外の授業参加者と教員を含めて質疑を行い、問題点について議論する。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	・「秋学期」の授業の進め方についての説明 ・発表の順番等の決定
第 2 回	第 4 章 生実現生成説③	4-3 生実現生成説の提示
第 3 回	第 4 章 生実現生成説④	4-4 これが本当に Meaning in Life なのか (その 1)
第 4 回	第 4 章 生実現生成説⑤	4-5 これが本当に Meaning in Life なのか (その 2)
第 5 回	第 5 章 諸問題の考察により生実現生成説をさらに裏付ける (その 1) ①	5-1 心理学と哲学
第 6 回	第 5 章 諸問題の考察により生実現生成説をさらに裏付ける (その 1) ②	5-2 partiality 的価値と生実現生成説
第 7 回	第 5 章 諸問題の考察により生実現生成説をさらに裏付ける (その 1) ③	5-3 余剰次元性
第 8 回	第 5 章 諸問題の考察により生実現生成説をさらに裏付ける (その 1) ④	5-4 中間決算
第 9 回	第 5 章 諸問題の考察により生実現生成説をさらに裏付ける (その 1) ⑤	5-5 達成についての補足的考察

第10回	第6章 諸問題の考察により生実現生成説をさらに裏付ける(その2)⑥	6-1 Well-being と Meaning in Life
第11回	第6章 諸問題の考察により生実現生成説をさらに裏付ける(その2)⑤	6-2 Narrative, 身体性、Meaning in Life
第12回	第7章 展望、見直し	7-1 超自然主義
第13回	第7章 展望、見直し	7-2 Meaning of Life 価値の現実性
第14回	第7章 展望、見直し	7-3 Meaning of Life と Meaning in Life

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

- ・担当者は、テキストの該当箇所のレジュメを発表前日までに教員に提出すること。
- ・特定質問者は、テキストの該当箇所に関する質問を3つ以上考え、簡単な質問表を作ってくること(発表当日でよい)
- ・それ以外の参加者は、該当箇所について質問を1つは考え、当日の議論に参加する準備をすること。
- ・本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト(教科書)】

伊集院利明『生の有意味性の哲学——第三の価値を追求する』、見洋書房、2021年。

【参考書】

- (1) デイヴィッド・ベネター『生まれてこないほうが良かった——存在してしまうことの害悪』、すずさわ書店、2017年
 - (2) David Benatar, *Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence*, Oxford University Press, 2006.
 - (3) 「特集 反出生主義を考える——「生まれてこないほうが良かった」という思想」、『現代思想』、青土社、2019年11月号
 - (4) 吉沢文武「ベネターの反出生主義をどう受けとめるか」、『現代思想』「特集 倫理学の論点23」所収、青土社、2019年9月号
- ◆ その他については、授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

- ・個別報告発表(30%) (回数および内容による評価)
- ・特定質問担当(30%) (質問内容による評価)
- ・討論参加(40%) (内容による評価)
- ※ 以上に基づいて、総合的に評価する。
- ※ なお、無断欠席は認めない。

【重要】【変更】

リアルタイム・オンライン授業の場合は、変更が生じるので要注意。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

最近の大学院生の中には、基本的なテキスト読解が不十分な者が見受けられる。テキストを「読む」というのは、テキストを「読み解く」のであって「読み込む」のではないことは肝に銘じるべきである。「読み込む」ということは、自分の考えをテキストに投影することであり、それは単なる勝手な解釈に過ぎない。それでは、真にテキストを「読解する」ことにならない。あくまで「虚心坦懐」にテキストに向かい、「眼光紙背を徹する」態度でテキストに向かわなければ、哲学的なテキストを「読む」ことはできない。

また、担当者はレジュメを作成する上で、引用されているテキストはもちろん、それ以外にも用語・概念などについて、徹底的に下調べを行うべきである。担当者以外に対して、教員から授業中に質問することが多々あるので、担当者と同様に準備を怠らないでほしい。

演習とは **practice** (=実践) を意味しているのであり、テキストを「読む」という実践は五感を十分に活用することです。授業に参加する皆さんは、哲学を「実践する」態度で臨んでもらいたい。

【受講上の注意】

本授業は、哲学・倫理学、思想の分野に深くコミットしているために、自身の思考の鍛錬を要する。テキストを読むこと、それに基づいて自分の思考を実践すること、これらの作業は哲学研究にとって必須のものと心得てもらいたい。単に、カルチュラル・スタディーズや、ポスト・コロニアリズム研究などとは異なるので、注意を要する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 現代哲学(現象学・構造主義以後のフランス哲学)・現代倫理学(ケアの倫理学・応用倫理学)

<研究テーマ> 生命体・地球を含む「生の倫理学」(例えば、暴力や虐待、テロなどによるトラウマや PTSD に苦しむ人々を「生・生活・人生・生命(life)」という観点からケアしていくためにしなければならない義務・責任を考察する)

<主要研究業績>

1. 【単著】森村修『ケアの形而上学』、大修館書店、2020年
2. 【共著】森村修「[社会政治的トラウマ]の倫理」、牧野英二・小野原雅夫・山本英輔・斎藤元紀編『哲学の変換と知の越境』所収、法政大学出版局、2019年【臨床哲学・生の倫理学】
3. 【共著】森村修「アマルティア・セン——自由と正義のアイデア」、榎木玲子/法政大学国際文化学部編『〈境界〉を生きる思想家たち』所収、法政大学出版局、2016年【現代倫理学】
4. 【共著】森村修「ヨーロッパ」という問題——テロと放射能時代における哲学」、熊田泰章編『国際文化研究への道：共生と連帯を求めて』所収、彩流社、2013年【現代哲学】

5. 【論文】森村修「西田幾多郎の「グラマトロジー」——〈書〉の美学=感性学(エステティクス)の可能性」、東北大学哲学研究室編『思索』、2021年(近刊)【日本哲学】
6. 【論文】森村修「西田幾多郎の〈グラマトロジー〉序説——〈日本語で哲学すること〉の〈意味〉について」、法政大学国際文化学部編『異文化21』、2020年【日本哲学】
7. 【論文】森村修「市川白弦の「空-無政府-共同体論(Ś ūnya-Anarchist-Communism)」——小笠原秀実の仏教アナキズムと西谷啓治の自衛論批判をめぐって」、法政大学国際文化学部編『異文化20』、2019年【日本哲学】
8. 【論文】森村修「技術は「ヒューマニズムを超える」か? (1) —ハイパー・ニヒリズム時代におけるハイデガーの「技術哲学」(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化19』論文編、2018年【現代ドイツ哲学・応用倫理学】
9. 【論文】森村修「パウル・ツェランという問題(1) —ガダマーとデリダの「途切れない対話」(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化』論文編、2017年【現代ドイツ・フランス哲学】
10. 【論文】森村修「思想の翻訳と文字の問題——比較思想から問文化性の比較思考へ」、比較思想学会編『比較思想研究』第42号、2016年【日本哲学・Intercultural Philosophy】
11. 【論文】森村修「センの「道徳哲学」(1) ——パトナム「事実/価値二分法の崩壊」論を手がかりに(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化17』論文編、2016年【現代倫理学】
12. 【論文】森村修「性的差異」のケア倫理学——フェミニズム倫理学と和辻倫理学における「肉体」の問題」、『比較思想研究』第41号、2015年【日本哲学・ケアの倫理学】
13. 【論文】森村修「喪と／あるいはメランコリー(1) ——デリダの〈精神分析の哲学〉(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化16』論文編、2015年【現代哲学】

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to examine the contemporary significance of "anti-birth" with special reference to Benatar's "I was better off not being born." By the way, according to Benatar, it is important to reduce the harm of this world by preventing the birth of newborns, and therefore abortion is affirmed. Eventually, he comes to the conclusion that humanity should be extinct.

As one of the responses to the philosophy of anti-natalism, we will examine the philosophy of the "meaning of life. The purpose of this class is to examine philosophically the question of whether our "life" has "meaning". Simply put, it is to answer the question, "Does life have meaning?" or "Does life have no meaning?"

In 2021, we will take up Toshiaki Ijuin's "Philosophy of the Meaningfulness of Life" (2021) as a recent achievement in the philosophy of "the meaning of life."

FRI500G1 - 307

多文化情報メディア論Ⅱ

重定 如彦

サブタイトル：人工知能について学ぶ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現在、大きな社会的注目を集めている人工知能について、古典的なチェスなどのゲームを題材とする AI からはじめ、近年注目を浴びている画像を認識するディープラーニングを用いた AI などを題材とした実習を行いながらその仕組みについて学び、人工知能ができる事、できない事について理解できるようにする。

また、人工知能が社会に与える影響などについて考察する。

【到達目標】

人工知能の基礎を学ぶ。

人工知能が社会に与える影響について自分なりの考察を行えるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

人工知能について、古典的なチェスのようなゲームにおける手法から始め、最近注目を浴びてきているディープラーニングを使った画像認識に至るまで、具体的にその仕組みについて実習を行いながら学習していく。

授業では、あらかじめ与えたテーマについて各自が発表し、その内容についての議論なども行う。

学生の理解度に応じて、実際に動作する、簡単な人工知能のプログラミングの実習などを行うことも考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回	人工知能の定義と歴史	授業の導入及び、人工知能の定義や歴史について学ぶ
2 回	ゲームの人工知能	○ × ゲームやチェスなど、ゲームにおける人工知能の考え方について学ぶ
3 回	ゲーム木と探索	ゲームを題材とした人工知能における、古典的な手法であるゲーム木とその探索について学ぶ
4 回	α β 法と、枝刈り	ゲーム木の探索を効率的に行うための手法の一つである α β 法と、ゲーム木の枝刈りについて学ぶ
5 回	様々な探索手法	ゲーム木の様々な探索手法について学ぶ
6 回	評価関数	状況を数値化するための手法（評価関数）について学ぶ
7 回	機械学習とディープラーニング	機械学習の基礎とその種類について学ぶ
8 回	ニューラルネットワーク	ディープラーニングの基礎となるニューラルネットワークについて学ぶ
9 回	画像の分類	機械学習を用いた画像認識について学ぶ
10 回	ディープラーニングによる学習	人工知能がディープラーニングにおいて、どのように学習していくかについて学ぶ
11 回	機械学習における様々な手法	機械学習で用いられる様々な手法について学ぶ
12 回	人工知能の問題点	人工知能が抱える問題点や、限界などについて学ぶ
13 回	社会に与える影響	人工知能が社会に与える影響について議論する
14 回	まとめ	授業で学んだことのまとめを行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前半は教科書を指定しないが、授業で学んだことをしっかりと復習し、授業内で提示する次回の授業のテーマについて予習する。

後半は教科書を読んで予習を行い、授業で学んだことをしっかりと復習する。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

「ゼロから作る Deep Learning — Python で学ぶディープラーニングの理論と実装」 斎藤 康毅 オライリー・ジャパン

その他、必要に応じて授業内で提示する。

【参考書】

なし

【成績評価の方法と基準】

「配分」

平常点 25 %、授業内での発表や議論 50 %、レポート 25 %

「評価基準」

発表及びレポートは、読解の正確さ、発表資料またはレポートの適切さ等によって評価する

【学生の意見等からの気づき】

特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門分野> 情報科学

<研究テーマ> ユビキタスコンピューティング、分散 OS、ユーザインタフェース <主要研究業績>

「デジタルミュージアムのためのキオスク型 WWW ブラウザ」、電子情報通信学会論文誌, vol.J85-D1, No.3, 2002 年 3 月

「分散ハイパーメディア OS Net-BTRON におけるハイパーメディアサーバ管理機構」、情報処理学会論文誌, 2001 年 6 月

A Distributed Hypermedia Operating System: Net-BTRON, In Proceedings of the 2000 International Conference on Communication Technology, IFIP ICCT2000/WCC2000, vol.2 (Aug.2000)

Yukihiko Shigesada, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura, "ucR Based Interoperable Spatial Information Model for Realizing Ubiquitous Spatial Infrastructure," 34th Annual IEEE Computer Software and Application Conference (COMPSAC2010), pp. 303 - 310, July 19 - 23, 2010.

【Outline and objectives】

The objectives of this class are to learn about basics of artificial intelligence, and discuss about influence of artificial intelligence on our society.

OTR500G1 - 401

Thesis Writing A

ジェイソン ポール スミス

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

The course will review the fundamentals of good English writing, and help students build a solid foundation in the English writing mechanics and style used in academic papers.

【到達目標】

Participants will take an active approach to increasing their English writing skills, and ultimately write an academic research paper. Participants will focus on basic research and academic writing methods. Mechanics of writing such as summarizing, paraphrasing, narrowing topics; and developing thesis statements and topic sentences, as well making accurate citations will be learned. The Modern Language Association (MLA) writing format will be used.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

The course will emphasize writing, coherence, and common stylistic errors in academic writing. Students will develop a bibliography and build support for their research papers. This class will not be filled by endless lectures. Instead, time will be occupied by writing practice and peer editing. Thesis Writing A emphasizes the usage of a textbook while Thesis Writing B will be taught with teacher handouts and much in-class writing. The repetition between semesters is intentional; practice & more practice. I reserve the right to make adjustments to this syllabus to meet the collective needs of the class.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Unit 1 Going to Write One Paragraph	Class introduction & going over syllabus, short lecture on academic vs. non-academic writing. Topic sentences, supporting sentences and concluding sentences.
第 2 回	Unit 2 Trying To Be Polite	Using appropriate style in writing, what is plagiarism and how to avoid it.
第 3 回	Unit 3 What Do You Think?	Generating ideas, analyzing an opinion paragraph, writing the first draft.
第 4 回	Unit 4 This May Work	Proposing a solution, brainstorming, peer review.
第 5 回	Unit 5 How Could It Happen?	Writing cause and effect paragraph.
第 6 回	Unit 6 What Is an Essay?	Essay structure, effective thesis statements, body and conclusions.
第 7 回	Unit 7 Writing Your Own Outline	More on thesis statements, main ideas and writing your own idea.
第 8 回	Unit 8 Let Me Tell You About a Beautiful Place	Descriptive Essays 1: How to write vibrant and descriptive essays, painting a picture with words
第 9 回	Unit 9 Let Me Tell You About an Amazing Time	Descriptive Essays 2
第 10 回	Unit 10 That's a Good Point	Persuasive Essays 1: Health issues, planning your strategy.
第 11 回	Unit 11 Developing Logical Points of Support	Persuasive Essays 2: Health issues; Build Your Essay, putting it all together; review.
第 12 回	Unit 12 How Are They Different?	Identifying similarities and differences.
第 13 回	Unit 13 How are They Different?	Comparison Essays 1 :Education; 5 basic stages in comparison essays.
第 14 回	Unit 14 Let's Sort It Out	Writing informative, interesting and easy-to-follow classification essays (Classification Essays 1 Events and Festivals).

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students will have to do all textbook activities and finish one short unit (5-8 pages) each week as instructed.

Students on average need to allow 90 minutes for each scheduled class.

【テキスト（教科書）】

From Paragraph to Essay (NAN'UN-DO) ISBN 978-4-523-17727-2 C0082

【参考書】

Handouts given by the instructor

【成績評価の方法と基準】

Homework and assigned work must be handed in on the date announced by the instructor. Assignments submitted late without an acceptable excuse and formal verification for the absence will result in a loss of ten points per day for the assignment. Plagiarism: knowingly representing the words of another as one's own in any academic activity will automatically result in a failing grade on the assignment.

50% Participation, Discussions and Homework

50% Textbook Exercises and Writing Assignments

【学生の意見等からの気づき】

The class is now offered for one full academic year as explained above.

【学生が準備すべき機器他】

Thesis Writing A does not require any additional equipment.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> American Studies

<研究テーマ> Social Studies

<主要研究業績> The Uprising of the Molly Maguires in Eastern Pennsylvania, Washington State University Press, 1991

Lost Art of the Cornet Society, Sidgwick & Jackson Ltd; June, 2005

OTR500G1 - 402

Thesis Writing B

ジェイソン ポール スミス

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

The course will review the fundamentals of good English writing, and help students build a solid foundation in the English writing mechanics and style used in academic papers.

【到達目標】

Participants will take an active approach to increasing their English writing skills, and ultimately write an academic research paper. Participants will focus on basic research and academic writing methods. Mechanics of writing such as summarizing, paraphrasing, narrowing topics; and developing thesis statements and topic sentences, as well making accurate citations will be learned. The Modern Language Association (MLA) writing format will be used.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

Students receive feedback as follows on each assignment they submit; the teacher evaluates their work with a letter grade as well as written comments on their work and suggestions for any improvements needed. The course will emphasize writing, coherence, and common stylistic errors in academic writing. Students will develop a bibliography and build support for their research papers. This class will not be filled by endless lectures. Instead, time will be occupied by writing practice and peer editing. Thesis Writing A emphasizes the usage of a textbook while Thesis Writing B will be taught with teacher handouts and much in-class writing. The repetition between semesters is intentional; practice & more practice. I reserve the right to make adjustments to this syllabus to meet the collective needs of the class.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Tentative Course Schedule	Go over syllabus.
第 2 回	Identifying and creating thesis statements	Review: identifying and creating thesis statements. Student practice of this concept Homework: One page paper on why you are pursuing a Master's Degree (due next week). Handout list of academic topics for research paper
第 3 回	What is the difference between a thesis statement and a topic sentence?	Peer editing on the above essay, When and Where to use Personal Pronouns homework (due next week) your topic for research and why you chose it.
第 4 回	In class writing	Modern Language Association (MLA formatting), work on term paper, quotations Laptop computers required from this class and all remaining classes
第 5 回	Beginnings/Endings: Titles, Introductions, Quotations, Conclusions	More on MLA formatting. Short lecture with "avoiding ambiguity" handout. Independent work on essays and Q&A.
第 6 回	How to research	Supporting information for your essay, coherent paragraphs with transitions, citing sources.
第 7 回	Writing bibliographies	One half hour lecture on writing bibliographies followed by trip to the library to select supporting information with citations.

第 8 回	Process of Revising	Short lecture on rewriting followed by application and peer editing. Beginnings and ends (titles, intros and conclusions).
第 9 回	Review and beyond	Developing thesis statements, topic sentences, and supporting ideas & independent work on essays.
第 10 回	Feedback	Q & A ... First hard copy draft of five page essay due. In class pair-work and review.
第 11 回	Workshop	First drafts returned with feedback. Q & A as well as pair-work and independent writing of 2nd draft.
第 12 回	Lecture & Workshop	Short lecture on solidifying writing techniques followed by independent writing.
第 13 回	Wrapping things up	Hard copy of 2nd draft of five page essay due. Stressing clarity & thought provoking writing. In class writing.
第 14 回	Review	Lecture of main writing mechanics previously taught. In class writing.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students will have to read and understand all handouts given in class as well as materials for each class, as instructed.

Students on average need to allow 90 minutes for each scheduled class.

【テキスト（教科書）】

From Paragraph to Essay (NAN'UN-DO) ISBN 978-4-523-17727-2 C0082

【参考書】

Handouts given by the instructor

【成績評価の方法と基準】

Homework and assigned work must be handed in on the date announced by the instructor. Assignments submitted late without an acceptable excuse and formal verification for the absence will result in a loss of ten points per day for the assignment. Plagiarism: knowingly representing the words of another as one's own in any academic activity will automatically result in a failing grade on the assignment.
50% Participation, Discussions and Homework
50% Textbook Exercises and Writing Assignments

【学生の意見等からの気づき】

The class is offered for one full academic year as explained above.

Although the aim of the instructor is to follow the syllabus, he reserves the right to make adjustments or changes when necessary.

【学生が準備すべき機器他】

Thesis Writing B requires students to have a laptop computer starting the second week of the semester.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> American Studies

<研究テーマ> Social Studies

<主要研究業績> The Uprising of the Molly Maguires in Eastern Pennsylvania, Washington State University Press, 1991

Lost Art of the Cornet Society, Sidgwick & Jackson Ltd; June, 2005

OTR500G1 - 403

Oral Presentation

MARK E FIELD

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Good communication skills are necessary for anyone wanting to work in an international environment. This course is for students with a strong desire to improve their English language presentation skills. The course will focus on helping students talk about their current research theme in English and acquiring the language skills used in Oral Presentations given in English.

【到達目標】

The goal of the course is to develop students' communications skills and confidence as public speakers. Course content will include listening and vocabulary development, as well as extensive practice in using spoken English as a presentation tool. The main theme of students' presentations will be based on their current research interests.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」と「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP2」の達成のために重要である。また、「DP1」の達成のために望ましい。

【授業の進め方と方法】

The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to actively participate in classroom activities, prepare weekly homework assignments, and review and practice at home for in-class presentations. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1回	Class Orientation:	Presentations and Speeches: What is the Difference?
2回	Structure:	The Types of Language Used in an Oral Presentation
3回	Presentation #1:	Presenting Your Background & Research Interests
4回	Learning Strategy:	Assessing Your Skills
5回	Types of Communication:	Thinking About and Using Visual Aids Part I
6回	Presentation #2:	Introducing Geographical Locations
7回	Expanding Discourse:	Exchanging Information
8回	Reflective Communication:	Planning Your Presentation
9回	Presentation #3:	Presenting Books and Research Material
10回	Types of Communication:	Thinking About and Using Visual Aids Part II
11回	Expanding Discourse:	Controlling Your Presentation Environment
12回	Putting It All Together:	Talking About Main Points
13回	Putting It All Together:	Clearing up Confusing Ideas
14回	Final Assessment:	Presentation of Your Research Theme

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

University guidelines suggest preparation and review are around 4 hours a week for a two-credit course and around an hour a week for a one-credit course.

Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review lessons at home to enhance their participation in classroom activities and discussions. Effective presentations depend on sufficient preparation and practice, so students will need to prepare and practice outside of class before giving their in-class presentations. 本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

The instructor will provide some reading materials related to Oral Presentation Skills.

【参考書】

Students will be expected to bring in reading materials related to their current research interests.

【成績評価の方法と基準】

30% On-going Evaluation participation, discussions etc.

20% Homework

50% In-class Presentations

** Class attendance is a course requirement.

Students are allowed no more than three absences in the academic semester.

【学生の意見等からの気づき】

Previous students were happy with this course and currently no data is available to support changing it. However, the instructor always welcomes comments and encourages students to make suggestions to improve the course at anytime.

【学生が準備すべき機器他】

We will use some OHC (Over Head Camera) and/or PC (Personal Computer) equipment to Present Visual Aids.

【その他の重要事項】

The Instructor Reserves the Right to change or alter this syllabus as needed.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

異文化間コミュニケーション、西洋思想史、経済学、言語学

<研究テーマ>

文化の変化と西洋思想の進化

<主要研究業績>

国際線の代わりとなるスロートラベルは存在するか？

"Is There a 'Slow Travel' Alternative to Intercontinental Flight?" 異文化 13, 117-182, 2012/04

ピネチェト政治後のチリにおける文化的ヒーローの発見 "Discovering a Cultural Hero in Post-Pinochet" 異文化 9, 113-166, 2008/04

Communication, Culture, Diffusion and Education: The Complexity of Intercultural Communication, Learning from the Past and Looking to the Future 法政大学 教養部紀要 111/ 外国語学 外国文学, 141-166, 2000/02

国際協力論

松本 悟

サブタイトル：歴史・社会影響・人材育成・地域協力から考える

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では国際協力を文化的視点から考える。文化とは「体系的な生きるための工夫」（クラックホーン）であり、協力を必要とする背景及び協力そのものが特定集団に内在する文化によって影響を受けると同時に文化に影響を与えている。いくつかのキーワードを手がかりに文献を丁寧に読み解きながら、文化という切り口から国際協力の歴史と現状を理解する。

【到達目標】

- (1) 授業で取り上げる概念や術語（テクニカルターム）について理解できる。
- (2) 国際協力を国際文化の視点から論じることができる。
- (3) 当該分野の文献を正しく理解し、分析的な発表ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

■基本方針：国際文化研究科では、2021年度の授業をオンライン授業で実施することを決定した。この授業に関してもZoom等によるリアルタイム・オンライン授業で実施する。ただし、法政大学の「新型コロナウイルス感染症に対する行動方針」のレベル1以下になった場合、履修者と相談して教室での対面授業に切り替える可能性はある。

■第1回は教員が担当し、第2回からは事前課題文献（日本語か英語）をもとに学生が発表・議論する。進め方は以下の通り。

- (1) 履修者全員が事前課題文献（20頁程度を想定）を熟読し、①「この文献から重要だと考えた点」を最低3つ、②そう考えた理由、③そこから導いた論点（履修者同士で議論したい点）を発表する。
- (2) (1)を共有した上で、履修者の間でその日議論したい点を絞り（全ての論点でもよい）議論する。
- (3) 必要に応じて教員が補足授業を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の説明、受講者の関心の共有に基づき、必要に応じて課題文献を変更する。
第2回	モジュール1：開発援助の歴史①開発援助の社会学から	第2次世界大戦後の開発援助の歴史を社会学の側面から考える。
第3回	モジュール1：開発援助の歴史②言説	日本における開発援助の言説から利己・利他の揺れ動きを考える。
第4回	モジュール1：開発援助の歴史③自立と依存	援助は自立を目指すことが自明のように語られるが、依存とは本当に問題なのかを考える。
第5回	モジュール2：開発援助の社会的影響①概観	開発援助が社会にもたらす影響を俯瞰して考える。
第6回	モジュール2：開発援助の社会的影響②精神的な影響	これまであまり議論されてこなかった開発に伴う精神的な影響について考える。
第7回	モジュール3：人を育てる①人材育成	日本型援助と言われる人材育成について考える。
第8回	モジュール3：人を育てる②高等教育協力	義務教育に焦点を当てやすい教育支援の中で大学などの高等教育の国際協力について考える。
第9回	モジュール4：メコン地域協力①地域協力の捉え方	ローカル、リージョナル、グローバルな視点で地域協力を考える。
第10回	モジュール4：メコン地域協力②国境貿易と経済特区	アクターによって異なる「国境を越える」意味を考える。
第11回	モジュール4：メコン地域協力③国境を越えるNGO	リージョナルな開発に社会影響への懸念から働きかけるNGOの動きについて考える。
第12回	モジュール5：学生による発表①グループA	履修者が自分の研究に関連した読んだ文献をもとに発表と議論を行う。
第13回	モジュール5：学生による発表②グループB	履修者が自分の研究に関連した読んだ文献をもとに発表と議論を行う。

第14回 総合討論

この授業で扱ったテーマを横断的に分析し、「国際協力と文化」について新たな視点を掘り起こす。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・事前課題文献は時間をかけて読み、課題に取り組むこと。
- ・毎回の授業で学んだことを短く学習支援システムに投稿すること。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

課題文献（日本語、英語）は学習支援システムを通じて配布する。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- (1) 事前課題・発表 30%（文献の正しい理解、説得力のある論点の抽出）
- (2) 平常点 20%（授業での積極的な発言・議論のファシリテート）
- (3) 授業後課題 30%（授業内容の理解度）
- (4) 独自文献の発表と論点提示 20%（第12回と第13回に予定している発表での文献理解度と説得力のある論点の抽出）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、およびZoom等のリアルタイムのオンライン授業が可能な通信環境。

【その他の重要事項】

- ・国際協力に15年近く携わった教員が具体的な経験に基づく事例も紹介しながらコメントする。
- ・履修者の研究関心によって、授業内容や課題文献を若干変更することがある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際開発研究

<研究テーマ>影響評価、国際組織、開発援助、NGO

<主要研究業績>

『国際協力と想像力』（共編著、日本評論社、2021年）

『調査と権力』（単著、東大出版会、2014年）

『NGOと世界銀行』（共編著、ミネルヴァ書房、2012年）

『人々の資源論』（共著、明石書店、2008年9月）

『シリーズ国際開発 生活と開発』（共著、日本評論社、2005年9月）

【Outline and objectives】

This course aims to enable students to understand and analyze international cooperation from the aspects of "culture". It includes the background which requires international cultural cooperation, the impacts of international cooperation on culture and the impacts of culture on international cooperation.

国際人権論

藤岡 美恵子

サブタイトル：マイノリティの視点から考える人間の尊厳

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人権は現代世界で常に重要な問題として扱われてきた。その保障は国際的に普遍的な課題として認識されており、何よりも、社会的に周縁化されてきた人々が自らの人間の尊厳を回復するための重要な手立てとして活用してきたのが人権であった。人権保障制度の発展は、そうした周縁化された立場の人々の尊厳を求める運動を契機に発展してきたと言つてよい。

しかし近代の国民国家体制とともに生まれた人権思想と制度は、その枠組みの中で排除や搾取の対象となってきた集団（先住民族、マイノリティ、移民）の尊厳を守るためには不十分、もしくは根源的な矛盾をはらむという課題に直面している。それに関係するのが植民地主義の継続である。植民地主義が終焉するどころか、新たな形態で継続しているという認識が広く支持されるようになってきている現在、近代の人権保障の思想と制度が植民地主義の観点から再考されるようになってきている。この課題は、ヘイトスピーチの台頭という重大な挑戦に直面する日本社会にとっても、きわめて重要な課題である。本授業では、国際人権保障体制の発展を踏まえた上で、それが日本を含め世界のマイノリティや先住民族の人権にどのような影響をもたらしたのかを考察し、現代世界が直面する人権をめぐる危機を人種主義と植民地主義をキーワードに考えていく。

人権がともすれば「思いやり」の問題として考えられがちな日本において、人権が差別され周縁化されてきた集団による公正と尊厳を求める運動を契機に発展してきたことを理解することは、今後の日本社会の在り方を考えて行く上で意義が多い。どうすればあらゆる人々の尊厳を保障することができるのかを、人権を侵害されてきた／いる人々の立場から考える思考態度を身につけ、人権をめぐる生じている国際的な課題について批判的な理解・思考能力を養う。

【到達目標】

国際的な人権保障の体制や考え方がどのように進展してきたかを踏まえた上で、それが国内の人権保障とどのように関係しているかを理解し、20世紀終盤から21世紀初頭の国際秩序の変容の中で、人権の保障という課題がどのような矛盾や問題を抱えているのかを、植民地主義と人種主義というキーワードを使って整理し、説明できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

基本的に Zoom を使ったリアルタイムオンライン授業とする。各回の指定テキストの報告発表と討論を進める。期末に小論文形式の試験を行う。初回授業を含め、授業参加の方法、各種お知らせは学習支援システムで通知する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション ●日本における人権に関する認識：ヘイトスピーチ、Black Lives Matter, #MeToo を手がかりに	授業内容・授業計画の説明。 人権とは何か。人権がなぜ必要なのか。人権は人間社会においてどのような位置をもつのかをあらためて考える。
第2回	国際人権の発展と現在 【テキスト】阿部（2010）「国際法への眼差し——序にかえて」	国際人権の起源と発展の跡をたどり現在の課題を知る。
第3回	変容する世界と国際人権 【テキスト】阿部（2010）第1章「人間」の終焉	冷戦終結と9・11以降、「テロリズム」という記号が動員される中での人権の後退と新たな課題を考える
第4回	人権と「文明化の使命」 【テキスト】阿部（2010）第2章「愚かしき暴力と、国際人権の物語」	植民地主義の観点から国際人権を捉えなおし、現在の「南北問題」との関係を考える
第5回	ヘイトスピーチの被害と人権 【テキスト】朴「京都朝鮮学校襲撃事件」、鄭「ヘイトスピーチ被害の非対称性」	近年問題になっているヘイトスピーチがどのような被害をもたらすのかを理解する。

第6回	ヘイトスピーチへの対応 【テキスト】阿部（2019）「国際人権法によるヘイトスピーチの規制」、中村「ヘイトスピーチの修復的アプローチを考える」	ヘイトスピーチに対して国際人権法がどう規制しているか、またヘイトスピーチを乗り越える一つの方法としての修復的アプローチを考える
第7回	植民地主義と先住民族の自決権 【テキスト】上村（2001）「第3章 近代国家日本と「北海道」「沖縄」の植民地化」	日本によるアイヌ・沖縄への植民地支配の歴史と先住民族の自決権を理解する。
第8回	先住民族の権利に関わる世界的動向と日本の先住民族の運動の国際的展開 【テキスト】上村（2018）「声を上げた日本の先住民族」、宮里「差別主義と民族主義の清算」	先住民族の権利を求める世界的動向が日本の先住民族にどう影響し、日本社会にどのようなインパクトをもたらしているかを考える。
第9回	植民地主義の克服と「多文化共生」論 【テキスト】藤岡「第1章 植民地主義の克服と「多文化共生」論」	北朝鮮バッシングを手がかりに、日本の「多文化共生」論と植民地主義の克服という課題の関係を考える
第10回	「多文化共生」におけるマジョリティとマイノリティ 【テキスト】ハタノ「在日ブラジル人を取り巻く「多文化共生」の諸問題」	マイノリティの視点から見る「多文化共生」の問題を考える。
第11回	国民統合の概念としての多文化主義 【テキスト】塩原「隠された多文化主義—オーストラリアにおける国民統合の逆説」	国民統合の概念としての多文化主義の問題点を考える
第12回	多文化主義と人権の未来 【テキスト】阿部（2010）第4章「要塞の中の多民族共生／多文化主義」	EUを例に多文化主義を標榜する社会における新たな排除の問題を考える。
第13回	過去の人権侵害への責任 【テキスト】阿部（2010）第7章「戦後責任と和解の模索」	現在の人権をめぐる課題が過去の重大人権侵害に対する責任と密接に関係していることを踏まえ、その責任をどのように問えるのかを考える。
第14回	まとめ／期末試験講評	授業のまとめと期末試験講評を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指定文献を事前に読み、発表担当回は事前に発表レジュメを用意する。本授業の準備、復習時間は各5時間を基準とする。期末試験は事前に示された問いに対して、授業時間外で小論文形式で答案を作成する。答案は授業最終日の前日までに提出する。答案作成にかかる時間は16時間程度。

【テキスト（教科書）】

★——指定書 要購入。その他はプリントを配布

- ①★阿部浩己『国際法の暴力を超えて』岩波書店、2010年（「序に変えて」、第1章、第2章、第4章、第7章）
- ②阿部浩己「国際人権法によるヘイトスピーチの規制」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチに立ち向かう』日本評論社、2019年
- ③上村英明『先住民族の「近代史」—植民地主義を超えるために』平凡社、2001年（第3章 「近代国家日本と「北海道」「沖縄」の植民地化」）
- ④上村英明「声を上げた日本の先住民族」深山直子・丸山淳子・木村真希子編『先住民からみる現代世界——わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』昭和堂、2018年
- ⑤塩原良和「隠された多文化主義—オーストラリアにおける国民統合の逆説」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房、2011年
- ⑥鄭 暎恵「ヘイトスピーチ被害の非対称性」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチとは何か』日本評論社、2019年
- ⑦中村一成「ヘイトクライムの修復的アプローチを考える」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチに立ち向かう』日本評論社、2019年
- ⑧リリアン・テルミ・ハタノ「在日ブラジル人を取り巻く「多文化共生」の諸問題」植田晃次・山田仁編著『「共生」の内実』三元社、2011
- ⑨朴 貞任「京都朝鮮学校襲撃事件」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチとは何か』日本評論社、2019年
- ⑩藤岡美恵子「第1章 植民地主義の克服と「多文化共生」論」中野憲志編『制裁論を超えて——朝鮮半島と日本の〈平和〉を紡ぐ』新評論、2007年
- ⑪宮里護佐丸「差別主義と民族主義の清算」深山直子・丸山淳子・木村真希子編『先住民からみる現代世界——わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』2018年、昭和堂

【参考書】

- ①岩崎他『継続する植民地主義—ジェンダー/民族/人種/階級』青弓社、2005年
- ②植木哲也『植民学の記憶——アイヌ差別と学問の責任』緑風出版、2015年
- ③岡和田見／マーク・ウィンチェスター『アイヌ民族否定論に抗する』河出書房新社、2015年
- ④エイミー・ガットマン編『マルチカルチュラルリズム』岩波書店、1996年
- ⑤小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店、2001年
- ⑥塩原良和『ネオ・リベラリズムの時代の多文化主義——オーストラリアン・マルチカルチュラルリズムの変容』三元社、2005年

- ⑦永原陽子編『植民地責任』論—脱植民地化の比較史』青木書店、2009年
 ⑧西川長夫『(新)植民地主義論——グローバル化時代の植民地主義を問う』平凡社、2006年
 ⑨ガッサン・ハージ(保邦実・塩原良和訳)『ホワイト・ネイション——ネオ・ナショナリズム批判』平凡社、2003年
 ⑩バンセル、N.ほか『植民地共和国フランス』岩波書店、2011年
 ⑪樋口直人『日本型排外主義—在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会、2014年
 ⑫ミシェル・ヴィヴィオルカ『レイシズムの変貌：グローバル化がもたらした社会の人種化、文化の断片化』明石書店、2007年
 ⑬ジョージ・M.フレドリクソン『人種主義の歴史』みすず書房、2009年
 ⑭前田朗『ヘイト・クライム』三一書房労働組合、2010年
 ⑮松島泰勝『琉球 奪われた骨——遺骨に刻まれた植民地主義』岩波書店、2018年
 ⑯アルベール・メンミ『人種差別』法政大学出版局、1996年
 ⑰テッサ・モリス＝鈴木『辺境から眺める——アイヌが経験する近代』みすず書房、2000年

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点 50% (発表、討論への参加)、期末試験 50%
- ・発表については、指定テキストの内容の報告だけでなく、討論のための論点の提示を求める。
- ・討論への参加については、内容の理解に加え、討論の進行を助け、他の参加を促すような積極的な疑問の提示、意見表明を評価する。
- ・期末試験は、予め提示する2、3題の質問に対する小論文形式で行う。答案の提出日は第14回授業の前日。

【学生の意見等からの気づき】

前年度の初のオンライン授業では、ディスカッションの時間がもっと欲しいとの要望があったことを受け、今年度はリアルタイムでのディスカッション主体の授業とする。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムを使用するため、PCとインターネット環境は必須。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際人権論(マイノリティ、先住民族の権利)、NGO論、植民地主義と平和

<研究テーマ>人種主義と植民地主義

<主要研究業績>『脱「国際協力」——開発と平和構築を超えて』(新評論、2011年)、『資源開発への異議申し立てと先住民族の自己決定権』(東日本部落解放研究所発行『明日を拓く』第80号、2009年)、『植民地主義の克服と「多文化共生」論』(『制裁論を超えて——朝鮮半島と日本の「平和」を紡ぐ』新評論、2007年)

【Outline and objectives】

The guarantee of human rights has been considered an issue of universal importance in the modern world. More importantly, socially marginalized groups of people have used human rights to restore their human dignity, contributing to the development of the international human rights systems.

However, the ideas and systems of human rights which were born along with the development of the modern nation-state system now face serious challenges: one is that they are insufficient in, or in fundamental contradictions with, the protection of human dignity of groups of people who have been excluded or exploited in that system. One factor behind it is the continuation of colonialism. The human rights protection systems are now being reconsidered from that perspective.

In this course, the participants will learn how the international human rights protection systems have developed and what impact they have brought to minority and indigenous groups in Japan and elsewhere. They will consider the challenges posed to the international human rights protection systems using racism and colonialism as key concepts. The course provides the participants an opportunity to acquire critical thinking abilities on the issues of human rights and the perspective of the marginalized/discriminated against in thinking about how human rights can be respected for all.

FRI500G1 - 407

多文化情報ネットワーク論A

和泉 順子

サブタイトル：インターネットの社会性と情報文化

実務教員：

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

情報科学、特にインターネットに代表されるコンピュータネットワーク技術は広く深く発展し、情報基盤として様々な分野で必要不可欠なものとなっています。これらが、もともとどのような理由で設計された技術なのか、それが時代とともにどのように変わって来たのかを学び、インターネットの社会基盤としての役割や問題を討議します。

【到達目標】

この科目の到達目標は、コンピュータネットワークの仕組みの大体を理解し、自分の身の回りの情報がどのように仮想空間を流通しているかということの理解を深めることです。知識を蓄積するだけでなく、自身のネットワークおよび関連情報技術の利用や社会性について論理的に考え討議することを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

多文化情報ネットワーク論Aでは、コンピュータネットワークの設計と基本的な仕組みを理解することにより、ネットワーク上での情報流通や形式を学びます。また、関連技術がどのように使われることを想定して設計され淘汰されてきたかを学び、普段利用している情報サービスが技術的にどの程度安全性を確保されているものか、どの程度リスクがあるものかを、学生自身の使い方に鑑みながら確認していきます。

なお、履修する学生の所属研究科や学習状況に応じて、講義内容は適宜変更します。

春学期の少なくとも前半はオンライン併用での開講が予想されます。学期途中での授業形態の変更やそれともなう各回の授業計画の修正については、学習支援システムでその都度提示します。履修予定者は、必ず初回授業日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加、または初回授業資料を当日確認してください。

課題等の提出・フィードバックは、基本的には学習支援システムを通じて行うが、補助的にGoogle Classroom等も用いる予定です。

授業に関する質疑応答については学習支援システムの掲示板機能を活用します。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	講義概要の説明	この講義の目的や進め方を説明し、参照予定の文献を紹介する。
第2回	身近な情報ネットワーク技術	普段利用している情報ネットワーク関連技術を考え、動作環境や仕組みを確認する。
第3回	コンピュータが情報を2進数で扱う理由、情報理論基礎	情報科学の基礎として、2進数の復習とネットワーク技術で使われる主なアルゴリズムを学ぶ。
第4回	情報ネットワークとインターネット	コンピュータネットワークの形式とインターネットの特色を学ぶ。
第5回	インターネットの歴史、OSI参照モデル	インターネットの開発の理由や歴史、OSI参照モデルを学ぶ。
第6回	インターネット関連技術の動向(1)	インターネットアーキテクチャの内、物理層およびデータリンク層の仕組みを学ぶ。
第7回	インターネット関連技術の動向(2)	インターネットアーキテクチャの内、ネットワーク層の仕組みを学ぶ。
第8回	情報科学技術と仕事(1)	情報科学技術が社会に普及したことにより生じる事象(利益、問題点)を仕事の観点から論じる。
第9回	情報科学技術と仕事(2)	前回議論した事象から、今後対策や対応が必要になる事象を技術的・社会的、両方の側面から論じる。
第10回	情報科学技術と安全性(1)	情報科学技術が社会に普及したことにより生じる事象(利益、問題点)を個人または組織に対するセキュリティの観点から論じる。
第11回	情報科学技術と安全性(2)	前回議論した事象から、今後対策や対応が必要になる事象を技術的・社会的、両方の側面から論じる。

第 12 回	個人情報とプライバシー	保護されるべき個人情報やプライバシーとは、どのようなものを学び、議論する。
第 13 回	情報セキュリティとネットワークセキュリティ	主な情報セキュリティ技術を学び、それがインターネットにどのように利用されているかを学ぶ。
第 14 回	授業のまとめ	授業での議論を振り返り、まとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内容で理解が難しかった部分を補うための自主学習（復習）が必要になります。

【テキスト（教科書）】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【参考書】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【成績評価の方法と基準】

課題・レポート（30%）、議論・平常点（20%）、最終レポート（50%）で総合的に評価します。

コンピュータネットワークの仕組みの概略と現在のインターネットの利用形態に関連する技術への理解度をレポートで評価し、それに対する授業中の議論を出席および授業参加として評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

履修者の理解度に合わせて学習進度や項目を柔軟に変更する。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン併用授業の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。授業内容の議論や補足は Zoom あるいは Webex を用いる。また、毎回の授業資料と課題は学習支援システムを利用して配布・提示する。授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】

大学の行動方針レベルが2となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> インターネット上の情報流通に関する研究
<研究テーマ> 主に ITS や移動体通信などが扱う実空間情報を軸にしたインターネット上の情報流通と、情報技術の普及や社会性に関する問題
<主要研究業績>

"A Study of Service Architecture for Probe Vehicle Information Systems Including Smart-phone Networks", Proceedings of 18th ITS World Congress, Oct. 2011. 他

【Outline and objectives】

We will grasp the mechanism and the design philosophy of the internet roughly and discuss its role in real society.

FRI500G1 - 408

多文化情報ネットワーク論B

和泉 順子

サブタイトル：インターネットの社会性と情報文化

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

インターネットに代表されるコンピュータネットワーク技術の研究背景とその時代で最先端だったシステム設計を学ぶことで情報ネットワークの仕組みを大まかに掴み、今後のインターネットや他情報科学技術の使われ方について議論します。

【到達目標】

この科目では、コンピュータネットワークの仕組みの概略を理解し、現在利用されているインターネットの利用形態に関連する技術を知ると同時に、今後の通信技術の展望を考えることを目標としています。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

この科目の到達目標は、現在深く広く普及しているインターネットを始めとする情報ネットワークについて、その仕組みの概略と開発背景を掴むことである。その上で、情報ネットワーク技術が社会通信基盤として利用されていることに鑑み、実空間情報が仮想空間上をデジタルデータとして流通することの利便性とリスクを検討し、議論する。

全体を通して、教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指し、問題意識の整理と解決のための意見交換をしていく。なお、履修する学生の所属研究科や学習状況に応じて、講義内容は適宜変更する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	講義概要の説明	この講義の目的や進め方を説明し、参照予定の文献を紹介する。
第 2 回	身近な情報ネットワーク技術	普段利用している情報ネットワーク関連技術を考え、動作環境や仕組みを確認する。
第 3 回	インターネットの歴史	インターネットの開発の理由や歴史、コンピュータネットワークの形式とインターネットの特色を学ぶ。
第 4 回	プロトコルとレイヤ（OSI 参照モデル）	OSI 参照モデル、および現状のインターネットアーキテクチャと主なプロトコルを学ぶ。
第 5 回	経路制御アルゴリズム	ネットワーク層で使われる主な経路制御アルゴリズムを学ぶ。
第 6 回	IP アドレスと名前解決	インターネットプロトコル（IP）の役割と名前解決の仕組みを学ぶ。
第 7 回	無線技術と移動体通信	無線通信技術の種類と変遷を学び、移動体通信技術について学ぶ。
第 8 回	クラウドコンピューティング	クラウドコンピューティングの仕組みを学び、利益と弊害を議論する。
第 9 回	インターネットの社会性	インターネットが共通通信基盤として社会的に普及したことによる利益と弊害を議論する。
第 10 回	日本の通信技術戦略	日本が進めてきた通信技術戦略の一部を紹介し、その効果について議論する。
第 11 回	個人情報とプライバシー	保護されるべき個人情報やプライバシーとは、どのようなものを学び、議論する。
第 12 回	ネットワーク技術の国際標準化	情報技術の普及戦略の一角を担う国際標準化について学ぶ。
第 13 回	知的財産とインターネット	知的財産権の一つである著作権を学び、国境を越えて利用されるインターネット上での振る舞いを考える。
第 14 回	情報ネットワークの抱える問題、授業のまとめ	情報ネットワークの将来性と問題について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内容で理解が難しかった部分を補うための自主学習（復習）が必要になります。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【参考書】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【成績評価の方法と基準】

レポートまたは小テスト（30％）、平常点（20％）、最終レポート（50％）で総合的に評価します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【その他の重要事項】

大学の行動方針レベルが2となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>インターネット上の情報流通に関する研究
<研究テーマ>主に ITS や移動体通信などが扱う実空間情報を軸にしたインターネット上の情報流通と、情報技術の普及や社会性に関する問題
<主要研究業績>

"A Study of Service Architecture for Probe Vehicle Information Systems Including Smart-phone Networks", Proceedings of 18th ITS World Congress, Oct. 2011. 他

【Outline and objectives】

We will grasp the mechanism of information communication technology roughly and discuss how future information technology is used in real society.

国際文化研究日本語論文演習 A

浅利 文子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生が、日本語の論理的文章を読んだり書いたりする練習を通じて日本語を読み書きする能力を拡充し、専門分野の修士論文を書くための基礎力を身につける。

【到達目標】

- ・一定分量の専門的レベルの日本語の文章の論旨を正確に読み取ることができる。
- ・一定分量の専門的レベルの日本語の文章を指定された字数で要約できる。
- ・与えられたテーマで 800 ～ 1200 字程度の小論文を書くことができる。
- ・自分の修士論文についてレジュメを作成し、定められた時間で口頭発表できる。
- ・専門的レベルの日本語の文章やテーマについて、日本語で自分の感想や意見を述べ、他の意見を良く理解して、議論することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP1」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

第1回の授業では、全受講生のスピーチと作文により、日本語レベルを確認します。第2回では、自己紹介と修士論文のテーマについて作文し、日本語の文章力と研究テーマ等を確認します。第3回から第8回は、学術的・専門的な日本語の文章を課題文として配布し、正確に音読できるよう確認した後、指示された字数で要約文を書く練習をします。提出された各人の要約文は、すべて添削して返却します。その後、課題文のテーマについて、全員が感想や意見を出し合い討議します。以上の要約練習により、文章の論理的展開の筋道を読み取ることから、論文の論理的構成の重要性を学びます。第9回から第12回は、小論文を書く練習をします。400字から始め、1200字程度の小論文を書くことを目標に練習しつつ、論理展開や段落構成の基礎を学びます。提出された小論文は、すべて添削して返却します。第13回と第14回は、必要に応じて、7月の概要発表会の準備をします。レジュメの書き方を学び、口頭発表の練習をします。学習内容・方法や難易度は、受講する学生の日本語の水準や希望等に合わせて適宜変更します。

春学期は、当面の間オンライン授業を行い、国際文化研究科の判断で可能となった場合は対面授業を行います。オンライン授業では、学習支援システムにおいて、添削した課題に説明を加えて提出の翌日までに返却します。対面授業では、次回授業までに添削して返却し、質問があれば説明をします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション 自己紹介スピーチ・作文	授業の目的と方針、学び方の説明 受講者の日本語レベル確認、受講者の希望確認
第2回	自己紹介と修士論文の テーマについて作文する	前回の作文を添削して返却、添削部分について質疑応答 受講生の修士論文のテーマを作文によって確認
第3回	課題文①	【演習1】前回の作文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文①の音読確認、要約文の書き方を講義、要約文を書き提出
第4回	課題文②	【演習2】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文①について討議、課題文②音読確認、要約文を書き提出
第5回	課題文③	【演習3】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文②について討議、課題文③音読確認、要約文を書き提出
第6回	課題文④	【演習4】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文③について討議、課題文④音読確認、要約文を書き提出
第7回	課題文⑤	【演習5】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文④について討議、課題文⑤音読確認、要約文を書き提出
第8回	課題文⑤、まとめ	【演習6】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文⑤について討議、要約文を書くことで何が学べたか自己評価した後、感想や考えを出し合いまとめる。

第9回	小論文を書く①	【演習7】小論文のテーマ設定・論理展開・段落構成等について講義、次回の小論文テーマ指示
第10回	小論文を書く②	【演習8】小論文を書き提出
第11回	小論文を書く③	【演習9】前回の小論文を添削し返却、添削部分について質疑応答、感想・意見交換、次回の小論文テーマ指示
第12回	小論文を書く④	【演習10】小論文を書き提出
第13回	小論文を書く⑤、まとめ 概要発表会のレジュメ作成準備	【演習11】前回の小論文を添削し返却、添削部分について質疑応答、感想・意見交換、概要発表会のレジュメの書き方について講義
第14回	概要発表会の口頭発表練習	【演習12】レジュメ提出、概要発表会の口頭発表練習、感想・意見交換

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ①課題文や添削された文章を正確に音読する練習をすること。
 - ②添削された文章は必ず見直し、何をどう直されたか確認すること。
 - ③正確に読み、書くために、日常生活においても、つねに正確に聞き、話すことに留意すること。
- 本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】

平常点75パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）
提出物25パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

- ・毎回、日本語の文章を書く機会を設けます。
- ・提出された文章は全て添削して返却します。
- ・留学生の間違いやすい語法等の例を挙げ、説明します。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

秋学期の国際文化研究日本語論文演習Bを継続履修することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>近現代日本文学
<研究テーマ>村上春樹ほか
<主要研究業績>『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹 スタディーズ 2008 - 2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第4輯』『村上春樹研究叢書第5輯』『村上春樹研究叢書第6輯』『村上春樹研究叢書第7輯』（日本語版）等

【Outline and objectives】

The foreign students that Japanese is not mother tongue read Japanese logical sentences and practice writing it to extend ability to write the master's thesis of own specialized field.

OTR500G1 - 502

国際文化研究日本語論文演習B

浅利 文子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生が、専門分野の論理的文章を読んだり書いたりする練習を通じて日本語を読み書きする能力を向上させ、専門分野の修士論文を書くための基礎力を拡充する。

【到達目標】

- ・専門的レベルの日本語の文章を指定された字数で要約し、口頭で発表できる。
- ・自分の修士論文のテーマに関して、4000字程度の小論文を書くことができる。
- ・専門的レベルの日本語の文章やテーマについて議論できる。（発言者ひとりひとりの意見を正確に聴き取り、テーマの方向性に沿った論理的な意見を述べたり問題点を指摘したりして、テーマを深化し発展させることができる）

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP1」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

第1回の授業で、各受講生は自分の研究テーマについてスピーチします。第2回の授業では、全員が自分の研究テーマについてまとめた作文を提出し、添削を受けた後、音読発表します。第3回から第7回までは、各受講生が自分の研究テーマに沿った書籍や文献から一定の長さの日本語の文章を抜粋して全員に配布し、その要約を書いて発表し、全員でその内容や研究テーマとの関連性について感想・意見を出し合います。第8回から第13回は、各自の研究テーマに沿った小論文を書きます。1200字程度から書き始め、第13回では、4000字程度の小論文を完成させます。第14回は、完成した4000字の小論文を口頭発表し、相互評価をします。提出された要約文・小論文は、すべて添削して返却します。学習内容・方法や速度・難易度は、受講生の水準に合わせて適宜変更します。本科目は、コロナ感染の状況によってオンライン授業を行う可能性もありますが、国際文化研究科の判断で可能となった場合は、対面授業を行います。オンライン授業では、学習支援システムにおいて、添削した課題に説明を加えて提出の翌日までに返却します。対面授業では、次回授業までに添削して返却し、質問があれば説明をします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション・研究テーマについてスピーチ	演習の目的と方針の説明、受講者の日本語レベル、研究テーマ、受講者の希望確認
第2回	作文「私の研究テーマ」	【演習1】作文後、添削された作文を各人が音読して発表し、添削内容について質疑応答
第3回	課題文①	【演習2】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文①について討議
第4回	課題文②	【演習3】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文②について討議
第5回	課題文③	【演習4】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文③について討議
第6回	課題文④	【演習5】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文④について討議
第7回	課題文⑤	【演習6】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文⑤について討議
第8回	小論文を書く①	【演習7】小論文を書く際のテーマ設定・論理展開・段落設定等について講義
第9回	小論文を書く②	【演習8】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第10回	小論文を書く③	【演習9】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第11回	小論文を書く④	【演習10】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第12回	小論文を書く⑤	【演習11】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第13回	小論文を書く⑥	【演習12】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第14回	小論文を書く⑦（まとめ）	【演習13】4000字の小論文を口頭発表・相互評価

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ①課題文や添削された文章を正確に音読する練習をすること。
 - ②添削された文章は必ず見直し、何をどう直されたか確認し、正確に音読できるように練習すること。
 - ③正確に読み、書くために、日常生活においても、つねに正確に聞き、話すことに留意すること。
- 本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】

平常点 75 パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）
提出物 25 パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

- ・毎回、日本語の論理的文章を書く機会を設けます。
- ・提出された文章は全て添削して返却します。
- ・留学生の間違いやすい語法等の例を挙げ、説明します。

【学生が準備すべき機器他】

各自、パソコンを持参してください。

【その他の重要事項】

春学期の国際文化研究日本語論文演習 A からの継続履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近現代日本文学
<研究テーマ> 村上春樹ほか
<主要研究業績> 『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹スタディーズ 2008 - 2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第 4 輯』『村上春樹研究叢書第 5 輯』『村上春樹研究叢書第 6 輯』『村上春樹研究叢書第 7 輯』（日本語版）等

【Outline and objectives】

The foreign students that Japanese is not mother tongue read Japanese logical sentences and practice writing it to extend ability to write the master's thesis of own specialized field.

国際文化研究日本語論文演習 C

浅利 文子

実務教員：**【授業の概要と目的（何を学ぶか）】**

日本語を母語としない留学生が、日本語で修士論文を書き出す準備を整え、実際に執筆しながら論文の書き方や日本語表現について学ぶ。

【到達目標】

- ・修士論文完成までのスケジュール（概要発表会・中間発表会等）を確認する。
- ・従来の修士論文の体裁（構成・分量・注の付け方・図表の入れ方・参考資料の掲載方法・文体・印字体等）を確認する。
- ・修士論文の主題と副題を決める。
- ・修士論文の構成（章立て・各章の分量・各章の内容と節の数やその分量）を決める。
- ・目次を書く。
- ・概要発表会の準備をする（レジユメの準備、口頭発表・質疑応答の練習等）
- ・修士論文の序論、あるいは第 1 章を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP1」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

最初の 7 回で修士論文を書き始めるための具体的な準備を行い、その後、実際に修士論文を書き始めます。準備の段階では、まず、今まで国際文化研究科に提出された修士論文の体裁を確認し、各自のテーマに従って修士論文の構想を具体的にまとめます。次に、7 月末の概要発表会、10 月末の中間発表会のレジユメの書き方を学び、口頭発表・質疑応答の練習をすることによって、修士論文の構想・テーマを具体化し深化させます。第 8 回からは、各自修士論文の序論あるいは第 1 章を書き始めます。段落と段落、節と節がそれぞれ文章としてのまとまりを持ち、論理的構成の下で互いに関連し合うことを学ぶことを目標として、一つの章を完成させることを目標とします。受講生の希望と実態に合わせて内容を変更する可能性があります。春学期は、当面の間オンライン授業を行い、国際文化研究科の判断で可能となった場合は対面授業を行います。オンライン授業では、学習支援システムにおいて、添削した課題に説明を加えて提出の翌日までに返却します。対面授業では、次回授業までに添削して返却し、質問があれば説明をします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	・授業の目的と内容・方針の説明 ・各受講生の修士論文のテーマと進捗状況の確認
第 2 回	従来の修士論文の体裁を確認する	・構成、分量、注の付け方、図表の入れ方、参考資料の掲載方法、文体、印字体等
第 3 回	概要発表会のレジユメの書き方	・概要発表会のレジユメの書き方について講義 ・レジユメを書く
第 4 回	レジユメ提出・添削	・各人のレジユメを添削 ・質疑応答
第 5 回	レジユメに基づいて口頭発表の練習①	・声の出し方、話し方 ・時間の使い方 ・質疑応答の対応の仕方
第 6 回	レジユメに基づいて口頭発表の練習②	・概要発表会、中間発表会、学会発表等のスケジュールを確認
第 7 回	スケジュール確認 修士論文の主題・副題、論文構成を確認する	・主題と副題、章立てと分量分配を書いて提出
第 8 回	修士論文を書く①	・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出
第 9 回	修士論文を書く②	・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第 10 回	修士論文を書く③	・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第 11 回	修士論文を書く④	・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第 12 回	修士論文を書く⑤	・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答

- 第13回 修士論文を書く⑥
・序論あるいは第1章の書いたところまで提出
・添削、質疑応答
- 第14回 修士論文を書く⑦
・序論あるいは第1章の書いたところまで提出
・添削、質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文の内容については、指導教官から適切な指導を受けてください。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】

平常点 75 パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）
提出物 25 パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

修士論文を書き始める準備をするともに、論文を書き進めながら、論文の論理的構成や日本語表現について、逐次アドバイスを受けることができます。修士論文執筆のペースメーカーとして利用できます。

【学生が準備すべき機器他】

各自パソコンを持参してください。

【その他の重要事項】

国際文化研究日本語論文演習A・B受講者が継続履修することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>近現代日本文学

<研究テーマ>村上春樹ほか

<主要研究業績>『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹スタディーズ 2008 - 2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第4輯』『村上春樹研究叢書第5輯』『村上春樹研究叢書第6輯』『村上春樹研究叢書第7輯』（日本語版）等

【Outline and objectives】

The foreign students that Japanese is not mother tongue learn how to prepare and begin to write a master's thesis in Japanese.

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A（代表シラバス）

興石 哲哉、岩川 ありさ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程1年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行います。当座の目標として、M2生が主に発表する7月の構想発表会でそれまでの成果を発表することを念頭に置きます。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図りながら進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	修士1年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言。
2	文献サーベイと調査①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
3	文献サーベイと調査②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
4	文献サーベイと調査③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
5	文献サーベイと調査④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
6	文献サーベイと調査⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
7	文献サーベイと調査⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
8	文献サーベイと調査⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
9	文献サーベイと調査⑧	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
10	文献サーベイと調査⑨	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
11	研究成果のまとめ①	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う。
12	研究成果のまとめ②	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う。
13	研究発表準備①	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う。
14	研究発表準備②	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing their Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B (代表シラバス)

興石 哲哉、岩川 ありさ

実務教員：**【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】**

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の構想発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士2年春学期及び夏学期休暇中の研究成果を共有する。
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を検討する。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第2稿を提出し、それをもとに議論する。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導を行う。
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論を行う。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト (教科書)】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

栗飯原 文字

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行う。7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表し、広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 A と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言
2	文献サーベイと調査①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
3	文献サーベイと調査②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
4	文献サーベイと調査③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
5	文献サーベイと調査④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
6	文献サーベイと調査⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
7	文献サーベイと調査⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
8	文献サーベイと調査⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
9	文献サーベイと調査⑧	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
10	文献サーベイと調査⑨	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
11	研究成果のまとめ①	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
12	研究成果のまとめ②	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
13	研究発表準備①	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う
14	研究発表準備②	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/the Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing the Master's thesis/ the Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

栗飯原 文子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、及び口頭発表を指導する。論文の骨子を 11 月の構想発表会で発表し広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 B と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画の検討
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第 2 稿を提出し、それをもとに議論
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/the Research paper.

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

岩川 ありさ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行います。当座の目標として、M2 生が主に発表する 7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表することを念頭に置きます。修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」と連携を図りながら進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有、教員からのフィードバックと助言。
2	文献サーベイと調査①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
3	文献サーベイと調査②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
4	文献サーベイと調査③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
5	文献サーベイと調査④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
6	文献サーベイと調査⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
7	文献サーベイと調査⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
8	文献サーベイと調査⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
9	文献サーベイと調査⑧	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
10	文献サーベイと調査⑨	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
11	研究成果のまとめ①	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う。
12	研究成果のまとめ②	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う。
13	研究発表準備①	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う。
14	研究発表準備②	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing their Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

岩川 ありさ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の構想発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士2年春学期及び夏学期休暇中の研究成果を共有する。
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を検討する。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第2稿を提出し、それをもとに議論する。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導を行う。
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

佐藤 千登勢

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程1年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行います。当座の目標として、M2生が主に発表する7月の構想発表会でそれまでの成果を発表することを念頭に置きます。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図りながら進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	修士1年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有、教員からのフィードバックと助言。
2	文献サーベイと調査①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
3	文献サーベイと調査②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
4	文献サーベイと調査③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
5	文献サーベイと調査④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
6	文献サーベイと調査⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
7	文献サーベイと調査⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
8	文献サーベイと調査⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
9	文献サーベイと調査⑧	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
10	文献サーベイと調査⑨	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
11	研究成果のまとめ①	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う。
12	研究成果のまとめ②	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う。
13	研究発表準備①	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う。
14	研究発表準備②	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing their Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

佐藤 千登勢

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の構想発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士2年春学期及び夏休業中の研究成果を共有する。
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を検討する。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第2稿を提出し、それをもとに議論する。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休業中の論文完成に向けた計画・指導を行う。
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

曾 士才

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行う。7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表し、広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 A と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言
2	文献サーベイと調査①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
3	文献サーベイと調査②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
4	文献サーベイと調査③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
5	文献サーベイと調査④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
6	文献サーベイと調査⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
7	文献サーベイと調査⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
8	文献サーベイと調査⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論

- 9 文献サーベイと調査⑧ 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
- 10 文献サーベイと調査⑨ 履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
- 11 研究成果のまとめ① 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
- 12 研究成果のまとめ② 履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
- 13 研究発表準備① 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う
- 14 研究発表準備② 履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/the Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing the Master's thesis/ the Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

曾 士才

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、及び口頭発表を指導する。論文の骨子を 11 月の構想発表会で発表し広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 B と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画の検討
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第 2 稿を提出し、それをもとに議論

13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/the Research paper.

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

高柳 俊男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行います。当座の目標として、M2 生が主に発表する 7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表することを念頭に置きます。修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」と連携を図りながら進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言。
2	文献サーベイと調査①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
3	文献サーベイと調査②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
4	文献サーベイと調査③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
5	文献サーベイと調査④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
6	文献サーベイと調査⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
7	文献サーベイと調査⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
8	文献サーベイと調査⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
9	文献サーベイと調査⑧	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
10	文献サーベイと調査⑨	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
11	研究成果のまとめ①	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う。
12	研究成果のまとめ②	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う。
13	研究発表準備①	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う。
14	研究発表準備②	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行うことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing their Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

高柳 俊男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の構想発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士2年春学期及び夏学期休暇中の研究成果を共有する。
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を検討する。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第2稿を提出し、それをもとに議論する。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導を行う。
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

松本 悟

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程1年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行います。当座の目標として、M2生が主に発表する7月の構想発表会でそれまでの成果を発表することを念頭に置きます。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図りながら進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	修士1年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有、教員からのフィードバックと助言。
2	文献サーベイと調査①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
3	文献サーベイと調査②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
4	文献サーベイと調査③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
5	文献サーベイと調査④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
6	文献サーベイと調査⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
7	文献サーベイと調査⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
8	文献サーベイと調査⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
9	文献サーベイと調査⑧	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
10	文献サーベイと調査⑨	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
11	研究成果のまとめ①	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う。
12	研究成果のまとめ②	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う。
13	研究発表準備①	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う。
14	研究発表準備②	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing their Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

松本 悟

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の構想発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士2年春学期及び夏休業中の研究成果を共有する。
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を検討する。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第2稿を提出し、それをもとに議論する。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休業中の論文完成に向けた計画・指導を行う。
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

森村 修

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程1年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行います。当座の目標として、M2生が主に発表する7月の構想発表会でそれまでの成果を発表することを念頭に置きます。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図りながら進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	修士1年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有、教員からのフィードバックと助言。
2	文献サーベイと調査①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
3	文献サーベイと調査②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
4	文献サーベイと調査③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
5	文献サーベイと調査④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
6	文献サーベイと調査⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
7	文献サーベイと調査⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
8	文献サーベイと調査⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
9	文献サーベイと調査⑧	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
10	文献サーベイと調査⑨	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
11	研究成果のまとめ①	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う。
12	研究成果のまとめ②	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う。
13	研究発表準備①	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う。
14	研究発表準備②	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing their Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

森村 修

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の構想発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士2年春学期及び夏学期休暇中の研究成果を共有する。
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を検討する。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第2稿を提出し、それをもとに議論する。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導を行う。
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

熊田 泰章

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行います。当座の目標として、M2 生が主に発表する 7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表することを念頭に置きます。修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」と連携を図りながら進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有、教員からのフィードバックと助言。
2	文献サーベイと調査①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
3	文献サーベイと調査②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
4	文献サーベイと調査③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
5	文献サーベイと調査④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
6	文献サーベイと調査⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
7	文献サーベイと調査⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
8	文献サーベイと調査⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
9	文献サーベイと調査⑧	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
10	文献サーベイと調査⑨	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
11	研究成果のまとめ①	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う。
12	研究成果のまとめ②	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う。
13	研究発表準備①	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う。
14	研究発表準備②	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing their Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

熊田 泰章

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の構想発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士2年春学期及び夏休業中の研究成果を共有する。
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を検討する。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第2稿を提出し、それをもとに議論する。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休業中の論文完成に向けた計画・指導を行う。
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

興石 哲哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行います。当座の目標として、M2 生が主に発表する 7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表することを念頭に置きます。修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」と連携を図りながら進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有、教員からのフィードバックと助言。
2	文献サーベイと調査①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
3	文献サーベイと調査②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
4	文献サーベイと調査③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
5	文献サーベイと調査④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
6	文献サーベイと調査⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
7	文献サーベイと調査⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
8	文献サーベイと調査⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
9	文献サーベイと調査⑧	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
10	文献サーベイと調査⑨	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイや調査の実施について報告を受け議論を行う。
11	研究成果のまとめ①	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う。
12	研究成果のまとめ②	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う。
13	研究発表準備①	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う。
14	研究発表準備②	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing their Master's thesis/ Research paper.

OTR600G1 - 504

修士論文演習 B

興石 哲哉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の構想発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士2年春学期及び夏休業中の研究成果を共有する。
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を検討する。
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論する。
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論する。
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論する。
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論する。
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第2稿を提出し、それをもとに議論する。
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休業中の論文完成に向けた計画・指導を行う。
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取組みを総合的に評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

OTR700G1 - 001

博士論文演習 I A (代表シラバス)

興石 哲哉、岩川 ありさ

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究分野に関わる文献サーベイを行うことで、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する投稿論文の執筆を進めます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画をおおむね明確にする。
2. 博士論文に関係する投稿論文の執筆を開始する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1 回	これまでの研究の振り返り	修士論文などこれまでの研究成果を再検討し、博士論文との関連や発展の方向性を検討する。
2 回	研究テーマの確認	第 1 回の検討結果をもとに博士論文のテーマを洗練させ、確認する。
3 回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4 回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
5 回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
6 回	文献サーベイ④	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
7 回	文献サーベイ⑤	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
8 回	文献サーベイ⑥	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
9 回	研究報告①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める。
10 回	研究報告②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める。
11 回	研究報告③	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める。
12 回	研究報告④	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める。
13 回	研究計画作成①	博士ワークショップの発表準備等を通して研究計画を検討する。
14 回	研究計画作成②	博士ワークショップの発表準備等を通して研究計画を検討する。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習 (2 単位) では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためですので、それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢 (50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等 (50%) を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

OTR700G1 - 002

博士論文演習 I B (代表シラバス)

興石 哲哉、岩川 ありさ

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究分野に関わる文献サーベイを通して、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関する研究発表及び投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画を明確にする。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。
3. 博士論文に関する最初の学術論文を投稿する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2 回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
3 回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4 回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
5 回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討を行う。
6 回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討を行う。
7 回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8 回	文献サーベイ④	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
9 回	文献サーベイ⑤	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
10 回	論文執筆指導①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
11 回	論文執筆指導②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
12 回	論文執筆指導③	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
13 回	論文執筆指導④	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
14 回	まとめ	秋学期の研究成果のまとめと次年度に向けた春季休暇中の計画を立てる。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習 (2 単位) では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためでするので、それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢 (50 %)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等 (50%) を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of dissertation into a publishable journal article.

OTR700G1 - 003

博士論文演習Ⅱ A（代表シラバス）

興石 哲哉、岩川 ありさ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文に必要な調査を進めることができる。
2. 博士論文に関する2本目の投稿論文の執筆を開始できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

定期的に履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行います。

さらにまた、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返り	1年次及び2-3月の研究成果を報告し、春学期の研究計画を議論する。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
5回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
6回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
7回	調査報告⑥	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
8回	調査報告⑦	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
9回	調査報告⑧	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
10回	調査報告⑨	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
11回	調査報告⑩	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
12回	調査報告⑪	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
13回	研究まとめ	博士ワークショップの発表準備等を通して、春学期の研究成果をまとめる。
14回	秋学期及び夏季休暇の計画	春学期の進展を振り返り、秋学期の研究計画を検討し、夏季休暇中の調査内容を明確化する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためですので、それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.

OTR700G1 - 004

博士論文演習ⅡB（代表シラバス）

興石 哲哉、岩川 ありさ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文の一部にあたる2本目の学術論文を投稿できる。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

定期的に履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行います。学術論文の投稿や学内外の学会での発表を推奨し、その準備や指導教員の研究プロジェクトへの参加などを通じて、研究者としての素養を磨いていきます。

履修者の報告に関しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
5回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
6回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
7回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
9回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
10回	論文執筆指導①	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論する。
11回	論文執筆指導②	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論する。
12回	論文執筆指導③	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論する。
13回	論文執筆指導④	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論する。
14回	まとめ	2年間の研究成果のまとめ、博士論文の構成や目次を検討し、不足する調査内容を明確にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためですので、それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.

OTR700G1 - 005

博士論文演習ⅢA（代表シラバス）

興石 哲哉、岩川 ありさ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文の要旨を完成させる。
2. 博士論文の予備論文（草稿）を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

文献サーベイや調査結果に基づいた博士論文を章ごとに執筆・報告し議論していきます。必要に応じて追加的な文献サーベイを行い、追加調査を実施します。

さらにまた、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1回	執筆・調査計画の立案	2-3月の研究成果の報告。追加調査が必要な項目の洗い出し、博士論文の執筆計画を立案する。
2回	博士論文執筆指導①	博士論文の一部を執筆し報告し、それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する。
3回	博士論文執筆指導②	博士論文の一部を執筆し報告し、それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する。
4回	博士論文執筆指導③	博士論文の一部を執筆し報告し、それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する。
5回	予備論文（草稿）の発表	博士論文の一部を執筆し報告する。それをもとに指導を行う。この頃までに予備論文（草稿）を完成させる。
6回	予備論文（草稿）への指導	予備論文をもとにした議論と指導を行う。
7回	予備審査結果を踏まえた検討	予備審査での各指導教員の指摘を整理し、追加調査や文献サーベイを検討する。
8回	追加調査報告・文献サーベイ①	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する。
9回	追加調査報告・文献サーベイ②	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する。
10回	追加調査報告・文献サーベイ③	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する。
11回	口頭発表準備①	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを議論する。
12回	口頭発表準備②	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを議論する。
13回	口頭発表準備③	博士ワークショップの口頭発表準備等を通して博士論文の全体構成を固める。
14回	博士論文の骨子の確定	博士ワークショップでのコメントを踏まえて、博士論文全体の構成と内容を見直し本格的な執筆を行なう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためですので、それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50％）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50％）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

OTR700G1 - 006

博士論文演習ⅢB（代表シラバス）

興石 哲哉、岩川 ありさ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文を完成することができる。
2. 博士論文の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

博士論文を完成させ、その内容と意義を公開審査会の場で発表します。また、審査委員からの助言を受けて必要な改善を行います。

さらにまた、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回	博士論文執筆指導	博士学位請求論文完成に向けて最終的な指導を行う。
2 回	投稿論文・学会発表準備①	提出した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする。
3 回	投稿論文・学会発表準備②	完成した博士論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする。
4 回	投稿論文・学会発表準備③	完成した博士論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする。
5 回	口頭発表指導①	博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
6 回	口頭発表指導②	博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
7 回	口頭発表指導③	博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
8 回	学位請求論文の要旨指導①	公開審査会に向けた、学位請求論文の要旨に対する指導を行う。
9 回	学位請求論文の要旨指導②	公開審査会に向けた、学位請求論文の要旨に対する指導を行う。
10 回	学位請求論文公開審査会発表指導①	公開審査会に向けた学位請求論文の発表練習を行う。
11 回	学位請求論文公開審査会発表指導②	公開審査会に向けた学位請求論文の発表練習を行う。
12 回	学位請求論文の修正①	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。
13 回	学位請求論文の修正②	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。
14 回	学位請求論文の修正③	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50％）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50％）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to assist students in writing up their doctoral dissertations.

OTR700G1 - 001

博士論文演習 I A

高柳 俊男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究分野に関わる文献サーベイを行うことで、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する投稿論文の執筆を進めます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画をおおむね明確にする。
2. 博士論文に関係する投稿論文の執筆を開始する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1 回	これまでの研究の振り返り	修士論文などこれまでの研究成果を再検討し、博士論文との関連や発展の方向性を検討する。
2 回	研究テーマの確認	第 1 回の検討結果をもとに博士論文のテーマを洗練させ、確認する。
3 回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4 回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
5 回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
6 回	文献サーベイ④	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
7 回	文献サーベイ⑤	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
8 回	文献サーベイ⑥	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
9 回	研究報告①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める。
10 回	研究報告②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める。
11 回	研究報告③	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める。
12 回	研究報告④	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める。
13 回	研究計画作成①	博士ワークショップの発表準備等を通して研究計画を検討する。
14 回	研究計画作成②	博士ワークショップの発表準備等を通して研究計画を検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためでするので、それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

個別に指示します。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

教員による気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

OTR700G1 - 002

博士論文演習 I B

高柳 俊男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究分野に関わる文献サーベイを通して、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する研究発表及び投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画を明確にする。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。
3. 博士論文に関係する最初の学術論文を投稿する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

フィードバックは授業の中で、あるいはメール等でのやり取りを通じて行われます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2 回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
3 回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4 回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
5 回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討を行う。
6 回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討を行う。
7 回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8 回	文献サーベイ④	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
9 回	文献サーベイ⑤	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
10 回	論文執筆指導①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
11 回	論文執筆指導②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
12 回	論文執筆指導③	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
13 回	論文執筆指導④	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、議論する。
14 回	まとめ	秋学期の研究成果のまとめと次年度に向けた春季休暇中の計画を立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、博士論文の作成のためでするので、それ以上はかかることはもちろんです。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

個別に指示します。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50 %）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を総合的に勘案して評価します。

本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

教員による気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of dissertation into a publishable journal article.

OTR700G1 - 003

博士論文演習Ⅱ A

佐々木 一恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文に必要な調査を進めることができる。
2. 博士論文に関係する2本目の投稿論文の執筆を開始できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

定期的に履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行います。

さらにまた、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返り	1年次及び2-3月の研究成果を報告し、春学期の研究計画を議論する。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
5回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
6回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
7回	調査報告⑥	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
8回	調査報告⑦	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
9回	調査報告⑧	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
10回	調査報告⑨	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
11回	調査報告⑩	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
12回	調査報告⑪	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
13回	研究まとめ	博士ワークショップの発表準備等を通して、春学期の研究成果をまとめる。
14回	秋学期及び夏季休暇の計画	春学期の進展を振り返り、秋学期の研究計画を検討し、夏季休暇中の調査内容を明確化する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

この授業の授業時間外の学習時間は1回につき4時間以上となっています。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢 (30%)、研究の進展 (40%)、投稿論文の執筆状況 (40%) で評価し、60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.

OTR700G1 - 004

博士論文演習ⅡB

佐々木 一恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文の一部にあたる2本目の学術論文を投稿できる。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

定期的な履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行います。学術論文の投稿や学内外の学会での発表を推奨し、その準備や指導教員の研究プロジェクトへの参加などを通じて、研究者としての素養を磨いていきます。

履修者の報告に関しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
5回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
6回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
7回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
9回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する。
10回	論文執筆指導①	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論する。
11回	論文執筆指導②	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論する。
12回	論文執筆指導③	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論する。
13回	論文執筆指導④	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論する。
14回	まとめ	2年間の研究成果のまとめ、博士論文の構成や目次を検討し、不足する調査内容を明確にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修する等しながら、自ら補強することが重要です。

この授業の授業時間外の学習時間は1回につき4時間以上となっています。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢 (30%)、研究の進展 (40%)、投稿論文の執筆状況 (40%) で評価し、60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.

OTR700G1 - 101

博士ワークショップ I A

興石 哲哉、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士課程において具体的に調査研究を行っていくための計画書として論文プロポーザルを書き上げ、構想発表会で発表する。論文プロポーザルには、
 - (1) 研究テーマ
 - (2) 研究の目的
 - (3) 研究の方法
 - (4) 研究計画
 - (5) 期待される成果
 - (6) 文献リスト等
 が含まれていることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、構想発表会において論文プロポーザルを発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出します。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 2 回	討論者②	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 3 回	討論者③	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 4 回	討論者④	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 5 回	討論者⑤	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 6 回	研究発表とコメント①	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 7 回	研究発表とコメント②	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 8 回	研究発表とコメント③	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 9 回	研究発表とコメント④	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 10 回	研究発表とコメント⑤	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 11 回	研究発表とコメント⑥	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 12 回	研究発表とコメント⑦	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 13 回	研究発表とコメント⑧	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。

- 第 14 回 研究発表とコメント⑨ 7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究 A」の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）：20 点

・「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも 5 回参加し、コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する。加えて、構想発表会での他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②論文プロポーザル：80 点

・論文プロポーザルの内容：40 点・論文プロポーザルについての発表：40 点
本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・「国際文化共同研究 A」のうち、いつの授業（5 回）に討議者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。
・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Master's students, as well as to present their research proposals and rough design of their dissertations.

OTR700G1 - 102

博士ワークショップ I B

興石 哲哉、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。

2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。

3. 博士課程において具体的に調査研究を行っていくための計画書として論文プロポーザルを書き上げ、構想発表会で発表する。論文プロポーザルには、

- (1) 研究テーマ
- (2) 研究の目的
- (3) 研究の方法
- (4) 研究計画
- (5) 期待される成果
- (6) 文献リスト等

が含まれていることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、中間発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出します。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 2 回	討論者②	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 3 回	討論者③	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 4 回	討論者④	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 5 回	討論者⑤	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 6 回	研究発表とコメント①	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 7 回	研究発表とコメント②	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 8 回	研究発表とコメント③	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 9 回	研究発表とコメント④	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 10 回	研究発表とコメント⑤	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 11 回	研究発表とコメント⑥	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 12 回	研究発表とコメント⑦	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 13 回	研究発表とコメント⑧	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。

第 14 回 研究発表とコメント⑨ 11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究 B」の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）：20 点

・「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも 5 回参加し、コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する。加えて、構想発表会での他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②論文プロポーザル：80 点

・論文プロポーザルの内容：40 点・論文プロポーザルについての発表：40 点
本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・「国際文化共同研究 B」のうち、いつの授業（5 回）に討議者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。
・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations of Master's students, as well as to present their research proposals and the rough design of their dissertations.

OTR700G1 - 103

博士ワークショップ II A

興石 哲哉、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメントーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の発表に的確なコメントを行うことができる。
 2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
 3. 博士論文の土台となる研究テーマに関する先行研究分析報告書を書き上げる。
- 先行研究分析報告書は、内外の主要な先行研究の分析を行ない、それを踏まえた上で、自身の研究の立ち位置やオリジナリティを示したものであることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」の授業に討議者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、構想発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出します。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	討議者①	「国際文化共同研究 A」の討議者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 2 回	討議者②	「国際文化共同研究 A」の討議者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 3 回	討議者③	「国際文化共同研究 A」の討議者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 4 回	討議者④	「国際文化共同研究 A」の討議者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 5 回	討議者⑤	「国際文化共同研究 A」の討議者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 6 回	研究発表とコメント①	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 7 回	研究発表とコメント②	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 8 回	研究発表とコメント③	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 9 回	研究発表とコメント④	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 10 回	研究発表とコメント⑤	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 11 回	研究発表とコメント⑥	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 12 回	研究発表とコメント⑦	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 13 回	研究発表とコメント⑧	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 14 回	研究発表とコメント⑨	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究 A」の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）：20点

・「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも5回参加し、コメント・シート（毎回A4のシート1枚）を提出する。加えて、構想発表会での他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②先行研究分析報告：80点

・先行研究分析報告の内容：40点・先行研究分析報告についての発表：40点
本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・「国際文化共同研究 A」のうち、いつの授業（5回）に討議者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。

・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations of Master's students, as well as to present their research proposals and part of their dissertations.

OTR700G1 - 104

博士ワークショップ II B

興石 哲哉、石森 大知

実務教員：**【授業の概要と目的（何を学ぶか）】**

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。

2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。

3. 博士論文の土台となる研究テーマに関する先行研究分析報告書を書き上げる。

先行研究分析報告書は、内外の主要な先行研究の分析を行ない、それを踏まえた上で、自身の研究の立ち位置やオリジナリティを示したものであることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」の授業に討議者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、中間発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出します。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第1回	討論者①	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第2回	討論者②	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第3回	討論者③	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第4回	討論者④	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第5回	討論者⑤	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第6回	研究発表とコメント①	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第7回	研究発表とコメント②	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第8回	研究発表とコメント③	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第9回	研究発表とコメント④	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第10回	研究発表とコメント⑤	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第11回	研究発表とコメント⑥	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第12回	研究発表とコメント⑦	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第13回	研究発表とコメント⑧	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第14回	研究発表とコメント⑨	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究 B」の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）：20点

・「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも5回参加し、コメント・シート（毎回A4のシート1枚）を提出する。加えて、構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②先行研究分析報告：80点

・先行研究分析報告の内容：40点・先行研究分析報告についての発表：40点
本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・「国際文化共同研究 B」のうち、いつの授業（5回）に討議者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。

・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations of Master's students, as well as to present their research proposals and part of their dissertations.

OTR700G1 - 105

博士ワークショップⅢ A

興石 哲哉、石森 大知

実務教員：**【授業の概要と目的（何を学ぶか）】**

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文を構成する章を書き、論文として学術雑誌等に投稿する。構想発表会においては、完成した章（投稿論文原稿）の発表に加え、博士論文の構成（章立て）を示し、博士論文の全体像を説明する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」の授業に討議者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、構想発表会においてこれまでの研究成果や博士論文の構成（章立て）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出します。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	討論者①	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第2回	討論者②	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第3回	討論者③	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第4回	討論者④	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第5回	討論者⑤	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程2年の発表に対するコメントを行う。
第6回	研究発表とコメント①	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第7回	研究発表とコメント②	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第8回	研究発表とコメント③	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第9回	研究発表とコメント④	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第10回	研究発表とコメント⑤	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第11回	研究発表とコメント⑥	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
第12回	研究発表とコメント⑦	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。

- 第 13 回 研究発表とコメント⑧ 7 月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。
- 第 14 回 研究発表とコメント⑨ 7 月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究 A」の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）：20 点

・「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも 5 回参加し、コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する。加えて、構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②博士論文を構成する章：80 点

・博士論文を構成する章の内容：40 点
・博士論文を構成する章についての発表：40 点

本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・「国際文化共同研究 A」のうち、いつの授業（5 回）に討論者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。

・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations of Master's students, as well as to present their research proposals and part of their dissertations.

博士ワークショップⅢ B

興石 哲哉、石森 大知

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメントーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文を構成する章を書き、論文として学術雑誌等に投稿する。発表会においては、完成した章（投稿論文原稿）の発表に加え、博士論文の構成（章立て）を示し、博士論文の全体像を説明する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、中間発表会において博士論文の要旨を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出します。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 2 回	討論者②	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 3 回	討論者③	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 4 回	討論者④	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 5 回	討論者⑤	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う。
第 6 回	研究発表とコメント①	11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 7 回	研究発表とコメント②	11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 8 回	研究発表とコメント③	11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 9 回	研究発表とコメント④	11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 10 回	研究発表とコメント⑤	11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 11 回	研究発表とコメント⑥	11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第 12 回	研究発表とコメント⑦	11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

- 第 13 回 研究発表とコメント⑧ 11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
- 第 14 回 研究発表とコメント⑨ 11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究 B」の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）：20 点

・「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも 5 回参加し、コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する。加えて、構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②博士論文を構成する章：80 点

・博士論文を構成する章の内容：40 点・博士論文を構成する章についての発表：40 点

本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・「国際文化共同研究 B」のうち、いつの授業（5 回）に討論者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。

・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline and objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations of Master's students, as well as to present their research proposals and part of their dissertations.

